

# 博士論文

日本語、中国語、英語三言語における移動表現と結果構文の対照研究

(A Contrastive Study of Motion-event and Resultative Constructions in Japanese, Chinese and English)

2024年9月

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程

DU Tianyi

立命館大学審査博士論文

日本語、中国語、英語三言語における移動表  
現と結果構文の対照研究

(A Contrastive Study of Motion-event and  
Resultative Constructions in Japanese, Chinese and  
English)

2024年9月

September 2024

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program: Major in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

DU Tianyi

ト テンオウ

研究指導教員：佐野 まさき 教授

Supervisor : Professor SANO Masaki

目次	
目次.....	i
謝辞.....	iv
<b>序章</b>	
1.1 はじめに.....	1
1.1.1 位置変化を表す移動表現.....	1
1.1.2 状態変化を表す結果構文.....	4
1.1.3 移動表現と結果構文の比較.....	5
1.2 本研究の目的.....	7
1.3 本研究の構成.....	7
<b>第2章 日中英における移動表現の対照</b>	
2.1 はじめに.....	9
2.2 移動について.....	9
2.2.1 移動表現の構成要素.....	9
2.2.2 語彙化タイプによる分類.....	13
2.3 移動表現における分類.....	14
2.3.1 均等枠付け言語.....	15
2.3.2 衛星枠付け言語と動詞枠付け言語.....	16
2.3.3 動詞枠付け言語.....	18
2.4 中国語の分類の再考.....	20
2.4.1 方向補語について.....	22
2.4.1.1 簡単方向補語.....	22
2.4.1.2 複合方向補語.....	23
2.4.2 意味的主要部と統語的主要部の考察.....	24
2.4.2.1 完了アスペクト「了」の位置.....	24
2.4.2.2 否定のスコープ.....	27
2.4.2.3 疑問文の応答.....	32
2.5 三言語の移動表現と完結性.....	36
2.5.1 経路表現.....	36
2.5.2 完結性.....	39
2.6 まとめ.....	45
<b>第3章 日中英三言語の移動に関する要素の考察</b>	
3.1 はじめに.....	46
3.2 移動の意味はどこに含まれているか.....	46
3.3 移動の意味を含む動詞.....	48
3.4 移動の意味を含まない動詞.....	50
3.4.1 「東京までずっと寝ていた」構文における比較.....	50
3.4.1.1 動詞が活動動詞「寝る」の場合、対応する英語と中国語との比較.....	50
3.4.1.2 動詞が活動動詞「泣く」の場合、対応する英語と中国語との比較.....	54
3.4.1.3 動詞が到達動詞「死ぬ」の場合、対応する英語と中国語との比較.....	55
3.4.1.4 動詞が達成動詞「殺す」の場合、対応する英語と中国語との比較.....	57
3.4.1.5 「東京までずっと寝ていた」構文における自然現象.....	59
3.4.2 EO 心理動詞を含む移動表現.....	64

3.5 移動表現における構造的位置と統語的移動の観点から見る前置詞句/ 後置詞句.....	68
3.5.1 PP の構造的位置.....	68
3.5.1.1 起点を表す「水の中から」と From the water.....	68
3.5.1.2 中国語の起点を表す「从水里」.....	71
3.5.1.3 移動の結果位置を表す「水の外に」と Out of the water.....	74
3.5.2 移動表現における目的語の構造的移動.....	76
3.5.3 「病室から」とそれに対応する中国語の検証.....	77
3.5.3.1 起点を表す前置詞句「病室から」.....	77
3.5.3.2 中国語の起点を表す前置詞句「从病房」(病室から).....	79
3.5.3.3 目的語の移動の検証.....	80
3.5.4 「拉出」(引っ張り出す)「拉上」(引っ張り上げる)と対応する日本語の比較.....	81
3.6 まとめ.....	82
<b>第4章 日中英三言語における結果構文</b>	
4.1 はじめに.....	84
4.2 三言語の結果構文について.....	84
4.3 三言語における結果構文の動詞と結果述語の関わり.....	87
4.3.1 日本語と中国語における結果構文と動詞の中にある状態変化の有無.....	87
4.3.2 因果関係の程度から見た三言語の結果構文の比較.....	89
4.4 三言語における直接目的語制限 (Direct Object Restriction).....	95
4.4.1 日本語、英語と中国語の直接目的語制限.....	96
4.4.2 擬似目的語 (Fake Object).....	97
4.4.2.1 再帰代名詞.....	98
4.4.2.2 譲渡不可能/所有名詞.....	99
4.4.2.3 下位範疇化されない名詞.....	100
4.4.2.4 非選択的他動詞結果構文.....	101
4.4.3 中国語には直接目的語制限があるか.....	103
4.4.3.1 中国語における直接目的語制限の考察の概観.....	103
4.4.3.2 直接目的語制限は働いているか.....	105
4.4.4 疑似主語 (Fake Subject).....	114
4.5 まとめ.....	119
<b>第5章 日本語、中国語、英語における移動表現と結果構文</b>	
5.1 はじめに.....	120
5.2 移動表現と結果構文の共通点と相違点.....	122
5.2.1 同一言語の中での移動表現と結果構文の類似性.....	122
5.2.2 ケジメの有無から見る三言語の移動表現と結果構文.....	126
5.2.3 移動表現と結果構文にある「派生的/強い結果構文」「本来的/弱い結果構文」との 比較.....	130
5.3 三言語における結果構文と移動表現における直接目的語制限.....	134
5.3.1 直接目的語制限は移動表現に通用するか.....	134
5.3.2 構造距離叙述関係仮説からの説明.....	137
5.3.2.1 移動表現の統語構造と構造距離叙述関係仮説.....	137
5.3.2.2 結果構文の統語構造と構造距離叙述関係仮説.....	140
5.4 まとめ.....	142

## 第6章 結論

6.1 日本語、中国語、英語の三言語の移動表現.....	144
6.2 日本語、英語、中国語の三言語の結果構文.....	145
6.3 日本語、英語、中国語の三言語の移動表現と結果構文の共通点と相違点.....	146
6.4 本研究の意義.....	147
6.5 今後の課題.....	148
<b>参考文献.....</b>	<b>150</b>

## 謝辞

本論文は、筆者が立命館大学言語教育情報研究科の修士課程に入学し、文学研究科博士後期課程進学を経て今日に至る7年の歳月をかけ、完成させた博士論文です。数多くの方々からのご指導並びにご支援があったからこそ、本論文を書き上げることができました。ここにこの旨を記して深く感謝の意を表します。

最初に、指導教員である佐野まさき先生に深謝申し上げたいと思います。先生には、平素の研究についてのアドバイスはもとより、研究することの純粋な楽しさを教えていただきました。この論文は先生との議論の中で生まれたと言っても過言ではありません。先生との議論を通じて、研究者として必要な知識や論理的な思考力を身につけられたこと、研究と真摯に向き合う姿勢、研究者のあるべき姿を学べたことは筆者にとってかけがえのない財産となりました。

副指導教員である岡本雅史先生、そして根本浩行先生をはじめとする英語圏の先生方からは多くの有益かつ示唆的なコメントをいただきました。それぞれ専門が異なる先生方の違った視点から、論考の問題点をご指摘いただいたことは感謝に耐えません。言語教育情報研究科修士課程の指導教員であった佐々木冠先生、副指導教員であった津熊良政先生には、言語学について、右も左もわからない修士院生時代から現在まで、変わらぬご鞭撻を賜り、言語研究者としての基礎を叩き込んでいただきました。

今筆者がここにある「奇跡」とも言える人生の道のりを振り返ってみると、そのいくつもの岐路で、数多の「贵人」（人生の道を導いてくれる人）との出会いがありました。こうした出会いがあったればこそ、こうして筆者は存在しているのだと考えます。筆者は、大学一年生のとき、非常に熱心で洞察力に富む牟傭先生に、日本語を専攻することへの自信をいただきました。さらに、学部生時代、担任の先生をはじめ多くの先生方からの薫陶を受けることで、大勢の人の前で意見を述べるのが苦にならないほど鍛えられはしましたが、中国の一地方大学にあって、この先どうやって日本語を習得すればいいのかと思案に暮れていました。そんなとき、言語交換のウェブサイトで、筆者の人生を変える「贵人」津熊良政先生と出会いました。この出会いがなければ、立命館大学はもちろん、日本にも来ることもなかったでしょう。そして、来日後、日本語の上達のはかばかしくないことに悩んでいたとき、西安外国語大学の孫遜先生から、「外国人ですから、間違えるのは当然です」とのお言葉をいただきました。この瞬間、筆者の中で、自分が目指すべき将来の研究者像が青写真のごとく形作られました。すると、日本の生活を積極的に楽しもうという気持ちも高まり、これが立命館大学卓球部の川面創監督の知遇を得ることにつながりました。そして卓球部の通訳を務めたことが縁となって次々と交流の輪が広がり、立命館孔子学院で二年間、中国語教育に携わる経験を積むことができました。日本語教育については、京都経済短期大学の行本則夫先生に大変お世

話になっています。

大阪大学の名誉教授である杉村博文先生には聴講の機会をいただき、筆者の中国語学で欠けている部分をカバーすることができました。そして、英語圏文化専修の「戦友」ともいえる Marina さん、張蘭楨さんをはじめとする立命館大学文学研究科英語圏文化専修の学友、一緒に博士後期課程に入学した文学研究科の劉安琪さん、祁蘇曼さん、言語教育情報研究科の先生方、言語教育情報研究科の親友にあたる胡旭さん、言語教育情報研究科の後輩たち、いろいろ研究会（いろ研）、移動・空間・時間研究会（いくじ研）メンバーの皆様がいたからこそ、落ち込んだときや研究に行き詰まったときも立ちどまることなく、様々な困難を乗り越えてここまで歩んでくることができました。

一路走来，感谢生命中遇见的每一个“贵人”，因为他们，才有了今天的我。在 29 岁这一年，遇到了王道姐姐，对于对未来只有一个模糊影子的我，终于有了具体的意像，坚定要像姐姐一样，要做一个正直、诚实、谦虚、温暖、能够成为依靠的人。希望自己能够闪闪发光，让身边的人温暖、快乐！

（29 歳になった年に、憧れの人、王道姐姐に会いました。未来にぼんやりしたイメージしかない私は、彼女のような誠実、謙虚、温かい、頼りがいのある人になりたいと思いました。輝いて、周りの人々を温かく、幸せにしたいと思います。）

最後に、言語学者になるという夢、博士学位を取るという夢を追いかけることを応援してくれた家族に、心からの感謝を捧げたいと思います。

感谢走得很慢，但是一直在奋力向前的自己。

（のろまだが、常に頑張っって前に向かって進むことができる自分自身に感謝しています。）

憧れの方はたくさんいますが、私もいつか誰かの憧れになれるでしょうか。

この論文が人生の進路を導いてくださった方々、今まで支えてくださった方々のご恩に報いるものであることを願っています。

## 凡例

本研究での主な言語資料は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」「大数据与语言教育研究所」「北京大学中国言語学研究センター」「国家语委现代汉语语料库」の四つのコーパスからの例である。また、本研究で取り上げた例文には先行研究などでよく引用されている文も含まれている。

挙げた中国語の例に関しては以下のように提示する。

- (1) 走 出 教室。  
歩く 出る 教室  
「教室から歩き出た。」

(1)で示しているように、中国語の例文を提示する際に、一行目は中国語の例文であり、二行目は単語ごとに日本語のグロスを付ける。三行目は対応する日本語訳になっている。

本稿に使用された略語などについて説明する。例文末尾に(BCC)とある例文は、BLCU Chinese Corpus からの引用であり、BCC は「大数据与语言教育研究所」が作成した現代中国語のコーパスである。末尾に (CCL)とある例文は、Center for Chinese Linguistics PKU からの引用であり、CCL は北京大学中国言語学研究センターが作成した現代中国語のコーパスであり、末尾に (CNC)とある例文は、「国家语委现代汉语语料库」からの引用である。末尾に (BCCWJ-NT)とある例文は、現代日本語書き言葉均衡コーパスからの引用である。中国語の例のグロスと日本語の注釈は筆者が加えたものである。\*は文の不適合性を示し、?は文の容認度が低いことを示し、??は文の容認度がかなり低いことを示し、#は本来意図する意味ではない意味で使われている表現である。引用を示していない例文は筆者による作例で、( ) は補足説明、必須ではないものや日本語訳である。

本論文では、例文は章ごとに番号を振り直す。

Abbreviation	Term
CRS	Currently Relevant State (le)
GEN	genitive (de)
PFV	perfective aspect (-le)
Q	question particle (ma)
SA	Solicit Agreement (ba)
MOD	modify (de)
ASP	Aspect Preposition

## 序章

### 1.1 はじめに

本研究は、日本語、中国語、英語の三言語を対象とした、移動表現と結果構文に関する統語論と意味論の観点からの対照研究である。Talmy (1985, 2000)の移動表現に関する類型論の分類では、経路は何によって具現化するかで世界の言語を分類している。しかし、経路の表し方のほか、位置変化を表す要素、移動の意味の出どころ、動詞と位置変化を表す要素の関係などは言語によって異なる。さらに、移動表現は動詞と位置変化を表すものとしばしば共起する。この点で、結果構文が動詞と状態変化を表す結果述語と共起することと類似している。そのほかに移動表現は結果構文とどのように同様な振る舞いをする点があるか、言語によって移動表現と結果構文にはどのように異なる特徴が見られるかを明らかにしたい。

本研究はまず移動表現の位置変化を表す要素に注目し、特に中国語についての Talmy などの分類の妥当性を再考する。次に、日本語、中国語、英語の三言語の移動表現において、移動の意味が動詞、前置詞句/後置詞句、副詞句のうちで、どれに含まれているか、その移動表現はどんな特徴を持っているかを考察する。そして、結果構文においては、日本語、中国語、英語の三言語の動詞と状態変化を表す結果述語にはどんな共通点と相違点を持つか、どんな叙述関係を持っているかを見る。それと同時に、移動表現と結果構文の（位置/状態）変化を表す要素は、三言語において、範疇やそれが表す意味にどんな共通点と相違点があるかを見る。最後に、日本語、中国語、英語の三言語において、結果構文に見られる直接目的語制限、また派生的/強い結果構文と本来的/弱い結果構文という結果構文の分類は、移動表現にも適用されるか、適用されるとしたら、それが移動や変化の対象の解釈にどんな影響を与えているか、という問題から移動表現と結果構文を考察する。本研究は、移動表現と結果構文、および日中英三言語の対照研究の進展に資する研究と考える。

#### 1.1.1 位置変化を表す移動表現

移動表現において、言語間の対照研究では、移動の経路が何によって具現するかという観点からの Talmy (1985, 2000)の類型論が代表的なものである。英語と中国語は同様な振る舞いをし、両言語は日本語と違っているという Talmy の主張を踏まえた研究が多く見られる (Rappaport Hovav & Levin 1996, 1998, Langacker 1999, Goldberg 2006, Levin 2017, 松本 2017a)。一方、中国語は日本語とより似ていると主張する先行研究も多く見られる。その理由は、中国語の移動表現の「動詞+方向補語」からなる「動補」構造を日本語の「様態動詞+移動動詞」からなる複合動詞と対応させて分析する先行研究が少なくないからである (望月 1990b, 島村 2010, 杉村 2000a, 2000b, 2011, 2015, 董

2007)。しかし、中国語の「動補」構造は日本語の複合動詞と対応させてよいのかという問題がある。この問題は、今までの先行研究では扱われなかったところである（呂 1995, 2001, 马 1997, 方 1999a, 1999b, 2002, 2004a, 2004b, 丸尾 2000, 2003a, 崔 2001, 2002, 陆 2002, 王 2009, 濱口 2018）。

日本語と中国語の移動表現の対照研究に関して、中国語の介詞<sup>1</sup>を日本語の助詞と対照する研究が多い（高 2017, 2009, 丸尾 1997, 2001, 2003b, 2004, 2005a, 2005b, 2006）。日本語の移動表現、あるいは日本語と多言語の移動表現の対照研究には、上野 (2007)、松本 (1997, 2008, 2017b)などが見られる。

本研究で扱う移動表現に関して、Talmy (1985, 2000)が提案した類型論が広く知られている。Talmy は世界の言語を衛星枠付け言語 (Satellite-framed language)と動詞枠付け言語 (Verb-framed language)に分類するという二分法 (dichotomy)を取った。Talmy によると、英語と中国語は衛星枠付け言語に分類され、日本語は動詞枠付け言語に分類される。英語、中国語と日本語の違いは以下のように見られる。

(1) The bottle floated into the cave. (Talmy 1985: 69)

Talmy (1985, 2000)によると、様態 (Manner)を表している動詞 float には移動の意味も含まれている。前置詞 into がその動詞の周辺に現れる要素として衛星 (satellite)と見なされる。分類の判断基準となる経路 (Path)が衛星である前置詞によって具現化される場合は、衛星枠付け言語に分類される。中国語では、(1)の英語は次のような中国語になる。

(2) 瓶子 飘 进 了 洞穴。  
瓶 漂う 入る PFV 洞窟  
「瓶が洞窟に漂って入っていった。」

Talmy (1985, 2000)によると、中国語の場合は、分類の判断基準となる経路を表す方向補語「进」(入る)が、主動詞「飘」(漂う)の周囲に現れる衛星である。そのため、英語と同様に衛星枠付け言語になる。日本語では、(1)の英語は次のようになる。

(3) 瓶は漂いながら洞窟の中へ入って行った。

Talmy (1985, 2000)によると、分類の判断基準となる経路が主動詞「行く」で具現化されているため、日本語は動詞枠付け言語に分類される。

---

<sup>1</sup> 先行研究で主に対象としている中国語の介詞は、「在」(～にある)、「顺(着)」(～に沿って、～に従って)「沿(着)」(～に沿って)「绕(着)」(～を回って)「从」(～から)などがある。

しかしながら、Talmy (1985, 2000)の類型論に基づいた分類の再考（出水 2012, 2015, 薛 2012）、Talmy の二分法を廃棄する提案（Beavers et al. 2010）、二分法のほかに、第三の分類という均等枠付け言語（Equipollently-framed language）を提案した分析（Slobin 2004, Chen & Guo 2009）など、Talmy の類型論に疑問を持って、これらのことを主張する先行研究が多い。さらに、中国語では、移動の経路が英語と同様、衛星とみなすのが妥当であるかという問題がある。

類型論の分類に対する疑問のほか、移動の意味はどこから出ているかも再考する必要があると考えられる。Talmy (1985, 2000)は衛星枠付け言語では、移動と様態が動詞に融合していると主張している。walk, run などの移動動詞は確かにそうであるが、明らかに動詞の意味の中に移動の意味が含まれていない場合はどうなるだろうか。

- (4) a. The craft floated<sub>1</sub> on a cushion of air.  
b. The craft moved into the hangar, floating<sub>1</sub> on a cushion of air.  
c. The craft floated<sub>2</sub> into the hangar on a cushion of air.

(Talmy 2000: 31)

(4a)では the craft はただ空中で漂うだけで、移動はしていない。移動の意味のない float を float<sub>1</sub> とすると、(4b)では、float<sub>1</sub> を含む現在分詞節で移動の様態を表し、移動は主節の move で表されている。(4c)の floated<sub>2</sub> は移動の様態だけではなく、移動の意味も含んでいると Talmy は主張する。しかし、移動の意味は動詞の中だけに含まれているのだろうか。次を見てみよう。

- (5) a. He danced in the room.  
b. He danced into the room.

(5a)では、彼が部屋の中で踊るという解釈で、部屋への移動は表していない。(5b)のように、前置詞 in を into にすることで、部屋への移動の意味が出てくる。つまり、(5b)の移動の意味は前置詞で表されている。さらに、移動の意味は前置詞句/後置詞句、副詞句に含まれる場合もある（第3章で詳しく述べる）。

以上のことから、日中英三言語の移動に関する要素をさらに詳しく考察する必要がある。本研究は先行研究を踏まえて、日本語、中国語、英語の三言語を対象に、三言語の移動表現では、移動の意味はどこから出ているか見る必要がある。さらに、動詞とそれと共起する動詞句、副詞句、前置詞句/後置詞句の特徴を考察し、三言語の共通点と相違点を明らかにする。

### 1.1.2 状態変化を表す結果構文

状態変化を表す結果構文に関する研究では、Simpson (1983)や Levin & Rappaport Hovav (1995)などによると、英語の結果構文では深層構造で結果述語が直接目的語と叙述関係になっていないといけない。これは「直接目的語制限 (Direct Object Restriction)」と呼ばれている。さらに、日本語は英語同様、直接目的語制限を守っている (影山 2001: 162) のに対して、中国語では直接目的語制限が働いている例も働いていないと思われる例も見られる (沈 2004、Huang 2006、陽 2008)。しかし、中国語において直接目的語制限が働いていないような例を単なる例外としてみなすか、それとも、そもそも中国語には直接目的語制限があるのかを考える必要がある。

さらに、結果構文において、Washio (1997: 7)は、対象の結果状態が動詞の意味から予測できない場合、その結果構文を **Strong resultative** と呼んでいる。一方、動詞の意味から、対象の結果状態が予測できる場合、その結果構文を **Weak resultative** と呼んでいる。影山 (2001: 164)は前者を「派生的結果構文」と呼び、後者を「本来的結果構文」と呼んでいる。先行研究では、英語と日本語の対照が中心であったが、このような結果構文の分類方法は中国語にも通用するかを見る必要がある。

結果構文の言語間の比較において、日英比較の先行研究の中で、動詞と結果構文の容認性の違いからの対照研究が多く見られる (影山 2001, 2002, 2021, Suzuki 2012, 三原 2022)。日本語と中国語の比較をした先行研究では、中国語の動詞と結果述語の組み合わせを結果複合動詞として、日本語の複合動詞との比較が多く見られる (今井 1985, 沈 2004, 丸尾 2005, 申 2007, 2009, 楊 2008, 崔 2011, 于 2015, 邱 2017, 陳 2019)。しかし、中国語の動詞と結果述語の組み合わせは、日本語の複合動詞と区別して見る必要がある。中国語学では、動詞と結果述語の組み合わせを「動補」構造としてみなす研究が多く見られる (马&陆 1997, 陽 2018, 董 2007, 沈 2003, 石 2002, 王 1996, 1999, 2001)。中国語の結果構文の「動詞+結果述語」の部分の結果複合動詞とみなす先行研究は少なくない中 (呂 1980, 木村 2007, 申 2007, 崔 2013, 濱口 2017, 陳 2019)、多くの先行研究で中国語の結果構文と日本語の複合動詞の対照が盛んに行われている (望月 1990, 楊 2008, 申 2009, 崔 2013, 陳 2019)。例えば、(6a)に見られる日本語「押し倒す」のような複合動詞と(6b)に見られる中国語「推倒」のような表現との対照である。

- (6) a. 太郎は次郎を押し倒した。  
b. 张三 推 倒 了 李四。  
張三 押す 倒れる PFV 李四  
「張三が李四を押し倒した。」

中国語において、「結果複合動詞」と呼ばれることがある表現では、前項動詞 ((6b)の「推」と後項動詞 ((6b)の「倒」との結びつきの強さが、日本語の複合動詞 ((6a)の

「押し倒す」の前項動詞（「押し」）と後項動詞（「倒す」）との結びつきより弱い。なぜなら、「推不倒」（推し倒せない）「推得倒」（推し倒せる）のように、二つの動詞の間に、可能の否定「不」や可能の肯定「得」を入れることができるからである。従って、先行研究のように、中国語の「動詞＋結果述語」を日本語の複合動詞と同様には見ずに、区別する必要がある。本研究では中国語の結果構文と日本語の結果構文を研究対象にし、日本語の複合動詞は扱わない。

本研究は、結果構文の先行研究を踏まえて、日本語、中国語、英語の三言語を対象に、動詞の意味からの、結果述語が表す結果状態の予測可能性によって結果構文が成立するかどうか、そして結果述語の解釈にはどんな共通性と相違点があるかを考察する。具体的には、日本語と英語の結果構文に適応する直接目的語制限や、派生的結果構文と本来的な結果構文という結果構文の分類が、中国語にも適応するかを明らかにする。

### 1.1.3 移動表現と結果構文の比較

Talmy の類型論では、中国語を分類する際の判断基準である衛星を、“the second element of a verb compound in Chinese, called by some the ‘resultative complement’”（中国語の動詞複合語の二番目の要素であり、「結果補語」と呼ばれているもの）と、Talmy (1985)が述べている。Talmy が用いた“resultative complement”は中国語学の「方向補語」と「結果補語」の両方に対応していると考えられる。つまり、Talmy (1985)は移動表現における位置変化の表現と結果構文における状態変化の結果述語を共に“resultative complement”とみなしていることになる。そうすると、移動表現と結果構文にはどのような共通点と相違点があるかが問題となる。Boas (2003)は状態変化を表す前置詞句を Property Resultative と呼び、位置変化を表す前置詞句を Location Resultative と呼んでいる。性質と移動とで区別しているが、広い意味で両方とも Resultative としている。このように、移動表現と結果構文には一定の共通性があることがわかる。具体的に先行研究を見ると、移動表現の位置変化と結果構文の状態変化は一定の類似性が見られるとしばしば指摘されている (Goldberg and Jackendoff 2004, 上野 2007, 米山 2009)。中国語学での先行研究でも、動詞と方向補語の組み合わせだけでなく、動詞と結果補語の組み合わせも「動補」構造とみなされている (王 1996, 1999, 2001, 马&陆 1997, 石 2002, 沈 2003, 董 2007, 陽 2018)。この「動補」構造を日本語の複合動詞と区別して考える必要がある。

日本語と中国語だけでなく、英語でも変化を表す前置詞句から、移動表現と結果構文の繋がりが次に挙げられた(7)と(8)のような例に見られる。

- (7) a. John danced.
- b. John hammered the metal.
- (8) a. John danced into the room.

b. John hammered the metal into a ball. (小野 2007: 71)

c. John danced into the room. (小野 2007: 71)

(7)の動詞は動作動詞 *dance* と *hammer* で、前置詞句で表されている着点句や結果述語を(8a)と(8b)のように加えることで、文に完結性 (telicity)の性質を持たせ、達成事象 (accomplishment)を表すことになる。(8a)の前置詞 *into* が表している経路は、動詞 *dance* が表す事象の、終点 *the room* までの長さを測る働きをしている。(8b)の前置詞 *into* が表している状態変化は、動詞 *hammer* が表す事象の、目的語の変化の結果までの過程を測る働きをしていると言えるだろう。従って、状態変化も、ある種の経路とみなせることを本研究では主張する。さらに、(8b, c)は結果構文であるが、前置詞句 *into a ball, to ice* が状態変化の結果を表している。それに対し、(8a)は移動表現であり、前置詞句 *into the room* が位置変化の結果を表している。結果構文も移動表現も前置詞 *to* や *into* で変化を表す前置詞句を作っている。この点から、前置詞句は移動表現と結果構文に共通する性質があると言えるだろう。似たような現象は、第五章で見るとように日本語の後置詞句についても見られる。

移動表現と結果構文の共通性について、英語の前置詞句と日本語の後置詞句のほかにも、日本語、中国語、英語三言語の移動表現と結果構文の類似性が見られる。一例として、次のような例が挙げられる。

(9) a. John ran to the station (\*, but he didn't arrive).

b. John painted the wall red (\*, but the wall didn't become red).

(10) a. 太郎は西院駅に走って行った (\*が、円町で行くのをやめた)。

b. 太郎は壁を赤く塗った (\*が、赤くならなかった)。

(11) a. 太郎 跑 去 了 西院站 (, \*但是在元町放弃了)。

太郎 走る 行く PFV 西院駅 (しかし、円町でやめた)

「太郎は西院駅に走って行った (\*が、円町でやめた)。」

b. 约翰 涂 红 了 房子 (, \*但是房子没有红)。

ジョン 塗る 赤い PFV 部屋 (\*しかし、部屋は赤くならなかった)。

「ジョンは部屋を赤く塗った (\*が、部屋は赤くならなかった)。」

(9)-(11)の a 文はそれぞれの言語の移動表現の例である。b 文はそれぞれの言語の結果構文の例である。英語の例(9a)の動詞 *run* は位置変化の意味を含んでいない。しかし、英語の結果構文(9b)の *paint*、日中の移動表現と結果構文のそれぞれの例の動詞「(走って) 行

く」「塗る」「(跑)去」「(走って)行く」「涂」「塗る)は、どれも位置変化/状態変化の意味が含まれている。さらに、a文はどの言語も丸括弧内で示しているように、移動の結果、駅という着点に到着したことをキャンセルすることができない。同様にb文は、どの言語も丸括弧内で示しているように、塗るという行為の結果、赤くなるという結果状態をキャンセルすることができない。三言語の移動表現も結果構文も結果をキャンセルすることができないという共通性を持っている。ほかにも、三言語の移動表現と結果構文に、どんな共通性を持っているか、詳しくは第五章で述べる。

本研究は日本語、中国語、英語の三言語において、移動表現と結果構文の変化を表す要素(位置変化と状態変化)を見て、それと動詞との共起関係を考察する。そして、結果構文に適応するとされる直接目的語制限および、派生的/強い結果構文と本来的/弱い結果構文という分類は、移動表現でも似たような見方ができることを主張する。

## 1.2 本研究の目的

結果構文における結果述語の日本語、中国語、英語の三言語間の対照研究は少なく、さらに結果構文の結果述語と、移動表現でそれに対応する位置変化要素との三言語間の対照研究も少ない。本研究では、三言語において、位置変化を表す移動表現と状態変化を表す結果構文における共通点と相違点を解明することを目的とする。特に次に挙げられた課題を解明することで、従来の研究に残されていた問題の解決を目指す。

- ① Talmyの類型論における中国語の移動表現の分類についての妥当性に関し、中国語の移動表現の位置変化を表す方向補語は、どのような特徴を示すか、衛星とは異なるどんな扱いができるか。
- ② 三言語の移動表現において、移動の意味は動詞、前置詞句/後置詞句、副詞句の中で、どれに含まれているか、そしてそれはどんな特徴を持っているか。
- ③ 三言語の結果構文において、動詞と状態変化を表す結果述語にはどんな共通点と相違点を持つか。
- ④ 結果構文に見られる直接目的語制限、派生的/強い結果構文と本来的/弱い結果構文という結果構文の分類は、三言語において、移動表現にも適用可能かどうか、そこから移動表現と結果構文にはどんな共通点と相違点が洗い出せるか。

## 1.3 本研究の構成

本研究は、日本語、中国語、英語三言語の移動表現と結果構文の共通点と相違点を統語論と意味論的視点からの対照を行う。

第2章では、Talmy(1985, 2000)の空間移動の類型論においては、英語と中国語を衛星枠付け言語(Satellite-framed language)に分類し、日本語を動詞枠付け言語(Verb-framed language)に分類しているのを受けて、中国語の衛星枠付け言語という分類は妥当かどうか

かを再考する。従来の研究 (Talmy 1985, 2000, Hsueh 1989, Lamarre 2003, 2007, Özçalışkan et. 2003, 當野他 2003, Tai 2003, Slobin 2004, 小原 2007, Chen & Guo 2009, Yuan 2009, Beavers et al 2010, Spring 2010) では、Talmy と同様に中国語は衛星枠付け言語に分類される立場、あるいはあらたな分類である均等枠付け言語 (Equipollently-framed language) に属するとする立場、さらに、衛星枠付け言語と動詞枠付け言語の両方の特徴を持っているとする立場がある。本研究では、言語を分類する判断基準となる衛星とみなされる中国語の方向補語が実際に衛星としてみなすことができるかどうかを、完了アスペクト「了」の分布、疑問文の応答、否定のスコープの三つの側面から検討する。さらに三言語の対照において、移動表現ではどのような要素が完結性を決めているかについても考察する。

第3章では、日中英三言語の移動表現において、動詞、副詞句、前置詞句/後置詞句の中で、どの要素が移動の成立に関わるかについて分析する。動詞が「寝る」、「泣く」、「降る」、「死ぬ」、「殺す」および対応する英語と中国語などの動作動詞、および心理動詞 (Experiencer verb) の場合、明らかに動詞の中に移動の意味がない。しかし、そのような動詞を使っているにもかかわらず、移動の意味が出てくる「東京までずっと寝ていた」のような特殊な構文や、心理動詞に経路を表す前置詞句を加えた文全体に移動の意味が出てくる構文が三言語にあることを議論する。さらに、三言語において、前置詞句/後置詞句の構造的な位置と統語的移動について考察する。前置詞句/後置詞句が表しているのは、主語の移動の方向なのか、目的語の移動なのか、主語や目的語の居場所なのか、そしてそれに関し三言語にはどんな共通点と相違点があるかを分析する。

第4章では、三言語の結果構文を対照しながら、結果構文で用いられる動詞と結果述語との関わりや直接目的語制限が三言語とも同様に働くかについて考察する。三言語において、どのような要因が結果構文の容認度に影響するか、直接目的語制限のほかに、統語論的な視点からも三言語において共通性があるかどうかを明らかにする。

第5章では、三言語における移動表現と結果構文の共通点と相違点を論じる。具体的には、結果構文に適応するとされる直接目的語制限および、派生的/強い結果構文と本来的/弱い結果構文という分類は、移動表現でも似たような見方ができることを議論する。

最後に第6章で第1章から第5章にかけての内容をまとめ、本研究の主張が三言語の対照研究の進展にどのように資するかを述べる。

## 第2章 日中英における移動表現の対照<sup>2</sup>

### 2.1 はじめに

Talmy (1985, 2000)の空間移動の類型論によると、世界の言語は衛星枠付け言語 (Satellite-framed language)と動詞枠付け言語 (Verb-framed language)の二種類に分類することができる。このうち、英語は衛星枠付け言語に属し、日本語は動詞枠付け言語に属するとされている。英語のように、衛星枠付け言語に分類される言語では、中核的スキーマである経路が前置詞、不変化詞など、衛星と呼ばれる要素によって具現化されている。日本語のように動詞枠付け言語に分類される言語では、中核的スキーマである経路は主動詞によって具現化されている。Talmyによると、中国語は英語と同様、衛星枠付け言語に属しており、経路が衛星とみなされる方向補語によって具現化されている。

本章は、Talmy (1985, 2000)やそれを発展させた Lamarre (2003)などの主張に対して、中国語の移動表現は、英語よりはむしろ、日本語に類似していることを明らかにする。中国語では、Lamarre (2003)の主張に反し、様態のない移動表現だけではなく、様態のある移動表現でも、動詞枠付け言語の特徴を示す構文がある。さらに、中国語の方向補語の特徴を明らかにし、方向補語の文法的性格について新たな見解を示したい。

本章の構成は以下のとおりである。第2節では Talmy による三言語の移動表現の分類、先行研究における中国語の方向補語の説明、Talmy 以外の、中国語の分類に関する先行研究を概観する。第3節では中国語の移動表現の分類や方向補語の文法的性格を再考する。第4節では2節と3節の議論をまとめ、残された問題と今後の研究課題について述べる。

### 2.2 移動について

この節では、Talmy (1985: 69)が主張した、空間移動の類型論による移動表現の分類を見てから、先行研究による第三の分類である均等枠付け言語 (Equipollently-framed language)の定義を見る。そして、三言語の分類を具体的に考察する過程で、先行研究と本章の分類との異同を洗い出し、先行研究の問題点を指摘したい。まず、移動表現の要素から見ていく。

#### 2.2.1 移動表現の構成要素

Talmy (1985, 2000)の空間移動の類型論では、言語を衛星枠付け言語と動詞枠付け言語の二種類に分類している。衛星枠付け言語では、移動表現の意味要素において、移動 (Motion)と様態 (Manner)が動詞に融合し、経路 (Path)が衛星 (Satellite)によって具現化さ

---

<sup>2</sup> 本章は著者が令和2年度に立命館大学文学研究科の立命館文学 (668)へ投稿した杜 (2020)「現代中国語移動表現の動詞枠付けの性質—統語的証拠からの考察と日本語との対照分析」の一部を加筆・修正したものである。

れている。動詞枠付け言語では、移動と経路が動詞に融合し、様態、原因 (Cause)が共事象 (Co-event)として表現されている (Talmy 2000: 220)。

どのような言語が衛星枠付け言語に分類されているだろうか。Talmy (1985: 69)は英語を典型的な衛星枠付け言語であるとして、次のような例文を示している。

(1) The bottle floated into the cave. (Talmy 1985: 69)

Talmy (1985, 2000)によると、浮くという様態と移動が動詞 float に融合し、向かうという経路が前置詞 into によって表されている。このように、中核的なスキーマである経路が前置詞という衛星によって具現する場合は、衛星枠付け言語に分類される。

次は典型的な動詞枠付け言語に分類されるスペイン語の例である。

(2) La botella entró a la Cueva (flotando)  
the bottle moved-in to the cave (floating)

“The bottle floated into the cave.”

(Talmy 1985: 69)

(2)では、経路と移動が動詞 entró に融合し、様態や原因は現在分詞 flotando で具現化されている。このように、中核的なスキーマである経路が主動詞によって具現化する場合は、動詞枠付け言語に分類される (Talmy 1985: 70)。(1)や(2)のように、一つの動詞の中に複数の意味要素が含まれることを Talmy (1985: 61)は語彙化 (Lexicalization)と呼んでいる。

(1)と(2)の移動表現の例から明らかなように、具体的に移動が成立するためには、四つの基本的な構成要素が必要となる。それは、移動、移動物 (図 (Figure))、移動が発生する場所である地 (Ground)、移動物が移動する経路の四つである (Talmy 1985: 60-61)。また、共事象 (Co-event)である様態と原因も構成要素の一つである (Talmy 200: 220)。

具体的に移動が成立するための要素の動詞の中への融合を説明するのに、Talmy (1985: 60, 2000: 26)は、次のような例を挙げて、移動と静止的な位置の維持に関する分類を行っている。なお、移動については、“containing movement or the maintenance of a stationary location” (移動および静止的な位置の移動と維持が含まれる) (Talmy 1985: 60) と述べ、物理的に静止している場合も、移動の一種だとしている。

Manner:	(3) The pencil rolled off the table.	Cause:	(4) The pencil blew off the table.
Motion:	(5) The pencil lay on the table.		(6) The pencil stuck on the table (after I glued it).

(Talmy 2000: 26 (例文番号は杜による))

(3)-(6)の四つの例では、the pencil が Figure であり、the table が Ground であり、off は移動する経路を表し、on は静止的な位置(Location)を表している。(3)の動詞 roll と(4)の動詞 blow は移動を表しているのに対して、(5)の動詞 lay と(6)の動詞 stick は静止状態を表している。移動に伴う共事象としての様態と原因に関しては、(3)の roll と(5)の lay が移動の様態を表しているのに対して、(4)の blow と(6)の stick は原因を表している (Talmy 1985: 61; 2000: 26 筆者和訳)。

英語とスペイン語の例文を参照しながら、衛星枠付け言語と動詞枠付け言語の違いを見てきたが、次は中国語の移動表現の衛星についての Talmy (1985: 102)の説明である。

(7) Another kind of satellite is the second element of a verb compound in Chinese, called by some the 'resultative complement'. (もう一つの種類の衛星は、中国語の動詞複合語の二番目の要素であり、「結果補語」と呼ばれている。)

(Talmy 1985: 102、和訳筆者)

Talmy (1985)がここで述べた'resultative complement'は中国語の「方向補語」と「結果補語」の両方に対応していると考えられる。中国語の移動表現においては、動詞複合語の二番目の要素は方向補語と一般に呼ばれており、resultative complement の直訳である結果補語という言い方は一般的に結果構文において使われている。

具体的な中国語の移動表現の構成要素を見てみよう。(8)で示しているのは移動動詞だけからなる移動表現の例である。

(8) 他 去 了 学校。  
彼 行く PFV 学校  
「彼は学校へ行った。」

(8)では、動詞「去」は移動を表しているが、主語「他」(彼)が歩いて学校へ行ったのか、走って学校へ行ったのか、つまり、どのようにして学校へ行ったのかについて、移動の様態が動詞の意味の中に融合していない。その代わりに、図としての移動物である

「他」が地としての「学校」まで移動する際の経路については、移動を表す「去」に融合していると考えられる。経路が主動詞に融合しているため、動詞枠付け的な性質を持っているのである。衛星枠付け言語に分類される英語の中にも enter、exit など、経路と移動の要素が動詞に融合し、全体として動詞枠付け言語の特徴を持っている文もあるが、これらの動詞はロマンス語からの借用語であると Talmy (1985: 72)は言っている。Talmy (2000: 52)によると、ロマンス語は動詞枠付け言語に属し、経路の意味が移動動詞の中に融合するという特徴がある。

次に示す中国語の例は動詞に様態だけしか含まない例である。

- (9) 他 跑 了。  
彼 走る PFV  
「彼は走った。」  
#「彼は逃げた。」

(9)では、完了アスペクト「了」を用いることで、彼は走るという動作が完了したという解釈になる。彼は走ったことで、どこに到着したかという、位置変化に関する情報は文に含まれていない。次に示す例は様態動詞とさらに経路動詞の両方が含まれている例である。

- (10) 他 跑 去 了 学校。  
彼 走る 行く PFV 学校  
「彼は走って学校へ行った。」

(10)では、彼は走って、学校に到着したという解釈になる。(8)で見たように移動物である「他」(彼)が「学校」まで移動した際の経路の要素が動詞「去」(行く)に含まれている。Talmyの観点からは、(10)は、方向補語である「去」(行く)が衛星として働いている。つまり、経路が衛星として表されているため、衛星枠付け的な性質を(10)は持っていることになる。中国語では、(8)のように動詞枠付け言語的な特徴と、(10)のように衛星枠付け言語的な性質との両方を持っていることが観察される。この点については、中国語を英語と同様に衛星枠付け言語に分類している Talmy の主張と一部食い違いが生じる。中国語の分類の妥当性および方向補語の文法的性格に関しては 2.4 節で具体的に考察を行う。

移動の構成要素について、最後に日本語の例を見てみよう。

- (11) a. 彼は学校へ走っていった。  
b. 母は私たちが座っていたところまで走ってきた。 (BCCWJ-NT: OB4X\_00077)

(11)の「走っていった」と「走ってきた」に注目する。共事象として様態が動詞「走る」に含まれ、経路および移動が主動詞である「行く」「来る」に融合している。Talmyによると、経路が動詞の中に融合している場合は動詞枠付け言語であるため、日本語は動詞枠付け言語に属することになる。

以上、英語、中国語、日本語などの例文から、移動表現におけるどの構成要素が動詞や衛星に融合するかを見てきた。次節から Talmy の論じる語彙化タイプについて見てみ

る。

### 2.2.2 語彙化タイプによる分類

Talmy (1985)は、移動に関する要素である移動、様態、経路、移動物などの中で、どの構成要素が語彙化するかによって、世界の言語を三つの語彙化タイプに分類した。具体的な分類については Talmy (1985: 62-74)では以下のように論じられている。

一つ目のタイプは、英語や中国語のように、移動にとっては、基本的でも必要でもない構成要素（原因や様態など）が動詞に融合し、移動を修飾しながら、基本的な構成要素である経路が衛星に融合しているタイプである (Talmy 2000: 220)。Talmy (1985: 63; 2000: 28)が挙げた英語の例は次になる。

(12) I ran/limped/jumped/stumbled/rushed/groped my way down the stairs.

(Talmy 1985: 63; 2000: 28)

(12)では、動詞 run（走る）、limp（よたよたと歩く）、jump（跳ぶ）、stumble（躓く）、rush（急ぐ）、grope（手探りで進む）が様態を具現化している。つまり、移動の様態が動詞に融合されている。同時に、経路は衛星である前置詞 down で表されている。

英語と同じ衛星枠付け言語に分類される中国語の例は次になる<sup>3</sup>。

(13) 从 楼梯 上 跑 下 来 一个人。  
から 階段 上 走る 下 くる 一人  
「階段から、人が走って降りて来た。」

(Lamarre 2003: 3)

Talmy の観点で中国語の例を分析すると、(13)では、様態と移動が動詞「跑」（走る）に融合しているのに対して、経路は衛星と見なされる複合方向補語である「下来」（降りて来る）に融合している。このように、動詞に融合している要素が、移動と共事象を作る様態や原因であり、経路が衛星と見做される前置詞や方向補語によって具現化される言語は衛星枠付け言語に分類されている。

二つ目のタイプは、日本語のように、移動表現において、経路と移動が動詞に融合し、様態や原因などが共事象として表れるタイプである。次の移動表現がその例である。

(14) そのネズミは引き出しの中から走り出た。

(影山 2001: 42)

<sup>3</sup> 以下、先行研究からの中国語の例の日本語のグロスと和訳は筆者による。

(14)では、複合動詞「走り出る」が使用されている。この複合動詞は、後項動詞「出る」のほうが主動詞であり、前項動詞「走り」が様態として、後項動詞を修飾している。Talmy (1985: 85)の観点で、(14)を見ると、共事象である移動の様態が複合動詞の前項動詞「走る」に融合しているのに対して、経路と移動は複合動詞の主動詞である後項動詞「出る」に融合している。次は動詞の「て形」が使用された例である。

(15) 母は私たちが座っていたところまで走ってきた。 (BCCWJ-NT: OB4X\_00077)

(15)では、共事象として移動の様態を融合している動詞「走る」の「て形」が使用されている。そして、経路と移動が主動詞「来る」に融合している。

三つ目のタイプとしては、カリフォルニア北部の北米先住民の言語であるアツゲウィ語(Atsugewi)に見られるタイプである。Talmy は以下のようなアツゲウィ語の例を示し、その特徴を説明している。

(16) /ʷ-w-uh-staq-ik·-a/ (Talmy 2000: 58)

(16)では、*staq*は動詞語根で、*-ik·*は場所を表す接尾辞で、*uh-*は原因を表す接頭辞である。このうち、移動物が動詞語根 *staq*に融合している (Talmy 1985: 74, 2000: 58)。場所を表す*-ik·*は移動表現の経路に対応する。そうすると、経路が動詞語根周辺の接辞によって具現化する(Talmy 2000: 102)。Talmy はこれを三つ目のタイプとして、アツゲウィ語を衛星枠付け語の一種に分類している。

以上、移動の構成要素、動詞枠付けと衛星枠付け言語の特徴、語彙化による言語分類のそれぞれについて Talmy の説明を紹介した。Talmy による衛星枠付け言語と動詞枠付け言語の分類の特徴をまとめると、次の表 1 になる。

分類	様態／原因の融合先	経路の融合先
衛星枠付け言語	動詞	前置詞などの不変化詞、接辞、方向補語
動詞枠付け言語	共事象	主動詞

表 1 分類の特徴

次の節では、日中英の三言語が他の先行研究では、どのように分類されているかを概観する。

### 2.3 移動表現における分類

日本語が動詞枠付け言語に属し、英語が衛星枠付け言語に属することを主張する先行

研究については、Talmy (1985, 2000)、Özçalışkan et. (2003)、當野他 (2003)、Tai (2003)、Slobin (2004)、小原 (2007)、Chen et. (2009)、Yuan (2009)、Beavers et. (2010)、Spring (2010)など、多数見られる。しかし、中国語の分類については、英語と同じく、移動と様態あるいは原因が動詞に融合しており、衛星枠付け言語に属するのだという Talmy (1985, 2000) の主張以外にも、研究者によって、様々な分類方法が見られる。これらの分類について、Talmy により衛星と呼ばれている方向補語の文法的性格に即せば、どのように分類されるのか、どうしてこのような分類をされたのか、どうして二分類ではなくそれ以外の名前をつけて分類がなされたのかを見る必要がある。

中国語の移動表現の分類に関する先行研究では、四つのアプローチからの研究がある。一つ目のアプローチを代表するのは、Talmy (1985, 2000)が主張している中国語を衛星枠付け言語に分類するアプローチである。二つ目のアプローチを代表するのは、Slobin (2004)と Chen 他(2009)などが主張している均等枠付け言語に分類するアプローチである。三つ目のアプローチを代表するのは、Beavers 他(2010)と Lamarre (2003, 2007)などが主張している中国語は衛星枠付けと動詞枠付けの両方の特徴を持っているとするアプローチである。四つ目のアプローチを代表するのは、Tai (1973)と Hsueh (1989)などが主張している動詞枠付け言語に分類するアプローチである。

### 2.3.1 均等枠付け言語

Slobin (2004)と Chen & Guo (2009)などは中国語が均等枠付け言語 (Equipollently-framed language)に属すると主張している。Slobin (2004)は言語使用と第二言語習得を考察するために、絵本『Frog, where are you?』を用いて、異なる言語の各年齢層の話者が同じシーンに対して、どのような表現方法を使用するかデータを収集した。その中で、各年齢層の話者の中国語の使用状況を考察した結果から、中国語での移動表現では、様態も経路も動詞で表わされており、様態動詞は経路動詞の従属的な存在ではなく、様態動詞も経路動詞も独立して使用することが可能であると見られる。つまり、経路動詞を衛星と対等に扱うことができない。従って、経路を表している動詞は主動詞でもなく、衛星のような付随的な要素でもない。経路と様態や原因などが均等な要素で表されているので、Slobin は、中国語が「均等枠付け言語」であると主張した (Slobin 2004:9)。

Slobin (2004: 226)は次のように「均等枠付け言語」について説明している。

- (17) “equipollently-framed” language, where “both manner and path are expressed by ‘equipollent’ elements—that is, elements that are equal in formal linguistic terms, and appear to be equal in force or significance”. (「均等枠付け」言語では、「様態と経路の両方が『等価』の要素によって表現されている。つまり、要素が言語形式の面で均等で、発話力や重要性も均等である。)

(Slobin 2004: 226 和訳筆者)

Slobin (2004: 226)は中国語の移動表現における様態を表す要素と経路を表す要素が「均等」な要素であるとして、「均等枠付け言語」と名付けた。この点から、Slobin (2004)は中国語を均等枠付け言語と名付けた。しかし、経路動詞と様態動詞が均等的な存在により、経路動詞は独立で使用でき、衛星として見做すことができないが、様態動詞単独では目的語をとれない。よって、様態動詞が経路動詞を修飾していると考えられるため、様態を表す要素と経路を表す要素が均等であるとするのは疑問である。

Chen & Guo (2009)は Talmy の類型論と異なり、どの意味要素が主動詞に融合するかという側面から判断するのではなく、移動に関する語彙の豊富さについて考察している。具体的には、Chen & Guo (2009)は 9 冊の中国語の小説を分析対象として、衛星枠付け言語である英語と、動詞枠付け言語であるトルコ語を対照し、小説の中で使用された移動動詞のトークンの数、移動動詞の構造、地についての描写、様態の代わりになる表現の四つの側面から考察した。その結果、41 種の様態動詞、6 種の中立動詞、12 種の経路動詞が使用されていたことがわかった (Chen & Guo 2009: 1759)。

Chen & Guo (2009: 1759)は、様態動詞のタイプを三言語の比較対象として、以下の表 2 を作った。

	English	Chinese	Turkish
	Satellite-framed language	? -framed language	Verb-framed language
Manner verb types	64	41	26

表 2 Manner verb types in nine novels in English, Chinese and Turkish.

(Chen & Guo 2009: 1759)

Özçalışkan et al. (2003)は衛星枠付け言語での様態動詞の種類が動詞枠付け言語より多いという傾向を明らかにした。Chen & Guo (2009: 1759)はこの理論を根拠にして、中国語の移動表現では、様態動詞の種類数は英語とトルコ語の間であることで、中国語が均等枠付け言語だと主張した (Chen & Guo 2009: 1759-1761)。しかし、Özçalışkan et al. (2003)の理論を援用して、数をもって証明とするのは、根拠として不十分だと考える。

### 2.3.2 衛星枠付け言語と動詞枠付け言語

Beavers et al. (2010) と Lamarre (2003, 2007)などは中国語が衛星枠付け言語、動詞枠付け言語両方の特徴を持っていると主張している。Beavers et al. (2010: 331)によると、大半の言語は、衛星枠付け的表現と動詞枠付け的表現の両方の表現を有している。Beavers et al. (2010: 314)は動詞枠付け言語であるイタリア語とフランス語を例とし、動詞枠付け言語にも、衛星枠付け表現が見られると指摘した (Beavers et al. 2010: 314)。逆に、衛星枠

付け言語である中国語を例とし、衛星枠付け言語にも、動詞枠付け的な表現があると指摘した。例えば、中国語では経路を表す方向補語が、経路のほか、主動詞として使われている「上」(up)、「过」(cross/through)、「进」(into)もある (Beavers et al. 2010: 350)。

(18) 他 上 了 车。  
彼 乗る PFV 車  
「彼は車に乗った。」

(19) 他 跳/ 走/ 踏 上 了 车。  
彼 跳ぶ/ 歩く/ 踏む 乗る PFV 車  
「彼は跳んで/歩いて/\*踏んで車に乗った。」

(Beavers et al. 2010: 350 原文の用例はピンインのみ)

Beavers et al. (2010: 350)によると、(19)のように、様態動詞「跳」(跳ぶ)「走」(歩く)「踏」(踏む)と方向補語「上」で、移動を表しているほか、(18)のように、経路動詞「上」(乗る)は、主動詞として機能することもできる。この場合、動詞枠付け言語と同様の働きをしており、英語に関しては、enter、arrive など、経路が主動詞として働く例もある。そこで、Beavers et al. (2010: 331)は新たな見方を提示した。すなわち、動詞枠付け的な表現が基本であって、衛星枠付け的な表現は特殊なものである。大半の言語には、衛星枠付け的な表現と動詞枠付け的な表現の両方が見られる。また、動詞枠付け言語が、衛星枠付け的に表現できない理由は、動詞枠付け言語の中の語彙的空白によるとの見解を示したのである (Beavers et al. 2010: 331)。つまり、中国語は動詞枠付け言語と衛星枠付け言語両方の特徴を持っていると言える。

Lamarre (2003, 2007)は中国語の移動表現を Agentive motion (動作主を伴う運動)、Self-agentive motion (自己運動)、Nonagentive motion (動作主を伴わない運動) の三つの種類に分類した。Lamarre (2003)によると、Agentive motion と Nonagentive motion では、様態動詞と方向補語で移動を表すので、衛星枠付け言語の特徴を表している。Self-agentive motion では、様態動詞と方向補語で移動を表す構文と、経路動詞が主動詞として働く移動構文がある。よって、中国語は衛星枠付け言語と動詞枠付け言語の両方の特徴を持っていると主張した。Lamarre (2003: 8)は以下のような二種類の Self-agentive motion の具体例を示した。

(20) 那 几个 小孩 走 过 去 又 走 回 来。  
あの 幾つか 子供 歩く 越える 行く また 歩く 戻る 来る  
「その数人の子供たちは歩いて行ってまた戻ってきた。」

(21) a. 你 回 来。  
あなた 戻る 来る  
「君、帰って来い。」

b. 我 不 回 去。 你们 全都 欺负 我。  
私 NEG 戻る 行く あなたたち 全部 虐める 私  
「私は戻らない。皆が私をいじめる。」

(Lamarre 2003: 8)原文の用例は中国語のみ

0での移動表現は、様態動詞「走」(歩く)と衛星である経路「过」(渡る)と「回」(戻る)で、動作主が自分で移動していることを表し、衛星砕付け言語の特徴を示している。一方、(21)では、「回」(戻る)が述語動詞として、経路を表していることで、動詞砕付け言語の特徴を示している。このように、Lamarre (2003: 6)は、中国語が動詞砕付け言語と衛星砕付け言語の両方の特徴を持っていると主張した。しかし、様態動詞と経路動詞が同時に存在する移動表現でも、日本語と同様、経路を主動詞が担うこともできると分析できる。

### 2.3.3 動詞砕付け言語

Tai (2003)は Talmy の類型論において、resultative verb compounds についての分析に疑問を持った。Tai (2003)は衛星として見做され、resultative complement と呼ばれている要素の分析について再検討した。Tai (2003)の視点では心理言語学的論拠から、中国語母語話者では事象の結果に注目する一方、英語母語話者はより事象の過程に注目している。Tai (2003)は次のような結果構文の例を挙げている。

(22) 她 嫁 错 了 老公。  
彼女 お嫁になる 間違う PFV 旦那  
「彼女は合わない人(違う人)のお嫁になった。」

(23) She has married the wrong husband.

(Tai 2003 : 304 原文の用例はピンインのみ)

Tai (2003)によると、(22)のように、中国語では、結果述語である「错」(間違う)は動作である「嫁」(お嫁になる)の結果を表し、動詞を修飾している一方、(23)の英語では、形容詞である wrong は目的語である husband を修飾している。中国語の結果構文では、V2 のほうが main event を表し、述語の中心である。

(24) 太郎 毒 死 了 花子。  
太郎 毒殺する 死ぬ PFV 花子  
「太郎は花子を毒殺した。」

(25) \*太郎 毒 了 花子。  
太郎 毒殺する PFV 花子

(Tai 2003 : 308) 原文の用例はピンインのみ、一部改変

(24)の V1「毒」(毒殺する)は手段を表し、V2「死」(死ぬ)は毒殺した結果を表している。(25)では、「毒」(毒殺する)は目的語である「花子」(花子)をとることができず、非文になっている。Tai (2003: 308)によると、「毒」は「死」と共起する場合、動詞として働く必要はない。移動表現についても、Tai (1973)は次のような例を提示した。

(26) 太郎 飞 过 了 英吉利海峡。  
太郎 飛ぶ 渡る PFV イギリス海峡  
「太郎はイギリス海峡を飛び越えた。」

(27) 太郎 过 了 英吉利海峡。  
太郎 渡る PFV イギリス海峡  
「太郎はイギリス海峡を越えた。」

(28) \*太郎 飞 了 英吉利海峡。  
太郎 飛ぶ PFV イギリス海峡

(Tai 2003 : 309-310) 原文の用例はピンインのみ、一部改変

(26)で示しているように、様態が動詞「飞」(飛ぶ)に融合し、経路が補語「过」(渡る)に融合されている。Talmyはこの融合の仕方をする中国語を衛星砕付け言語に分類している。しかし、Tai (2003: 309-310)が述べているように、二番目の要素が主動詞として単独で存在することができ、そして、完了アスペクト「了」の分布でも証明できる。(27)では、「过」(渡る)が主動詞として働くことができ、完了アスペクト「了」も後に続くことができる。一方、(28)では、様態動詞「飞」(飛ぶ)単独では非文になる。Tai (2003: 310)はこのようなことから、「过」(渡る)が述語「飞过」(飛び越える)の中心で、海峡を越えたという結果を含意しているとまとめた。他にも Tai (1973)と Hsueh (1989)は二番目の要素で、補語と呼ばれたものが主要部で、主動詞であるとし、中国語は動詞砕付け言語であると主張している。しかし、Tai (2003)の考察は、心理言語学の観

点から行われたものであるため、本章では、統語的かつ意味的な観点から考察したい。

2.3 節は三言語の分類、中国語の分類に関する異なるアプローチを説明した。次節からは、具体的に中国語の移動表現の特徴を考察し、方向補語の文法的性格について議論したい。

## 2.4 中国語の分類の再考

Talmy (1985)の類型論は、経路を表す方向補語を衛星と見なすことを論拠に、中国語を衛星枠付け言語に分類した。Talmy は次のように衛星について説明している。

... satellites are certain immediate constituents of a verb root other than inflections, auxiliaries, or nominal arguments. They relate to the verb root as periphery (or modifiers) to a head. (衛星は動詞語根の、屈折、助動詞、名詞的項以外の直接構成素である。これらの構成素は、周辺部（あるいは修飾語）が主要部に対するのと同じように、動詞語根と関係している。

(Talmy 1985: 102 和訳筆者)

様態動詞のある移動構文では、様態を表す動詞の後ろに必ず方向補語が付き、両方とも動詞である。中国語の分類の再考に当たっては、方向補語を統語的に考察することが重要であると考えられる。Talmy (1985:102)は衛星が複合動詞<sup>4</sup>の二番目の要素であり、*resultative complement* だと定義した。しかし、中国語の伝統的な文法研究では、機能と意味の違いで *resultative complement* に相当する要素を状態の変化を表す「結果補語」と場所の変化を表す「方向補語」に分ける。この節では移動と関わりのある方向補語を考察する。

Talmy (1985: 102)は *resultative complement* との共起から、動詞を分類している。状態の変化を表す「結果補語」と共起する例は次のように見られる。

(29) 他 跑 累 了。  
彼 走る 疲れる PFV  
「彼は走り疲れた。」

(30) 他 跳 累 了。  
彼 跳ぶ 疲れる PFV  
「彼は跳び疲れた。」

(29)と(30)のように、移動様態動詞「跑」(走る)と「跳」(跳ぶ)は状態変化を表す結果

<sup>4</sup> Talmy は中国語の移動表現における V1V2 の組み合わせを複合動詞にした。

補語「累」(疲れる)と共起できる。

(31) 他 笑 累 了。  
彼 笑う 疲れる PFV  
「彼は笑い疲れた。」

(32) 他 哭 累 了。  
彼 泣く 疲れる PFV  
「彼は泣き疲れた。」

(31)と(32)のように、動作動詞「笑」(笑う)と「哭」(泣く)は状態変化を表す結果補語「累」(疲れる)と共起できる。(29)-(32)の四つとも結果構文を構成している。結果補語についての考察は第五章で具体的に行う。次は(29)-(32)と同様の動詞を用いて、場所の変化を表す「方向補語」と共起する例である。

(33) 他 跑 回 去 了。  
彼 走る 帰る 行く PFV  
「彼は走って帰って行った。」

(34) 他 跳 回 去 了。  
彼 跳ぶ 帰る 行く PFV  
「彼は跳んで帰って行った。」

(35) \*他 笑 回 去 了。  
彼 笑う 帰る 行く PFV

(36) \*他 哭 回 去 了。  
彼 泣く 帰る 行く PFV

(33)-(36)は同様に方向補語「回去」(帰って行った)を用いた。(33)と(34)は文法的で、(35)と(36)は非文になっている。邱 (2017: 103)は、方向補語と共起できるかどうかによって、動詞を2種類に分けることができるとしている。一つは(33)の「跑」(走る)、(34)の「跳」(跳ぶ)と同様に、移動の様態を表し、方向補語と共起することが可能な移動を表す動詞である。Levin 他 (1995: 7)はこのような動詞を「verbs of manner of motion (移動様態動詞)」と名付けた。もう一つは、(35)の「笑」(笑う)、(36)の「哭」(泣く)などと同様に、結果補語と共起する場合は、状態変化の結果を表し、方向補語と共起する場合

は、非文になる動詞である。

本節では移動様態動詞と共起できる方向補語を考察対象として、経路を表す方向補語が主動詞として機能することを明らかにする。

#### 2.4.1 方向補語について

朱 (1982: 125-137)は、「补语：谓词性成分，说明动作的结果或状态。」（補語は述語的な成分で、動作の結果あるいは状態を説明する<sup>5</sup>）と述べている。補語は、機能と意味の違いで「結果補語」「方向補語」「可能補語」「状態補語」「程度補語」に分けられている。また、刘 (1998: 1)によると、「趋向补语指在动词或形容词后作补语得到趋向动词」（方向補語は動詞と形容詞の後に付き、動作の方向を表している）という。

中国語の移動表現では、「简单方向補語」と「複合方向補語」の二種類の方向補語がある (刘 1998:1)。「简单方向補語」と「複合方向補語」は、それぞれ漢字一文字で方向を表す補語と漢字二文字で方向を表す補語のことである。次の節では简单方向補語を含む移動表現を見る。

##### 2.4.1.1 简单方向補語

刘 (1998: 1)によると、简单方向補語には、「来」（来る）、「去」（行く）、「进」（入る）、「出」（出る）、「上」（上がる）、「下」（下る）、「回」（戻る）、「过」（渡る）、「起」（起きる）、「开」（去る）、「到」（着く）がある。Lamarre (2003: 8)が指摘しているように、様態のない移動表現では、経路動詞が主動詞になっており、次のような例文を作ることができる。

- (37) 我 来 了。  
私 来る PFV  
「私が来た。」

(37)では、「来」（来る）は主動詞として働いている。完了アスペクト「了」が動詞の後ろに付いている。この場合、様態動詞がないため、経路が主動詞に融合し、Talmyの類型論に基づくと、日本語と同様、動詞枠付け言語に属するはずである。主動詞と简单方向補語両方とも用いられる例は次のようになる。

- (38) 我 回 来 了。  
私 戻る 来る PFV  
「私が戻って来た。」

---

<sup>5</sup> 以下の中国語原本の翻訳は筆者和訳。

(37)では主動詞として働く「来」(来る)は(38)では簡単方向補語として機能している。

「回」(戻る)が主動詞になっている。この文では、「回来」(戻って来る)が経路を表していると考えられる。「回来」を複合動詞として見なす先行研究も多く見られ、例えば、丸尾 (2005)、木村 (2007)、望月他 (2011)、濱口 (2018)などが挙げられる。しかし、沈 (1997: 18)が述べているように、「不/得」を「回来」のような表現の間に挿入することができる。

(39) 我 回 不 来。  
私 戻る NEG 来る  
「私が戻れない。」

(40) 我 回 得 来。  
私 戻る 助詞 来る  
「私が戻れる。」

(39)と(40)のように、「不」(否定)と「得」(助詞)を入れることで、「回」(戻る)を修飾し、戻ることの可能性について述べている。「不」の場合は「可能性がない」ことを意味し、戻ることができないという解釈になる。「得」の場合は「可能性がある」ことを意味するため、戻ることができるという解釈になる。中国語の移動表現の前項動詞と方向補語との繋がり、日本語の複合動詞の前項動詞と後項動詞の繋がりより弱いと言える。従って、中国語の移動表現を日本語の複合動詞と同様と見ることは避け、区別して考える必要がある。

#### 2.4.1.2 複合方向補語

刘 (1998:1)によると、複合方向補語には、「进来」(入って来る)、「进去」(入って行く)、「上来」(上がって来る)、「上去」(上がって行く)、「回来」(戻ってくる)、「回去」(戻っていく)、「出来」(出てくる)、「出去」(出ていく)、「下来」(降りてくる)、「下去」(降りて行く)、「过来」(こちらに来る)、「过去」(あちらに行く)、「起来」(起きてくる)、「开来」(ピンと伸びてくる)、「开去」(ピンと伸びていく)、「到…来」(...に来る)、「到…去」(...に行く)がある。一般的に、このような補語は複合方向補語と呼ばれているが、(42)で示したように「进来」(入って来る)の間にほかの要素を挿入することができる。

(41) 他 走 了 进 来。  
彼 歩く PFV 入る 来る  
「彼は歩いて入って来た。」

- (42) 他 走 进 了 教室 来。  
彼 歩く 入る 了 教室 来る  
「彼は歩いて教室に入って来た。」

(41)は様態動詞「走」(歩く)と複合方向補語「进来」(入って来る)で移動を表している。(42)は(41)の上に、地の要素、つまり、「教室」(教室)を加えた文であり、複合方向補語と呼ばれる「进来」(入って来る)の間に、完了アスペクト「了」と地の要素「教室」を入れることができる。従って、「进来」は複合しておらず、完了アスペクト「了」を挿入できる移動を表す動詞であることがわかる。次の節からは、従来の研究のように「进」と「来」を補語として見なすべきか、従来の研究の主張とは異なり、主要部として見なすべきかを考察していく。

#### 2.4.2 意味的主要部と統語的主要部の考察

前節では、中国語において Talmy は衛星に見なされた方向補語と呼ばれている要素を見てきた。経路を表している点で、日本語の移動表現にある複合動詞の後項動詞、つまり、主動詞と対応している。中国語の方向補語は日本語の後項動詞と同様、動詞であり、経路を表しているにもかかわらず、Talmy は前者を衛星に、後者を主動詞と見なしている。さらに、衛星と見なされた方向補語は主動詞の特徴を持っているとされるため、主動詞であるかどうかを考察する必要があると考える。

この節では、具体的に完了アスペクト「了」の分布、疑問文の応答、否定のスコープから意味的主要部と統語的主要部を考察する。

##### 2.4.2.1 完了アスペクト「了」の位置

中国語の「了」は主動詞の後ろや文末に位置する要素である。動作の完了を表す場合は、完了アスペクトとして、主動詞の直後に位置する。一方、変化を表す場合は、形容詞、名詞の直後、文末に置くことができる。つまり、完了アスペクト「了」の位置から統語的主要部を確定することができる。この節は、完了アスペクト「了」の位置から方向補語は統語的主要部として扱うべきかどうかを考察する。

朱 (1982: 209)によると、アスペクト助詞「了」は機能上、構造上の特徴の違いに基づいて、使い方が2種類に分けられている。「了<sub>1</sub>」は動作・行為の完了を表し、動詞の後ろにしか現れない。つまり、「了<sub>1</sub>」の分布から、主動詞を判断することができると考えられる。「了<sub>2</sub>」は主に「状況に変化が生じること」を表すが、文を言い切り、「語気を強める」という使い方もある。

- (43) 我 回 了<sub>1</sub> 家。  
私 帰る PFV 家  
「私は家に帰った。」
- (44) 我 跑 了<sub>1</sub> 回 去。  
私 走る PFV 帰る 行く  
「私は走って帰って行った。」
- (45) 天 冷 了<sub>2</sub>。  
天気 寒い CRS  
「天気が寒くなった。」
- (46) 我 二十九岁 了<sub>2</sub>。  
私 二十九歳 CRS  
「私は二十九歳になった。」

(43)と(44)の「了<sub>1</sub>」のは動詞「回」（帰る）、「跑」（走る）の後に置くことで、動作・行為の完了を表している。(45)と(45)は変化の「了<sub>2</sub>」で、(45)は天気が寒くない状態から、天気が寒い状態に変化するという意味で、(46)は二十八歳から二十九歳に変化したという意味になる。

しかし、二つの「了」は常に対立する概念ではなく、ほぼ同じ機能を果たす場合もある。卢 (1991)は二つの「了」が対立していないことを証明できる例を次のように挙げている。

- (47) 你 吃 饭 了<sub>2</sub> 没有?  
あなた 食べる ご飯 PFV NEG  
「君はご飯を食べたか。」
- (48) 你 吃 了<sub>1</sub> 饭 没有?  
あなた 食べる PFV ご飯 NEG  
「君はご飯を食べたか。」

卢 (1991: 275)の原文用例は中国語のみ

(47)と(48)は共に平叙文の文末に否定を表す「没有」を付けた反復疑問文<sup>6</sup>である。(47)の「了」は文末の「了」である一方、(48)の「了」は動詞「吃」(食べる)の後ろに位置する「了」である。この二つの例は同じ意味を表しており、対立していないと言えるだろう。

さらに、刘他 (1983: 209-228)によると、文末に語気詞である「了<sub>2</sub>」が使われる際には、特別な必要がない場合、動作・行為の完了を表す「了<sub>1</sub>」は一般的に省略されている。これは、語気詞である「了<sub>2</sub>」と動作・行為の完了を表す「了<sub>1</sub>」が同じ機能を果たしているからである。よって、文末に「了」を付けることで、主動詞による動作や行為が完了したことを示すことができる。従って、本節では統語的主要部を判断するために、「了<sub>1</sub>」が省略される場合は考察対象とせず、「了<sub>1</sub>」が使える場合のみ考察する。以下、本稿はすべて「了」で表記する。

「移動物」や「地」の要素を用い、完了アスペクト「了」の位置から、移動表現において、統語的主要部は様態動詞であるか、方向補語と呼ばれるものかを観察できる。

次のように主語の移動と移動物の移動で例が作ることができる。

(49) 他 搬 了 回 去。  
 彼 運ぶ PFV 戻る 行く  
 「彼は引越しして戻って行った。」

(50) a. 他 搬 了 家具 回 去。  
 彼 運ぶ PFV 家具 戻る 行く  
 「彼は家具を運んで戻って行った。」

b. 他 搬 了 家具 回 了 去。  
 彼 運ぶ PFV 家具 戻る PFV 行く  
 「彼は家具を運んで戻って行った。」

<sup>6</sup>「反復疑問文」とは述語部分で肯定形と否定形を並べ、回答する側にそのどちらを選ばせる疑問文である。次のような例がある。

(i)  
 你 是 不是 留学生?  
 あなた は (肯定形) ではない (否定形) 留学生  
 「あなたは留学生ですか？」

述語の部分は肯定形である「是」と否定形である「不是」を並べることで、そうであるかどうかを選ばせる文になるが、意味は平叙文の文末に疑問を表す語気助詞「吗」(ですか)を付ける疑問文と同様である。さらに、反復疑問文の一種として、(ii)のように平叙文の文末に否定を表す「没有」を付ける反復疑問文もある。

(ii)  
 你 回 家 了 没有?  
 あなた 帰る 家 PFV NEG  
 「あなたは家に帰ったか？」

(49)の主語の移動の場合、様態動詞である「搬」（運ぶ）の後ろにしか完了アスペクト「了」を置けないことから、統語的主要部が方向補語であることが確認できない。また、(50)のように、「家具」（家具）という移動物を入れると、主語と移動物の移動が現れる。復文になるため、(50b)のように、様態動詞である「搬」（運ぶ）の後ろだけではなく、動詞「回」（戻る）の後ろにも完了アスペクト「了」が現れる。(49)や(50)では、方向補語が主要部であることを確認することができないが、地の要素を入れることで、状況が異なってくる。

(51) 他 搬 回 了 成都。  
 彼 運ぶ 戻る PFV 成都  
 「彼は成都に引越しして、戻った。」

(52) 他 搬 回 了 成都 去。  
 彼 運ぶ 戻る PFV 成都 行く  
 「彼は成都に引越しして、戻って行った。」

(53) a. \*他 搬 了 回 成都。  
 彼 運ぶ PFV 戻る 成都

b. \*他 搬 了 回 成都 去。  
 彼 運ぶ PFV 戻る 成都 行く

(51)-(53)は「成都」という地の要素を入れた例である。(51)は簡単方向補語「回」（戻る）を用いた例であるが、地の要素「成都」は文末に位置し、完了アスペクト「了」は「回」（戻る）の後ろに来ている。そのため、「回」は動詞であることがわかる。また、(52)のように、複合方向補語「回去」（戻って行く）を用いた場合、地の要素は複合方向補語「回去」の真ん中に位置することになる。さらに、(51)と同様、完了アスペクト「了」は「回」（戻る）の後ろに来ることになる。(51)と(52)で観察したとおり、完了アスペクト「了」が「回」（戻る）の後ろに付くことは、統語的主要部が「回」（戻る）になることでも明らかだと言えるだろう。さらに、完了アスペクト「了」を(53a)と(53b)のように、様態動詞「搬」（運ぶ）の後ろに置くと、非文になる。このことで、完了アスペクト「了」の分布から様態動詞「搬」（運ぶ）は統語的主要部ではない証拠にもなるだろう。

#### 2.4.2.2 否定のスコープ

前節では、完了アスペクト「了」の位置から、統語的主要部を考察した。中国語は孤

立語であるため、語形変化が生じず、接辞を持たないので、否定副詞を加えることで、否定のスコープから意味的焦点を考察することができると考えられる。意味的焦点が衛星にならないため、衛星という分類が妥当かどうかを判断する方法の一つであると考えられる。否定の定義と中国語の否定表現から見てみよう。

金水他 (2000: 129)は否定の文法的特性について、以下のように述べている。

「文法的否定形式は、次のような主語と述語からなる最も基本的な（単純な）文では、＜述語否定＝文否定＞であって、主語（属性の持ち主）に述語が表す『動作・変化・状態・特性・質』のような属性が認められない（存在しない）ことを表す、述語の否定＝文の否定になるのは、述語が陳述のセンターとしての機能、すなわち、基本的に話し手の主張（新情報）を担う部分であるからである。」

つまり、否定副詞を句に入れることで、「動作・変化・状態・特性・質」などが否定された動詞の方が主動詞であると考えられる。次に、中国語にある否定表現を見ることにする。

- (54) 他 不 喝 酒。  
彼 NEG 飲む お酒  
「彼はお酒を飲まない。」

(Li and Thompson 1981: 423)

- (55) 他 没(有) 开 门。  
彼 NEG 開ける ドア  
「彼はドアを開けなかった。」

(Li and Thompson 1981: 418)

- (56) 别 关 门。  
(禁止) 閉じる ドア  
「ドアを閉じるな！」

(Li and Thompson 1981: 415)

(Li and Thompson 1981 では、ピンインで表記されている)

中国語の否定方式は、(54)-(56)で示しているように、「不」、「没(有)」、「别」があり、述語の前、主語の後ろに位置する。否定されるのは、否定の後ろにある述語である。中国語の否定文の中で、いずれの否定形が使われるかは、節中の述語の位置にどんな種類の動詞が使われているかによって決まる。状態を表す動詞が使われた場合は、「不」が使われる。動作を否定する場合、動詞の前に「别」を付けることで、命令形式になる (Li and

Thompson 1981: 415-423)。また、出来事の完結を否定する場合には、「没」あるいは「没  
有」が使われる。Li and Thompson (1981: 417)は次のように述べている。「the negative  
particle *méi* (*yǒu*), that is, *méi* with or without *yǒu*, negates the completion of an event.」(「没  
(有)」は出来事の完結を否定する。)

次に、中国語の移動表現における動詞の語彙的アスペクトと否定の関係を考察する。  
Vendler (1957)は、動詞を state 「状態」、activity 「活動」、achievement 「到達」、  
accomplishment 「達成」の四つのアスペクトタイプに分類した。

Vendler (1957)の分類に即して、中国語の移動表現を見てみると、「跑出教室」(教室か  
ら走って出る)を例にとれば、様態動詞「跑」(走る)が進行形を意味する場合、語彙の  
変形はないが、走る動作を次の瞬間にやめたとしても、その人は走ったと言うことがで  
きる。また、「跑了一个小时」(一時間走った)にすると、その一時間の間、その人がず  
っと走る動作をしていたと言える。つまり、「跑」(走る)は、その時間内において、部  
分も全体と同じ性質を持っているという特徴がある。このような性質を持っている動詞  
は activity verbs (動作動詞)に属する。また、終点を持っている「一小时之内跑了一千  
米」(一時間のうちに千メートルを走った)の場合は、その一時間のうちの任意の瞬間  
は、千メートルを走ったとは言えないが、終点に向かって、進んでいるとは言える。こ  
のように、時間をかけて、終点に向かって、進む特徴を持っている「一小时之内跑了一  
千米」(一時間のうちに千メートルを走った)は accomplishment (達成)だと言える。ま  
た、移動表現について、「跑出教室」(教室から走って出た)の「出教室」(教室から出  
る)を見てみると、「出教室」は一瞬で教室から出たことを表すので、「出」と「教室」  
が作る動詞句の特徴をもって、一瞬の出来事を表す achievement (到達)だと言える。一  
方、「跑出教室」(教室から走って出た)のような表現は、走るという時間が継続し、終  
点である「教室から出る」ことに向かって進んでいると考えられるので、「跑出教室」全  
体が作る動詞句をもって accomplishment (達成)だと言える。

Vendler (1957)の語彙的アスペクトの観点から見ると、中国語の移動表現における様態  
動詞のアスペクトは「動作」で、経路動詞と地の要素の組み合わせは「到達」であると  
言える。次は動詞のアスペクトを見ながら、「不」と「没(有)」のスコープを考察してい  
く。

(57) 我 不 会 游泳。(CNC)

私 NEG AUX 水泳

「私は泳げない。」

(58) 我 不 游泳。

私 NEG 水泳

「私は泳がない。」

否定の「不」は述語の前に置くことで、述語を否定している。(57)は、能力を表す助動詞「会」(出来る)の前に「不」を置くことで、泳ぐ能力を否定する意味になる。そして、「会」(出来る)は Vendler (1957)の語彙的アスペクトの観点から見ると、believe、love、know と同じアスペクトを持ち、「状態動詞 (state verbs)」であることがわかる。(58)は、「游泳」(泳ぐ)の前に「不」を置くことで、泳がないという意味で、活動動詞が否定されている。従って、否定の「不」は述語の前に位置し、直後の述語を否定していることがわかる。

4.1 節で考察した 2 種類の resultative complement を含む構文における否定の分析を通して、Vendler (1957)の動詞のアスペクトとあわせて、「没(有)」のスコープを考察する。様態動詞と結果補語の例は次のようになる。

- (59) 我 没(有) 跑。  
私 NEG 走る  
「私は走っていない。」
- (60) 我 没(有) 跑 累。  
私 NEG 走る 疲れる  
「私は走り疲れていない。」
- (61) \*我 跑 没(有) 累。  
私 走る NEG 疲れる

(59)-(61)から、否定を表す「没(有)」は述語の前に位置することがわかる。(59)は「私は走っていない」という意味になる。「没有」によって否定されたのは、「跑」(走る)という動作ではなく、走り始めたという出来事の完結を否定しているのである。(60)は結果補語「累」(疲れる)を加えた例である。「私は走ったが、疲れていない」という意味があり、「没有」の否定のスコープに入っているのは、「没有」の直後にある動詞「跑」(走る)だけではなく、達成を表している「跑累」(走り疲れる)である。Vendler (1957)の語彙的アスペクトの観点から見ると、走ることには終点がなく、ただの活動動詞ではあるが、結果補語「累」(疲れる)を入れることで、疲れたという終点が読み取れる。そして、走るという動作を次の瞬間にやめると、「跑累」(走り疲れる)は成立しないため、「跑累」(走り疲れる)は達成動詞句であることがわかる。つまり、「没有」の否定のスコープに入っているのは、達成を表している動詞句である。(61)のように、「没有」を様態動詞と結果補語の間に置くと、非文になる。「没有」は出来事の完結を否定することしかできないことがわかる。

「没(有)」を「不」に置き換えると、次のようになる。

(62) 我 不 跑。  
私 NEG 走る  
「私は走らない。」

(63) \*我 不 跑 累。  
私 NEG 走る 疲れる

(64) 我 跑 不 累。  
私 走る NEG 疲れる  
「私は走っても疲れない。」

(62)は、「不」は活動動詞「跑」(走る)を否定している。そして、(63)のように、「不」を「跑累」(走り疲れる)という達成を表す動詞句の前に置くと、非文になる。「不」は直後の動詞しか否定できないことがわかる。(64)は「不」を「累」(疲れる)の前に置くことで、「累」(疲れる)だけを否定し、走っても疲れないという意味を表している。

従って、「没有」は出来事の完結を否定することしかできないのに対して、「不」は直後の動詞しか否定できないことがわかる。

以上の例から、否定は概ね動詞をスコープに収め、動詞の前に来る傾向が見られ、「没有」は出来事の完結を否定する。つまり、「没有」のスコープに入っているのは達成を表す動詞あるいは動詞句である。従って、Li & Thompson (1981)が述べた「没有」は出来事の完結というのは到達または達成を表す動詞あるいは動詞句のことだと考えられる。

次に、地の要素がない例文を見る。

(65) 我 没(有) 走 进 去。  
私 NEG 走る 入る 行く  
「私は歩いて入っていない。」

この例文では、「走」(歩く)は活動動詞で、「进去」(入って行く)は有界な経路の要素を提供しているため、「走进去」(歩いて入っていく)は達成の意味を表している。従って、「没(有)」が否定しているのは「走进去」(歩いて入っていく)である。否定のスコープから意味的主要部を判断できない。

次に、地の要素を入れた例文を以下で示す。

(66) 我 没(有) 走 进 教室。

私 NEG 走る 入る 教室

「私は歩いて、教室に入っていない。」(歩いたが、入っていない。)

(66)は、地の要素である「教室」を入れた例文である。以上の(66)の訳語が示しているように、私は歩いたが教室に入っていないという解釈になる。「没(有)」が「进教室」(教室に入る)ことを否定しているのに対して、「走」(歩く)ことは否定していない。つまり、この例文では、「没(有)」は達成を表す動詞句「进教室」(教室に入る)ことを否定しているのである。そして、この達成を表す動詞句では、動詞が「进」(入る)であることで、意味的な主要部は「进」(入る)であると考えられる。この表現から、様態が含まれている移動構文で、地の要素を入れたことで、方向補語の方に意味的焦点があることがわかる。換言すれば、動詞枠付け的な表現になっていると考えられる。

本節では否定のスコープから意味的焦点を考察した。中国語は孤立語であるため、語形変化が生じず、接辞を持たないので、否定を加えることで、否定のスコープから意味的焦点を考察することができると考えられる。「没(有)」は出来事の完結を否定するため、地の要素を移動表現に入れた場合は、方向補語が否定のスコープに収められていることから、方向補語の方に意味的焦点があることがわかる。従って、地の要素を入れた移動表現では、中国語は動詞枠付け言語の特徴を表していると言える。同様に、意味的焦点を考察するには、疑問文の応答からも可能である。次節は、否定のスコープでは判断できない部分も考慮して、影山 (2013)の方法に基づいて、考察を行う。

#### 2.4.2.3 疑問文の応答

この節では、影山 (2013: 10-11)の日本語における複合動詞の意味的中心を判断する方法を参考にして、中国語の移動表現における意味的焦点を考察する。影山 (2013)の判断方法とは、日本語において複合動詞にかかる質問を行い、省略できる項は意味的中心ではないとするものである。つまりこの判断方法によれば、中国語の移動表現において、様態動詞や方向補語で伝えたいことは、意味的中心だけで答えることが可能であり、意味的中心ではない方に置き換えると、不可能あるいは不自然な答えになるということである。以下で示しているのは影山 (2013: 11)から引用した日本語の複合動詞に対する疑問文と答えである。

(67) あなたは鍵をこじ開けたのですか？

a. はい、なんとか開けました。

b.#はい、こじました。

(68) まったく呆れかえりましたねえ？

- a. はい、本当に呆れました。
- b. \*はい、かえりました。

(影山 2013:11)

(67)で示しているように、複合動詞「こじ開ける」にかかる質問に対し、答えとしては、前項動詞である「こじる」を省略し、後項動詞である「開ける」だけで答えることが可能である。逆に、後項動詞を省略し、前項動詞である「こじる」だけで答えることができない。つまり、意味的焦点が後項動詞にあることがわかる。また、(68)では、複合動詞「呆れかえる」に対しての疑問文で、答えとして、前項動詞である「呆れる」だけで答えることができるのに対して、後項動詞である「返る」だけで答えるのは不可能であることを示した。つまり、意味的焦点が前項動詞にあることがわかる (影山 2013: 11)。

このように影山 (2013: 10-11)の判断方法を参考に、中国語の移動表現の意味的焦点を考察していく。

- (69) 可是 不 多 一会儿， 她 又 走 回 来 了。(CNC)  
 でも NEG 多い ちょっと 彼女 また 走る 戻る 来る PFV  
 「しかし、それほど長くない間に (しばらくして)、彼女はまた歩いて帰ってきた。」

(69)は CNC から取り上げた例である。この文の移動表現は、様態動詞「走」(歩く)と複合方向補語は「回来」(戻って来る)の組み合わせである。疑問文とその応答を作ると、次になる。

- (70) 她 又 走 回 来 了 吗?  
 彼女 また 走る 戻る 来る PFV Q  
 「彼女はまた歩いて帰ってきたか。」

- a. 对, 回 来 了。  
 はい、 帰る 来る PFV  
 「はい、戻ってきた。」

- b. #对, 走 了。  
 はい、 走る PFV  
 「はい、歩いた。」

(70)では、「走回来」(歩いて戻って来る)について質問し、答えとしては、前項動詞で

ある「走」(歩く)を省略し、後項動詞である「回来」(戻って来る)だけで答えることができる。逆に後項動詞を省略し、前項動詞である「走」(歩く)だけで答えることはできない。

- (71) 无依无靠 的 在 暴风雨 中 漂 出 去。(BCC)  
身寄りも頼る者もない GEN で 嵐 中 漂う 出る 行く  
「頼れるものがなく、嵐の中で漂って出ていく。」

(71)は BCC から取り上げた例である。様態動詞は「漂」(漂う)で、複合方向補語は「出去」(出て行く)である。疑問文とその応答は以下のようになる。

- (72) 在 暴风雨 中 漂 出 去 了 吗?  
で 嵐 中 漂う 出る 行く PFV Q  
「嵐の中で流れ出ていったのか。」

- a. 对, 出 去 了。  
はい、 出る 行く PFV  
「はい、出ていった。」

- b. #对, 漂 了。  
はい 漂う PFV  
「はい、流れた。」

(72)では、「漂出去」(流れ出て行く)について質問し、答えとしては、前項動詞である「漂」(漂う)を省略し、後項動詞である「出去」(出て行く)だけで答えることができる。逆に後項動詞を省略し、前項動詞である「漂」(漂う)だけで答えることができない。二つの例を見ると、疑問文の答えとして、前項動詞を省略して、後項動詞で答えることが可能であるのに対して、後項動詞を省略して、前項動詞だけで答えることが不可能、あるいは不自然である。従って、意味的焦点が後項動詞にあると考えられる。

次は、地の要素を入れた例である。

- (73) 他们 已经 冲 出 城门, 走 上 吊桥 了。(CCL)  
彼ら もう 駆ける 出る 城門 歩く 上がる 吊り橋 PFV  
「彼らはもう城門から飛び出して、吊り橋に歩いて上がった。」

(73)は CCL から取り上げた例である。この文には二つの動作があり、一つ目の動作で作

った疑問文とその応答は以下のようになる。

(74) 他们 冲 出 城門 了 吗?  
彼ら 駆ける 出る 城門 PFV Q  
「彼らは城門から飛び出したか？」

a. 对, 出 了。  
はい 出る PFV  
「はい、出た。」

b. #对, 冲 了。  
はい 駆ける PFV  
「はい、駆けた。」

「冲出城門」(城門から飛び出す)について質問し、答えとしては、前項動詞である「冲」(駆ける)を省略し、後項動詞とである「出」(出る)だけで答えることができる。逆に後項動詞を省略し、前項動詞である「冲」(駆ける)だけで答えることができない。(73)の二つ目の動作で作った疑問文とその応答は以下のようになる。

(75) 走 上 吊橋 了 吗?  
歩く 上がる 吊り橋 PFV Q  
「吊り橋に歩いて上がったか？」

a. 对, 上 了。  
はい 上がる PFV  
「はい、上がった。」

b. \*对, 走 了。  
はい 歩く PFV  
「はい、歩いた。」

「走上吊橋」(吊り橋に歩いて上がる)について質問し、答えとしては、前項動詞である「走」(歩く)を省略し、後項動詞である「上」(上がる)だけで答えることができる。逆に後項動詞を省略し、前項動詞である「走」(歩く)だけで答えることができない。従って、疑問文の答えとして、前項動詞を省略し、後項動詞で答えることが可能であるのに対して、後項動詞を省略して、前項動詞だけで答えることは不可能、あるいは不自然

であることから、意味的焦点が後項動詞にあると考えられる。

また、Talmy (2000: 219)は以下のように述べていた。

(76)

[...]the framing event constitutes the central import or main point—or what will here be termed the **upshot**—relative to the whole macro-event. That is to say, it is the framing event that is asserted in a positive declarative sentence, that is denied under negation, that is demanded in an imperative, and that is asked about in an interrogative. (枠付け事象はマクロ事象全体に対する中心的意味、あるいは主要な点、あるいは、ここでは**要点**と呼ぶものを構成している。つまり、枠付け事象は肯定平叙文で断定される部分、否定文で否定される部分、命令文で要求される部分、疑問文で尋ねられる部分である。)

(Talmy 2000: 219 和訳筆者)

これまでの考察から見ると、地の要素を入れた移動表現では、方向補語が肯定平叙文で断定され、否定文で否定され、命令文で要求され、疑問文で尋ねられる部分である場合は、方向補語のほうが枠付け事象になることが考えられる。よって、中国語の移動表現の中では、様態動詞が使われる場合でも、動詞枠付け的な特徴を持つ構文があることがわかった。

本節では疑問文を含む応答から意味的焦点を考察した。地の要素が含まれていない場合は、意味的焦点が判断できない一方、地の要素が含まれている場合は、経路を表す後項動詞の方に意味的焦点があることがわかった。従って、中国語の移動表現は、焦点が衛星にならないため、動詞枠付け言語の特徴があると言えるだろう。

## 2.5 三言語の移動表現と完結性

Talmy の中国語の移動表現の分類を再考し、分類の妥当性を考察してきた。本節では、前節と異なる視点から日本語、中国語、英語それぞれの移動表現の特徴と、移動表現の三言語の間の関連性を探る。Talmy の類型論では、経路 (Path)が何によって表現されるかが分類の判断基準になっているが、場所と経路を共に Path として一括で見ている。これに対し、田中・松本 (1997)、影山 (2001, 2002, 2011, 2021)、Goldberg and Jackendoff (2004)、米山 (2009)、松本 (2017a, b)らは、場所 (Place)と経路 (Path)を分けて見ている。本節では後者の分け方に従い、先行研究ではほとんど議論されてこなかった中国語を加えた比較を行う。

### 2.5.1 経路表現

日本語の移動表現では、後置詞「に」「へ」「まで」を用いて、経路あるいは位置変化

を表すことができる。上野 (2007: 112)は「行く」や「来る」のような移動動詞は、「に」「へ」「まで」を用いた経路句と共起できるとし、「泳ぐ」「歩く」「走る」のような移動様態動詞はマデ句と共起できる一方、「に」「へ」とは共起しにくいと述べている。つまり、移動動詞は一緒に共起する後置詞と同様、位置変化を表していると言えるだろう。

(77) a. ジョンは公園 {に／へ／まで} {行った／来た}。 (上野 2007: 112)

b. ジョンは公園まで {行った／来た}。

(78) a. ジョンが岸まで {泳いだ／歩いた／走った}。 (上野 2007: 112)

b. ?ジョンが岸 {に／へ} {泳いだ／歩いた／走った}。

米山 (2009: 27)は、「へ」は着点(goal)を表し、ほぼ英語の to に相当するものと考え」と述べている。一方、Tsujiura (1991)は、マデ句が英語の to 句と同様、着点を表すものと述べている。しかし、「マデ句」は to 句と本当に同様に見做することができるだろうか。次の(79)のように、時間表現との共起可能性から、「まで」と「to」には相違点と共通点が見られる。

(79) a. ジョンは公園まで {30 分で／30 分間} 走った。

b. John ran to the park {in 30 minutes / \*for 30 minutes}.

(79a)のように、日本語では、「30 分で」も「30 分間」も「公園まで」との共起が容認されるため、マデ句には、完結的である「達成」の解釈と非完結的である「活動」の解釈の両方ができることがわかる。つまり、主語のジョンは「公園」に到着したという解釈も、到着していないという解釈もできる。これに対し、(79b)のように、英語では in 30 minutes と共起できる一方、for 30 minutes とは共起できない。それは to the park という to 句が到着点を表し、完結的な「達成」の解釈しかできないからである。つまり、日本語のマデ句と英語の to 句は Tsujimura (1991)のように同様に見ることはできないことになる。そこで、本節では影山・由本(1997)と同様、マデ句を移動の到達範囲として見ることにするが、「まで」と「に」の違いについては、影山 (2011: 153-158)が次の例を使って詳しく述べている。

(80) 私は東京まで夜行バスで行った。(しかし、東京より先は別の乗り物に乗って移動した。)

(81) 私は東京に夜行バスで行った。(旅は東京で終わった。)

(80)のように終点句<sup>7</sup>に「まで」を使った場合は、影山他 (2011: 157)が述べているように、旅の最終的な到達点ではなく、さらにほかのところへ行くという意味の文を続けることができるが、(81)のように「に」を使った場合は、旅の最終的な終点になる。影山 (2011)は次の例からも「まで」と「に」の区別を述べている。

- (82) a. 梯子の途中 {まで/\*に} 上がった／登った。 (影山 2011: 157)  
b. 東京から福岡 {まで/\*に} 一日で往復した。 (影山 2011: 158)

(82a)では、梯子の一番上を目指して移動するが、「途中」は移動の到達範囲であり、「まで」は適切であるが、最終的な到達点を表す「に」は非文になる。(82b)では、東京と福岡の間で往復するため、福岡は最終的な到達点ではない。ゆえに、最終的な到達点を表す「福岡に」を使うと非文になるが、往復する際の途中である折り返し点を表す「福岡まで」なら文法的になる。

本節では詳しく「へ」「まで」「に」の区別や、英語と中国語の対応表現は見ないが、終点句と完結性の関連性や、完結性に影響を与える要因を考察するため、以下では、日本語の例文に後置詞「に」を用いた終点句を考察の対象とする。

距離句と経路との関係は次のような具体的な距離「200 メートル／200 meters」を含む例で見られる。

- (83) a. 彼は駅に 200 メートル走った。  
b. He ran 200 meters to the station. (影山 (編) 2001: 62-63: 一部変更)

影山 (編) (2001: 63)が述べているように、「駅に 200 メートル走った」は駅に着いたことまでは述べていないが、対応する英語の表現 *ran 200 meters to the station* は、駅に到着したという完了結果まで表現している。しかし、どちらの場合も、終点句に具体的な距離表現を重ねた、「駅に 200 メートル」や *200 meters to the station* は、結果状態に至る経路を表していると言えるだろう。距離表現「200 メートル」、*200 meters* を取り除いた「駅に」、*to the station* も同様に経路と考えたい。

次に、英語の移動表現では、日本語の「へ」「に」「まで」のような区別はないが、*to*、*toward* などの前置詞の使い分けで、多様な移動表現を表すことができる。次の例は様態の意味を含まない動詞 *go* と、それを含む様態動詞 *run* を *to* とともに使った例である。

- (84) a. John went to the station.

<sup>7</sup> 移動表現において、場所+{まで/に/へ}の表現をまとめて「終点句」と呼ぶことにする。英語の *to*+場所の表現も「終点句」と呼ぶ。

b. John ran to the station.

(84a, b)のように、様態動詞であろうが、様態の意味を含まない動詞であろうが、toを用いた文は自然である。この点で、様態動詞では不自然な(78b)の日本語と異なっている。また、(84a)も(84b)も、主語の John は、終点の the station に到着している解釈になる。さらに、方向を表す前置詞 toward が使われている次の(85)では、主語の John は 200 meters にかかわらず、the station までまだ到着していない解釈になる。

(85) John ran (200 meters) toward the station.

日本語と比較すると、(79a)の日本語では時間副詞「30分で」と「30分間」の違いで、同じマデ句が完結的と非完結的の解釈の違いを表すが、英語では(83b)と(85)のように、前置詞 to と toward の違いでこれを表す。また、to のときと同様に、toward the station も 200 meters という距離句の有無にかかわらず、経路と考える。

最後に、中国語の移動表現を見ると、日本語の「へ」「に」「まで」のような表現はないが、様態動詞の直後に位置する、品詞的には動詞である方向補語の違いで、英語の前置詞 to, toward と同様の意味を示すことができる。

(86) a. 张三 跑 到 了 车站。  
張三 走る 到着 PFV 駅  
「張三は駅に走って到着した。」

b. 张三 跑 向 了 车站。  
張三 走る 向かう PFV 駅  
「張三は駅に向かって走った。」

(86)の様態動詞「跑」(走る)の意味の中には位置変化が入っていない。(86a)の「到(了)车站」(駅に到着(した))には位置変化の意味が含まれ、到達点を含んだ経路表現になっている。主語である「张三」が駅に到着し、文全体は達成という解釈になる。これは英語の(86b)と同様である。一方、「向」(向かう)が使われている(86b)は、(85)と同様、まだ「车站」(駅)に到着していない解釈になる。

### 2.5.2 完結性

Vendler (1967)の分類による、継続性を持つ活動動詞では、それ自体は完結性を持たないが、時間副詞の違い、終点句の有無、他の動詞との共起、あるいは前置詞／後置詞によって、完結性が影響してくる。まず、次の例を見てみよう。

(87) ジョンは {30 分間 / ??30 分で} 走った。

(87)のように、活動動詞「走る」は継続性を持つため、継続時間を表す時間副詞（以下、継続時間副詞）「30 分間」と共起できるが、完了時間を表す時間副詞（以下、完了時間副詞）「30 分で」と共起すると、（30 分以内で走り始めたという解釈をしない限り）文の容認度が低くなる。次に終点句「駅に」を使った例を見てみる。

(88) a. ??ジョンは駅に走った。

b. ジョンは駅に行った。

c. ジョンは駅に走って行った。

(88a)のように、「走る」が終点を表す「駅に」と共起すると、文が不自然になる。しかし、(88b)と(88c)のように、動詞を移動動詞「行く」にしたり、「走って行く」のように「行く」を「走る」と組み合わせると、自然になる。(88)にさらに時間副詞を加えると次のようになる。

(89) a. ??ジョンは駅に {30 分間 / 30 分で} 走った。

b. ジョンは駅に {\*30 分間 / 30 分で} 行った。

c. ジョンは駅に {30 分間 / 30 分で} 走って行った。

元々不自然な(88a)に、時間副詞「30 分間」あるいは「30 分で」を用いても、(89a)のように、文は不自然なままである。(89b)のように、(89b)の「駅に行く」が、継続時間副詞「30 分間」と共起すると非文になるが、「30 分で」という完了時間副詞と共起すると、文法的なままである。(89b)と(88b)から、「駅に行く」は終点を限定する有界の意味を持ち、同様に時間を限定する完了時間副詞「30 分で」と自然に共起できることがわかる。(89c)からわかるように、「駅に走って行く」は、「30 分間」とも「30 分で」とも共起できる。「30 分間」と共起した場合は、ジョンは駅に到着していないという非完結的な解釈になる。「30 分で」と共起した場合は、ジョンは駅に到着したという完結的な解釈になる。このように、「駅に走って行く」は(79a)の「公園まで走った」が非完結的解釈と完結的解釈の両方ができるということと共通している。具体的にどんなところが共通しているかを見てみよう。(89c)を(90a)と(90b)に分け、(79a)を、「公園」を「駅」に変えた上で、(91a)と(91b)に分けて考える。

(90) a. ジョンは駅に 30 分間走って行った。

b. ジョンは駅に 30 分で走って行った。

(91) a. ジョンは駅まで 30 分間走った。

b. ジョンは駅まで 30 分で走った。

(90a)のように、「駅に走って行く」が「30 分間」と共起できるのは、継続時間副詞「30 分間」が同様に継続性を持つ活動動詞「走る」を修飾しているからであると分析できる。(90b)では、完了時間副詞「30 分で」は(89b)と同様に、完了を表す、限定的な「駅に行く」を修飾していると考えられる。(91)も同様の考え方ができる。(91a)が成立するのは、継続時間副詞「30 分間」が継続性を持つ活動動詞「走る」を修飾しているからだと考えられる。完了時間副詞「30 分で」は時間を限定するが、「駅まで」も同様に距離を限定するので、共に完結性を表すことで、文が成立すると考えられる。つまり、「30 分間」は同様に継続性を持つ動詞と共起し、「30 分で」は同様に限定的な表現と共起できる。

日本語の(87)と(89a)に対応する英語の例はそれぞれ次の(92a)と(92b)になる。

(92) a. John ran {for thirty minutes/??in thirty minutes}.

b. John ran to the station {??for thirty minutes/in thirty minutes}.

(92a)のように継続性を持つ活動動詞 run が時間副詞句と共起する場合、継続時間副詞 for thirty minutes は文法的になる一方、完了時間副詞 in thirty minutes は (30 分以内で走り始めたという解釈をしない限り) 不自然になる。この点は日本語の(87)の「30 分で」の場合と同様である。(92b)のように終点句 to the station を加えると、状況は(92a)と逆になり、for thirty minutes と共起しにくいのが、in thirty minutes とは問題なく共起できる。in thirty minutes と共起できるのは、終点句 to the station によって、終点までのルートが有界的な経路になるからである。for thirty minutes と共起しにくいのは、継続性を持っている時間副詞は有界的な経路と完結性で矛盾するからである。(ただし、(92b)で for thirty minutes の場合、駅までの距離が非常に短く、30 分の間に、起点と駅の間を走って何度も往復するという解釈なら許容できる。)

日本語と英語の共通点として、継続性を持つ活動動詞が継続時間副詞と共起すると、文法的になる。一方完了時間副詞と共起すると、規定された時間内で走り始めるという解釈をしない限り、不自然になる。さらに、両言語とも移動のルートを有界に限定する終点句を入れることで文に完結性が生まれ、継続時間副詞と共起できなくなる。

次は日本語の(87)と英語の(92a)に対応するように作った中国語の例である。

(93) a. 张三 跑 了 30 分钟。

张三 走る PFV 30 分

「張三は 30 分間走った。」

b. \*张三 30 分钟 以内 跑 了。

张三 30 分 以内 走る PFV

「張三は 30 分以内で走った。」

(93a)のように、継続性を持つ動詞「跑」(走る)は時間の幅を表す「30 分钟」(30 分)と共起できる。しかし、(93b)のように、継続性を持つ同じ動詞が「以内」によって時間幅を制限された「30 分钟以内」(30 分以内)と共起すると、(日本語の(87)と英語の(92a)同様、30 分以内で走り始めたという解釈をしない限り)非文になる。終点句「到(了)车站」(駅に到着(した))を加え、英語の(92b)と対応するように作った中国語の例は次のようになる。

(94) a. 张三 跑 了 30 分钟 到 了 车站。

张三 走る PFV 30 分 到着 PFV 駅

「張三は 30 分間走って、駅に到着した。」

b. 张三 花 了 30 分钟 跑 到 了 车站。

张三 かかる PFV 30 分 走る 到着 PFV 駅

「張三は 30 分かけて、走って駅に到着した。」

(95) 张三 30 分钟 以内 跑 到 了 车站。

张三 30 分 以内 走る 到着 PFV 駅

「張三は 30 分以内に、走って駅に到着した。」

For thirty minutes を用いた不自然な(92b)と対応する文は(93a, b)のように、二つ考えることができ、どちらでも自然な中国語である。(94a)が自然なのは「30 分钟」(30 分)は継続性のない動詞「到」(到着)ではなく、継続性を持つ「跑」(走る)を修飾するからである。(94b)が自然なのは、「花 30 分钟」(30 分かかる)という動詞句で所用時間を表し、30 分間かけて駅に走って到着したという解釈ができるからである。(94a)と(94b)の意味の違いは、(94a)では、張三が走った結果、駅に到着したのが偶然であるという解釈ができるが、(94b)ではできないというものである。次に in thirty minutes を用いた自然な(92b)と近い中国語は(95)になる。(95)では「30 分钟以内」(30 分以内)という時間副詞で、30 分以内の時間で、駅に走って到着したという解釈になる。英語と違い、中国語で

は、前置詞句ではなく、(94a)のように前置詞を持たない副詞句（「30 分钟」）、(94b)のように動詞句（「花 30 分钟」）、(95)のように名詞句（「30 分钟以内」）で時間を表している。

以上、三言語における時間副詞、共起する動詞、終点句の有無や違いによる完結性の影響を見てきた。これを踏まえて、今度は完結性の有無と結果キャンセル可能性との関係を見てみよう。まず、日本語の例を見てみよう。

- (96) a.?太郎は西院駅に走った（が、円町でやめた）。  
b. 太郎は西院駅に行った（\*が、円町でやめた）。  
c. 太郎は西院駅に走って行った（\*が、円町で行くのをやめた）。  
d. 太郎は西院駅に走っていった（が、円町で走るのをやめた）。

(88a)と同様、(96a)のように、様態動詞「走る」が単独で「(西院) 駅に」のような終点句と共起すると、不自然な文になり、人によって判断が揺れる<sup>8</sup>。その判断の揺れを棚上げにすれば、「が、円町でやめた」をつけることで、「西院駅」という終点に到着する結果をキャンセルすることができる。しかし、(96b)のように、位置変化を表す動詞「行く」を用いると、終点に到着する結果がキャンセルできない。(96a)と(96b)のキャンセル可能性の違いから、位置変化を表す動詞「行く」は、文を完結的にし、結果をキャンセルできなくするという仮説を立てることができる。さらに、様態動詞「走る」に、文を完結的にする「行く」を位置変化を表す本動詞として(96c)のように重ねると、「が、円町で行くのをやめた」を続けられず結果をキャンセルできないので、仮説の予想通りになる。ところが、(96d)の「いく」のようにひらがなで通常表される補助動詞は、(96c)の「行く」のように漢字で通常表される本動詞とは区別する必要がある。「いく」を補助動詞として用いると、話者から離れていくというアスペクトとして機能し文に完結性を与えないため、「が、円町で走るのをやめた」を続けることができ、結果をキャンセルすることができる。つまり、日本語では、様態動詞ではなく、位置変化を表す動詞（「行く」）が、完結性を与えている働きをしていることがわかる。

(96)のような例に対応する中国語は次になる。

- (97) a    \*太郎    跑        了        西院站。  
          太郎    走る    PFV    西院駅
- b.    太郎    去        了        西院站    (\*但是在元町放弃了)。  
          太郎    行く    PFV    西院駅    (しかし、円町でやめた)  
          「太郎は西院駅に行った (\*が、円町でやめた)。」

<sup>8</sup> 三宅 (2011: 182, 注 3)は、「締切時間が迫っていたので受付窓口に走った」のような例であれば可能としている。

- c. 太郎 跑 去 了 西院站 (\*但是在元町放弃了)。  
 太郎 走る 行く PFV 西院駅 (しかし、円町でやめた)  
 「太郎は走って西院駅へ行った (\*が、円町でやめた)。」
- d. 太郎 跑 向 了 西院站 (但是在元町放弃了)。  
 太郎 走る 向かう PFV 西院駅 (しかし、円町でやめた)  
 「太郎は西院駅へ向かって走った (が、円町でやめた)。」

(96a)と対応する中国語は(97a)になるが、日本語の「走る」に対応する中国語の様態動詞「跑」(走る)は「西院站」(西院駅)のような終点と共起できず、日本語と違い判断の揺れなく非文になる。(96b)と対応する(97b)は、日本語と同様、位置変化を表す動詞「去」(行く)が終点「西院站」と共起することで、文を完結的にし、「但是在元町放弃了」(しかし円町でやめた)を付けて、結果をキャンセルできない。(96c)と対応する(97c)も日本語と同様の仕方で、(97b)に様態動詞「跑」(走る)を加えても、(97b)と同様に完結性を持ち、結果をキャンセルすることができない。それに対し、位置変化を表す動詞「去」(行く)を、(97d)のように、方向しか表さない動詞「向」(向かう)にすると、「但是在元町放弃了」(しかし円町でやめた)をつけて、結果をキャンセルすることができる。つまり、中国語は日本語と同様、様態動詞ではなく、位置変化を表す動詞(二番目の動詞である「去」(行く)や「向」(向かう))が、終点と共起して完結性を表すかどうかを決めている。

日本語と中国語では、このように位置変化を表す動詞が完結性の決定に影響している。英語はどうであるかを見てみよう。

- (98) a. John ran to the station (\*, but he didn't arrive there).  
 b. John ran toward the station(, but he didn't arrive there).

(96a)と対応する(98a)では、継続性を持つ動詞 run が前置詞句である終点句 to the station と共起することで、完結性を表し、(84b)で見たように、主語の John が終点の the station に到着した意味になる。従って、but he didn't arrive there のような結果をキャンセルする文をつけると、非文になる。(98b)のように、toward the station という方向しか表さない前置詞句を用いると、経路が非有界的で、終点まで到着した解釈はできない。従って、but he didn't arrive there のような文を続けることができる。この点は中国語の(97d)と似ている。つまり、英語は日本語や中国語のように位置変化を表す動詞(「行く」「去」と終点との共起で完結性を表すのではなく、前置詞句である終点句だけで完結性を決めている。ただし、中国語でも英語のように前置詞句で非有界的な経路を表現することができる。

- (99) 太郎 向 西院站 跑 了 (但是在元町放弃了)。  
太郎 向かう 西院駅 走る PFV (しかし、円町でやめた)  
「太郎は西院駅へ向かって走った(が、円町でやめた)。」

動詞「向」(向かう)は文法化<sup>9</sup>(grammaticalize)され前置詞として場所をその目的語として、「向西院站」(西院駅に向かって)のように非有界的な経路を表すことになる。従って、(99)のように、「但是在元町放弃了」(しかし円町でやめた)という結果をキャンセルする文を後続させることができる。つまり、方向しか表さない前置詞に文法化された「向」は、文を非完結的にすることになる。中国語の(99)は toward を用いた英語の(98b)と対応していると言えるだろう。

まとめると、移動表現において、日本語と中国語は、位置変化を表す動詞と終点との共起で完結性を表す。英語は前置詞句である終点句だけで完結性を決めている。

## 2.6 まとめ

2.2 節から 2.4 節では、完了アスペクト「了」の分布、疑問文の応答、否定のスコープから意味的主要部と統語的主要部を考察した。中国語の方向補語は日本語の複合動詞の後項動詞と同様、動詞であり、経路を表している。完了アスペクト「了」の分布から、Talmy (1985)の主張と違い、方向補語を衛星として見なすことができないことがわかった。否定のスコープと意味的焦点の考察から、地 (Ground) の要素を入れた移動表現では、中国語は動詞枠付け言語の特徴を表していることになる。疑問文を含む応答と意味的焦点の考察から、地の要素が含まれていない場合、意味的焦点が判断できない。地の要素を含む場合は、経路を表す後項動詞のほうが意味的焦点であることがわかり、衛星とは言えないため、動詞枠付け言語と特徴付けられると主張した。Talmy (1985)の中国語の移動表現の分類について、方向補語を衛星と見なすことが妥当ではない。

2.5 節では、次のことを論じた。まず Talmy (1985)とは異なり、日本語の移動表現の後置詞「に」「へ」「まで」も経路と見なした。その上で、三言語の移動表現において、文の完結性に影響を与えているのは、言語によって異なることを見た。英語では前置詞句だけが完結性に影響を与えている。それに対し、日本語では、位置変化を表す動詞が、中国語では、動詞連続の中での二番目の位置変化を表す動詞が完結性に影響を与えている。

<sup>9</sup> 中国語学では、文法化のことは「实词虚化」(实词: 内容語)と呼ばれ、動詞から助詞/前置詞に文法化されるには、程度や変化の速さの違いがあることが指摘されている(沈 1994、沈 1998、張 2000、刘 2001、刘 2002、董 2017)。

### 第3章 日中英三言語の移動に関する要素の考察

#### —動詞、副詞句、前置詞句／後置詞句—

#### 3.1 はじめに

Talmy (1985)は移動表現において、衛星枠付け言語では、移動と様態が動詞に融合していると説明している。しかし、動作動詞 (wear, kick, sleep, cry など) を用いた場合でも、同様の分析を行っていることから、三言語の移動表現において、移動の意味は動詞、前置詞 (句) / 後置詞 (句) のいずれに含まれているかについて再考する必要があると考える。さらに、動詞自体に移動の意味が含まれていない場合、「東京までずっと寝ていた」という特殊な構文でも、移動の意味を文全体に働きかけることができるが、このとき、移動の意味はどこから出てくるのかという点も考察すべきであろう。移動の意味のほか、三言語において、移動している (移動) 物について、同じ解釈が成り立つか否かという点に関しても考察する必要があると考える。

本章の構成は以下のとおりである。3.2 節で、移動表現において、Talmy (1985: 61) による移動はどんな要素に含まれているかを紹介し、その見方の問題点を示す。3.3 節で、移動の意味を含む動詞で構成された文を説明する。さらに、3.4 節で、三言語において、移動の意味を含まない動詞について見る。具体的には、動詞自体は移動の意味を含まないが、「まで (ずっと)」があることで、文全体に移動の意味が出る「東京までずっと寝ていた」という特殊な構文を、英語、中国語ではどのように表現するかを考察する。3.5 節では、三言語において、前置詞句／後置詞句の構造的 position と統語的移動について考察する。前置詞句／後置詞句が表しているのは、主語の移動の方向なのか、目的語の移動なのか、主語や目的語の居場所なのか、三言語にはどのような共通点と相違点があるのかを分析する。

#### 3.2 移動の意味はどこに含まれているか

Talmy (1985: 61) は一つの動詞の中に複数の意味要素が含まれていることを語彙化 (lexicalization) と呼んでいる。Talmy は移動について、衛星枠付け言語では、移動と様態が動詞に融合し、動詞枠付け言語では、移動と経路が動詞に融合していると説明している。

動詞の意味の中に、移動の意味がない自動詞の例を見てみよう。

(1) The craft floated<sub>1</sub> on a cushion of air. (Talmy 2000: 31)

(1) は、the craft はただ空中で漂って、移動はしていない。Talmy はこのように移動の意味が融合されておらず、様態の意味しか含まれていない floated を 1 とマークし、floated<sub>1</sub> と

する。1 とマークされた動詞は主節だけではなく、従属節にも現れる。

(2) The craft moved into the hangar, floating<sub>1</sub> on a cushion of air. (Talmy 2000: 31)

(2)は、主節に現れた動詞 *move* が移動を表しており、従属節で現れた *floating* には移動の意味がなく、様態しか表していない。従って、(2)の中の *floating* も 1 とマークする。もう一つの用例は次のとおりである。

(3) The craft floated<sub>2</sub> into the hangar on a cushion of air. (Talmy 2000: 31)

(3)では、従属節を使わなくても、(2)と同様の意味を表すことができる。この点について、Talmy (2000)は移動と様態が動詞 *floated* に融合し、経路が前置詞 *into* に融合していると分析している。具体的に見てみよう。

(4) The craft MOVED [floating<sub>1</sub> (the while)] into the hangar on a cushion of air.

↓  
floated<sub>2</sub>

(Talmy 2000: 31)

(4)で示したように、*move* が様態しか表していない *floating<sub>1</sub>* と融合して、*floated<sub>2</sub>* になることで、(4)の用例ができる。これは、Talmy (2000)が挙げた他動詞の例でも同様に見られる。

(5) I kicked the wall with my left foot. (Talmy 2000: 31)

*float* と同様、動詞 *kick* にも移動の意味が含まれていないため、動詞 *kick* には様態の意味しかない。このような動詞を 1 とマークする。つまり、*kick<sub>1</sub>* とする。1 とマークされた他動詞は、(4)と同様、従属節を作ることにもできる。

(6) I moved the ball across the field, by kicking<sub>1</sub> it with my left foot. (Talmy 2000: 32)

(6)は、*Moved* が移動を表し、*kicking<sub>1</sub>* が様態しか表していない。これらが、*Kick<sub>2</sub>* になるには次の過程を経る。

(7) I MOVED [by kicking<sub>1</sub>] the ball across the field with my left foot.

↓

kicked<sub>2</sub>

(8) I kicked<sub>2</sub> the ball across the field with my left foot.

(Talmy 2000: 32)

(7)のとおり、move と kicking<sub>1</sub> が kicked<sub>2</sub> に融合し、(8)のような文になる。(8)の kicked<sub>2</sub> には、移動と様態が同時に融合されていることがわかる。さらに、Talmy は self-agentive として、以下のような例を示している。

(9) She moved to the party, wearing<sub>1</sub> a green dress.

(10) She wore<sub>2</sub> a green dress to the party.

(Talmy 2000: 46)

Talmy は float、kick と同様、wear を様態しか表さない wear<sub>1</sub> と、移動と様態が融合している wear<sub>2</sub> に分けて分析した。しかし、wear は動作動詞であり、距離表現とは共起できないので、移動の意味が含まれているとは考えられない。さらに、次の例で示す動詞 dance を見ると、移動の意味が前置詞 into に含まれていることがわかる。

(11) He danced in the room.

(12) He danced into the room.

(11)は、彼が部屋の中で踊るという意味なので、移動は含まれていない。(12)では、in を into にすることで、彼が踊って部屋に入って行ったという意味に変わり、移動が含まれていることが明らかとなる。よって、移動を -to、つまり前置詞である into が表していると考えられる。

従って、移動の意味は Talmy が主張した様態動詞のみならず、副詞や前置詞に融合される場合があることに留意する必要がある。従って、本章では日中英三言語を対象に、移動の意味がどの要素に融合されているかを考察する。

### 3.3 移動の意味を含む動詞

距離表現と共起できる動詞には移動の意味が含まれていると考えられる。

(13) 彼は大通りを 200 メートルほど歩いた。

(14) He walked about 200 yards along the street.

影山 (2011: 156)

「歩く」、walk は、それぞれ「200 メートル」、200 yards といった距離表現と共起できる

ため、移動の意味は様態動詞に融合されていると考えられる。

(15)a. John ran/walked to school.

b. ジョンが学校まで走った／歩いた。

Inagaki (2002: 190)

この移動表現を見てみると、移動が様態動詞に融合し、前置詞句／後置詞句が終点を表していると考えられる。主語である John、「ジョン」の移動を表している。これに対応する中国語は次のとおりとなる。

(16) 约翰 跑 / 走 到 了 学校。

ジョン 走る／歩く 到着する PFV 学校

ジョンは走って／歩いて学校に着いた。

中国語も英語及び日本語と同様に、様態動詞に移動が含まれていると考えられる。さらに、「到了学校」（学校に着く）という動詞句で終点を表し、主語である「约翰」の移動を表している。他動詞の例は次のようになる。

(17)a. He throw the ball to the wall.

b. 彼はボールを壁に投げた。

様態動詞 throw、「投げる」も距離表現と共にでき、移動の意味が含まれていると考えられる。移動物がボールであり、主語の He、「彼」の移動ではなく、ボールの移動を表している。対応する中国語の例は次のように、二つ作ることができる。

(18) 他 扔 球 到 了 墙上。

彼 投げる ボール 到着する PFV 壁

彼はボールを壁に投げた。

(19) 他 把 球 扔 到 了 墙上。

彼 ACC ボール 投げる 到着する PFV 壁

彼はボールを壁に投げた。

対応する中国語も英語及び日本語と同様の意味になるが、(18)は復文であるため、考察の対象とはしない。(19)は「把」を用いた処置文である。「把」を用いたことで、目的語である「球」（ボール）を述語の前に持ってくる。主語である「他」（彼）は目的語であ

る「球」(ボール)を処置して、壁に投げることになる。「把」構文については、第4章の4.3.2節で詳しく述べる。

以上で見てきた移動表現は、様態動詞が距離表現と共起できるため、三言語とも同様に動詞の意味の中に移動の意味が融合されている。次節では動詞の意味の中に移動の意味が含まれていない例を見てみよう。

### 3.4 移動の意味を含まない動詞

この節では、移動の意味を含まない動詞として、継続動詞「寝る」「泣く」「降る」、瞬間動詞「死ぬ」「殺す」を取り上げ、「東京までずっと寝ていた」構文と対応する英語及び中国語(を共起する文)を考察の対象にする。さらに、EO心理動詞(Experiencer-Object verbs)を用いた移動表現の考察を行う。まずは、「東京までずっと寝ていた」構文を見てみよう。

#### 3.4.1 「東京までずっと寝ていた」構文における比較<sup>10</sup>

Talmy (1985)の類型論で言語を分類する際に、移動が様態動詞に融合することと、移動が経路動詞に融合することを考察したが、移動の意味が含まれていない動詞の視点からは考察しなかった。影山 (2003, 2004, 2011)は「東京までずっと寝ていた」構文と対応する英語の *all the way* 構文において、動詞には移動の意味が含まれないが、移動の意味が文全体に出てくることを明らかにした。本章ではさらに対応する中国語の構文を取り上げて、日本語、英語と対照しながら、三言語における「東京までずっと寝ていた」(構文)という特殊な構文の特徴を明らかにしたい。

本節では、三言語における「東京までずっと寝ていた」構文において、移動の意味を含まない Vendler (1967)の分類で活動動詞に分類された「寝る」「泣く」「降る」や瞬間動詞に分類された「死ぬ」「殺す」を用いて考察する。さらに、自然現象である「雨」「地震」「台風」を扱い、特殊な現象から移動に関する三言語の相違点と共通点を考察する。

##### 3.4.1.1 動詞が活動動詞「寝る」の場合、対応する英語と中国語との比較

影山 (2003, 2004, 2011)は「東京までずっと寝ていた」構文において、「まで(ずっと)」の「まで」に注目して考察してきたが、「ずっと」については深く考察されなかった。本節は動詞が移動の意味を含まない「寝る」を用いた例を扱い、「ずっと」に注目し、「ずっと」と対応する英語の *all the way*、中国語の副詞である「一路」と「一直」を考察する。

影山 (2011: 153-158, 173)は「まで」は始点から中間経路に沿って移動が進んだ到達範囲を表すと述べた。「まで」の重要性は「東京までずっと寝ていた」構文においても見ら

---

<sup>10</sup> 本章は著者が令和4年度に立命館大学文学研究科の立命館文学 (679)に掲載された Du (2022) *All-the-Way Construction in English, Japanese and Chinese* の一部を加筆・修正したものである。

れる。次に示すのは「まで」句を含まない文である。

(20) 太郎はずっと寝ていた。

(20)での「ずっと」は時間副詞で、「寝る」を修飾し、寝るという動作の継続時間を表しているが、主語である太郎は移動していない。終点句「東京まで」を加えると、次の文になる。

(21) 太郎は東京までずっと寝ていた。

活動動詞で移動の意味のない「寝る」は「東京に」のような着点句と共起できず (\*「太郎は東京に寝た」)、文全体に移動の意味も含まれていない。しかし、移動の到達点と解釈できる「東京まで」を使うことで、文が成立し、移動の意味も出てくる。「東京までずっと寝ていた」構文は、「まで」句があることで、移動の意味が出てくることから、「まで」の、移動の意味に対しての重要性がわかる。さらに、「東京まで」を「東京に着くまで」のように従属節にすると、次の文になる。

(22) 太郎は東京に着くまでずっと寝ていた。

(22)では、従属節「東京に着くまで」が含まれている。この従属節は経路ではなく時間の到達点を表し、(20)と同様、主節の太郎は移動している必要はない。つまり、太郎が新幹線に乗らず、家にいる状況でも(22)は使える。(22)で移動を表しているのは主節ではなく従属節の部分である。

(22)と(20)では、太郎は東京まで移動しなくてもよい。より詳しく説明するために、従属節に主語「花子」を入れると、次のようになる。

(23) 太郎は花子が東京に着くまでずっと寝ていた。

「太郎」は主節の主語で、東京までの移動の必要がない。一方、従属節の主語である「花子」が東京まで移動したことがわかる。つまり、太郎はあるところでずっと寝ていて、その間に、花子は東京まで移動すると考えられる。(22)の従属節には発音されない主語 *pro* があると仮定すると、次の(24)になる。

(24) 太郎<sub>i</sub>は[*pro*<sub>j</sub>が東京に着くまで]ずっと寝ていた。

(23)と同様に分析すると、東京に着くまで移動したのは従属節には発音されない主語 *pro*

である。主節の主語である「太郎」は移動する必要がない。もっとも、従属節の主語である *pro* は一般的には同時に主節の主語になるため、(24)は(22)と同様、太郎は東京まで移動したという解釈になる。

従って、日本語では、「寝る」のように、動詞の意味の中に移動の意味が含まれない場合、経路を表す副詞「東京まで」か、経過時間を表す従属節「東京に着くまで」かで主節における移動の意味の有無を区別していることになる。意味の解釈には主節の主語の移動と従属節の主語の移動の区別がある。さらに、(20)と(21)で示しているように、「ずっと」は移動の意味の有無に影響していないが、終点句の有無が移動の意味の有無に影響している。

日本語の「までずっと」と対応しているのは、*all the way* と考えられる。*The way* は「まで」と同様、移動の範囲を表し、*all* が「ずっと」と対応している。*All the way* が含まれていない例は次のようになる。

(25) *I slept on Shinkansen.*

(26) \**I slept to Tokyo.*

活動動詞 *sleep* には移動の意味がないため、(25)のように場所を加えても、移動の意味が出てこない。(26)のように終点句を加えると、非文になる。影山 (2011)は *all the way* が含まれている次の英語の例を挙げている。

(27) *I slept all the way on Shinkansen.* (影山 2011: 174)

影山 (2011)によると、この文の事象は主語が東京へ移動している間ずっと寝ていたことになる。つまり、解釈上では、新幹線が移動することにつれて、主語も移動していることになる。また、((27)では、) 活動動詞 *sleep* には移動の意味がないが、文全体に移動が含意され、主語の移動を表している。終点句である *to Tokyo* を加えると、次のようになる。

(28) *I slept all the way to Tokyo on Shinkansen.* (影山 2011: 173)

(27)と(28)で示しているように、英語では *all the way* があることで、移動が文に含意されることがわかる。

従って、英語では、移動の意味が含まれない *sleep* を扱った<※用いた>文において、終点句である *to Tokyo* の有無は、移動の意味に影響せず、対して、*all the way* がないと移動の意味がなくなるということである。この点については日本語と違う。次の節では「ずっと」に対応する中国語を考察する。

中国語では、(21)と(22)のような「東京まで」と「東京に着くまで」は、ともに「到了東京」のような表現になり、形の上で区別して表現できないため、「一路」と「一直」の二つの副詞で、表現し分ける。移動の意味が含まれている(21)は以下の中国語の例文と対応する。

- (29) 太郎 一路 睡 到 了 东京。  
太郎 ずっと 寝る まで PFV 東京  
「太郎は東京までずっと寝ていた。」

(29)では移動の意味が含まれない「睡」(寝る)に加えて、副詞「一路」が使われたことで、移動の範囲が表され、文全体から太郎の移動が読み取れる。つまり、(29)は主節の主語の移動を表している。

(22)と対応する中国語の例文であると言える。

- (30) 太郎 一直 睡 到 了 东京。  
太郎 ずっと 寝る 着くまで PFV 東京  
「太郎は東京に着くまでずっと寝ていた。」

(30)は、「一直」が時間の継続を表している。この文に「花子到了」(花子が来た)を加えると、次の(31)で見られるように、(23)と同様の現象が見られる。

- (31) 太郎 一直 睡 到 了 花子 到 了 东京。  
太郎 ずっと 寝る 着くまで PFV 花子 着く PFV 東京  
「太郎は花子が東京に着くまでずっと寝ていた。」

(31)では、従属節の主語である「花子」が東京まで移動したということが含意され、太郎の移動という含意はない。つまり、花子が東京に着くまで、太郎はあるところでずっと寝ていたのだとしてもよいことになる。(30)に、発音しない *pro* と述語「到了」(着いた)があると仮定すると、次の(32)になる。

- (32) 太郎<sub>i</sub> 一直 睡 到 了 *pro*<sub>i</sub> (到 了) 东京。  
太郎 ずっと 寝る 着くまで PFV 花子 着く PFV 東京  
「太郎は花子が東京に着くまでずっと寝ていた。」

日本語と同様の分析ができる。従属節の主語である *pro* の移動が含意されているが、(32)では、*pro* と主節の主語である太郎は同一人物になっているため、太郎が東京まで移動

したと解釈になる。

このように、移動の意味が含まれない「寝る」を用いた場合、日本語では、「ずっと」だけでは従属節の主語の移動か、主節の主語の移動かを区別できないが、「まで」と「着くまで」を用いることで区別できる。一方、中国語では、日本語の「ずっと」と対応する「一路」と「一直」の使い分けによって、この区別ができると考えられる。さらに、日本語はマデ句で移動を表し、英語は *all the way*、中国語は「一路」で移動を表していることがわかる。

#### 3.4.1.2 動詞が活動動詞「泣く」の場合、対応する英語と中国語との比較

この節では、移動が含意されない活動動詞「泣く」を含む構文についての三言語の考察である。

(33) The girl cried all the way home from school.

(34) \*The girl cried home from school.

(kageyama 2004: 266)

Kageyama (2004)が述べたように、(33)では、動詞 *cry* には移動の意味がないが、文全体的に移動が含意されている。All the way を(33)から取ると、(34)で示しているように、非文になる。起点句である *from school* をさらに取ると、次の(35)のように、文法的になる。

(35) The girl cried all the way.

(33)-(35)でわかるように、英語では、*all the way* があることで、文全体的に移動の意味が入っている。起点句や終点句は移動の意味の有無に影響しない。対応する日本語は次のようになる。

(36) 太郎は駅までずっと泣いていた。

(37) 太郎はずっと泣いていた。

(36)では終点句「駅まで」があることで、文全体から、太郎が駅まで移動する間、ずっと泣いていたという移動の意味が読み取れる。終点句「駅まで」と共起しない(37)では、影山 (2022: 63-67)が言及したように、「ずっと」は時間の継続を表している。主語の太郎は移動しておらず、ずっと泣いていたという解釈になる。一方、中国語は違う。中国語の例を見てみよう。

(38) 太郎 哭 了 一路 去 车站。  
太郎 泣く PFV ずっと 行く 駅  
「太郎は駅までずっと泣いていた。」

(39) 太郎 哭 了 一路  
太郎 泣く PFV ずっと  
「太郎はずっと泣いていた（移動しながら）。」

(38)は終点句「去车站」と「一路」があることで、太郎の移動を表している。太郎は駅まで移動する間、ずっと泣いていたと解釈できる。(39)では、終点句がなくても、「一路」があることで、移動の意味が読み取れる。従って、中国語では、「一路」が移動の意味を表しているのである。この点については、(33)と(35)で示した英語の *all the way* と同様の働きがあることがわかる。

以上をまとめると、日本語では、動詞が移動の意味を含まない「泣く」を用いる終点句がないときは、「ずっと」は時間の継続のみを表す。一方、英語と中国語では、終点句と共起しなくても、*all the way* と「一路」で移動の意味を表すことができる。

#### 3.4.1.3 動詞が到達動詞「死ぬ」の場合、対応する英語と中国語との比較

Kageyama (2004)は、移動の意味がない *die* や *kill* のような瞬間的な状態変化動詞は、継続を意味する英語表現と共起できないことを示唆している。しかし、特定の条件の下では「ずっと」と共起できると考えられる。この節では、三言語上の到達動詞「死ぬ」が、「ずっと」及びこれと対応する *all the way*、「一直」並びに「一路」と共起できる要因を探る。

Kageyama (2004)によると、*die* や *kill* のような動詞には移動の意味がない。そして、次の(40)のように、*all the way* と共起できない。

(40) \*The cat died all the way. (Kageyama 2004: 279)

しかし、Kageyama (2004)は次の(41)のような文法的な例を検討しなかった。

(41) The cat was dying all the way.

この文では、*dying* という進行形をとっているため、継続的な意味を持つ。移動の意味が出てくるのは *all the way* があるからである。*die* のような瞬間的で非活動的な動詞の進行形は、文法的に *sleep* や *cry* ((27)と(35)を参照)のような活動動詞と同様、持続性を生み出し、文法的になる。従って、(41)は許容される。

(42) The cat sneezed all the way to the station.

(42)の動詞 sneeze は反復的な意味を表し、活動動詞と同様に継続性を表すことができると考えられる。(42)には、all the way と共起することによって、猫がくしゃみをしながら、駅まで移動したという意味が出てくる。

次に、日本語の例文で「ずっと」と共起できる動詞を見てみよう。

(43) 猫がずっと寝ていた。

(44) \*猫がずっと死んでいた。

到達動詞「死ぬ」の場合は非文になるが、継続動詞「寝る」の場合、文は成立する。

(44)に終点句「駅まで」を加えると、次のようになる。

(45) ?猫が駅までずっと死んでいた。

日本語母語話者はこの文を見ると、真っ先に思いつくのは、一匹の猫が駅まで移動する途中ずっと死んでいたという解釈であろう。従って、不自然だと判断されるかもしれない。しかし、猫は一匹ではなく、たくさんいたと考えれば、複数性から継続的な意味が生まれ、文が自然になるものと考えられる。次の猫の複数性を指定した文で確認してみたい。

(46) \*一匹の猫が駅までずっと死んでいた。

(47) たくさんの猫が駅までずっと死んでいた。

(46)のように猫が「一匹」の場合は非文になるが、(47)のように猫が「たくさん」の場合は文法的になる。さらに、終点句「駅まで」だけと共起する文(48)と、副詞「ずっと」だけと共起する文(49)を比較する。

(48) ?たくさんの猫が駅まで死んでいた。

(49) \*たくさんの猫がずっと死んでいた。

(48)の「駅まで」という終点句が移動を含意し、話者の移動と解釈できるようになっている。一方、(49)では終点句がないため、「ずっと」は時間の継続であるとしか解釈できず、この文は非文になる。

以上をまとめると、動詞に移動の意味がない「死ぬ」のような瞬間状態変化動詞が文

の述語である場合、文全体として移動の意味を表すには、次の2つの条件が必要である。一つは、文の主語は複数であって、継続の意味を包含していること。もう一つは、終点句が文中にあることである。さらに、「ずっと」を加えることで、文がより自然になる。

(45)と対応する中国語は次になる。

(50) 猫 到 车站 死 了 一路。  
猫 まで 駅 死ぬ PFV ずっと  
「猫が駅までずっと死んでいた。」

(45)の日本語の例では、「猫」が一匹であると解釈され、文が不自然であると判断される。しかし、(50)の中国語の「猫」のほうが容易に複数の猫と解釈することができるため、中国語では文法的だと判断できる。日本語では、(46)(47)のように、「たくさん」をつけると、文の受容性が上がる。一方、中国語では、次の(51)のように(50)に「很多」(たくさん)をつけると逆に受容性が下がることになる。

(51) ?很多 猫 到 车站 死 了 一路。  
たくさん 猫 まで 駅 死ぬ PFV ずっと

日本語の「ずっと」とは異なり、中国語の「一路」は距離の範囲を示しているため、駅までの途中で死んだ猫がたくさんいると解釈できる。従って、(51)は「たくさん」の意味が重複して、不自然な文になってしまっている。

この節を要約すると、移動の意味がない「死ぬ」を使った場合、英語では、瞬間動詞を単純形から進行形に変更すると、進行形が継続の意味を作るため、文法的になる

((36)と(37)を参照)。日本語では、継続を意味するためには、主語を複数に解釈する必要がある。一方、中国語の「一路」はすでに主語に複数の意味を与えているため、「很多」(たくさん)のような複数表現を使用すると、意味が重複して、文が不自然になる。

#### 3.4.1.4 動詞が達成動詞「殺す」の場合、対応する英語と中国語との比較

この節は移動の意味を含まない「殺す」及びこれに対応する英語と中国語の、「ずっと」との共起について考察する。Kageyama (2004)は次のように、瞬間的な状態変化動詞は *all the way* と共起できないと主張している。

(52) \*He killed the cat all the way.

(Kageyama 2004: 279)

しかし、日本語の例(45)が、主語を複数だと解釈することによって継続性を生み出すのと同様に、(52)の単数で定的な主語の **cat** を複数の不定的な主語にすると、継続の意味が出てくる。**to the station** のような終点句をつけると、次のような文法的な文ができる。

(53) **He killed cats all the way to the station.**

(53)は駅までずっと猫がいて、彼が猫たちを殺し続けたという猟奇的な意味を表しているが、文法的である。**kill cat** という事象は何度でも繰り返すことができるため、継続的な活動と見なすことができ、**All the way** と共起することで主語の移動を表すことができる。結果、主語である彼が猫を殺し続けると同時に、主語が移動しているという解釈が可能になる。

(52)と似たような日本語の例を見てみよう。

(54) 太郎は猫をずっと殺していた。

(54)では、主語である太郎も、目的語である **cat** も、移動はしていない。(54)に「駅まで」という終点句を加えると、次のようになる。

(55) ?太郎は猫を駅までずっと殺していた。

日本語母語話者がこの文を見て、最初に思いつくのは、駅までずっと一匹の猫が繰り返し殺されているという解釈であり、一匹の猫が死んで、また生き返って、また殺して、これを何度も繰り返すという奇怪きわまりない状況を想像するかもしれない。しかし、猫の数を複数にすると、この奇怪な状況は避けることができる。猫の数を明確にすると、次の二つの例文になる。

(56) \*太郎は一匹の猫を駅までずっと殺していた。

(57) 太郎はたくさんの猫を駅までずっと殺していた。

(56)では、猫が一匹だけであるため、非文になっている。一匹の猫が生き返らない限り、継続は不可能なので、当然のことながら、この文に継続の意味はない。(57)は、太郎が駅に移動しながら猫を殺し続けたという解釈ができるため、文法的である。次の(58)は「駅まで」という終点句を含み、(59)は副詞「ずっと」を含む例である。

(58) ?太郎はたくさんの猫を駅まで殺していた。

(59) 太郎はたくさんの猫をずっと殺していた。

(58)は、「駅まで」という終点句があることで、主語の太郎の移動を表すことができる。ただし、「ずっと」と共起する(59)と比較すると不自然であり、(47)及び(48)と同様の現象になっている。(59)の「ずっと」は時間副詞であるが、移動の持続時間を表すことはできず、猫を殺す活動の継続という意味しか表していない。

(55)と対応する中国語の例は次のようになる。

(60) 太郎 到 车站 杀 了 一路 的 猫。

太郎 まで 駅 殺す PFV ずっと MOD 猫

「太郎は駅までずっと猫を殺していた。」

(60)の中国語の「猫」という単語は、単数または複数のいずれにも解釈できる。「一路」は移動の距離の継続を表すため、中国語母語話者が最初に頭に思い浮かべるのは、太郎が駅に向かう途中で複数の猫を殺したという解釈である。もう一つは、太郎が駅まで一匹の猫を殺し続け、猫が死にかけているという解釈である。このような解釈が可能なのは、中国語の「杀」は、日本語の「殺す」や英語の kill と異なり、前者には状態変化の意味が含まれておらず、次のように時間副詞と共起し、活動の継続時間を表すことができるからである。

(61) 太郎 杀 了 花子 一个小时 (她 也 没 死)。

太郎 殺す PFV 花子 一時間 彼女 も NEG 死ぬ

「太郎は花子を一時間殺した(彼女は死ななかった)。」

(61)の文中にある中国語の動詞「杀」には状態変化が含意されていない。よって、(61)は文法的に成立しているのである。

この節を要約すると、英語では、移動の意味がない kill のような状態変化動詞が all the way 構文の主動詞であり、文が成立するには目的語が複数形である必要がある。それは kill という事象を繰り返すことによって継続的な意味が出てくるからで、日本語でも同じ現象が見られる。一方、対応する中国語では、「杀」に状態の変化の意味がないため、殺される対象については、複数はもちろん、単数であることも、文の解釈としては可能である。

#### 3.4.1.5 「東京までずっと寝ていた」構文における自然現象

自然現象の視点からの移動も三言語において、移動と解釈すべきか、範囲の拡大と解釈すべきかで異なる。この節では、「雨」「地震」「台風」を対象に、移動の意味が含まれ

ない「降る」「吹く」「起こる」とこれらに対応する英語、中国語の例を取り上げて考察を行う。

自然現象「雨」の移動表現における日本語と英語の例は次のようになる。

(62) 大阪から東京までずっと雨が降っていた。

(63) It was raining all the way from Osaka to Tokyo.

(影山 2011 : 173)

(62)では、継続動詞「降る」に移動の意味はないが、「まで(ずっと)」を用いることで、文全体に移動の意味が生まれ、(62)は、話者が大阪から東京まで移動する間、ずっと雨だったことを意味する。(63)の英語も、継続動詞 rain に移動の意味はないが、all the way を用いることで、文全体に話者の移動の意味が含まれている(影山 2011 : 173)<sup>11</sup>。日本語の例も英語の例も、話者の移動を表していると考えられるのだが、英語の例からは、話者のほか、雨という事象の移動も読み取れる<sup>12</sup>。

ここで、(62)の「雨」を文頭に置くと、次のようになる。

(64) 雨が大阪から東京までずっと降っていた。

(65) 雨は大阪から東京までずっと降っていた。

(64)では(62)と違い、話者の移動が読み取れるだけではなく、雨という事象の移動の意味も出てくる。さらに、「が」ではなく、雨を話題化するため、「は」を使うと、より雨という事象の移動の意味が強く読み取れる。

(62)-(65)から、日本語も英語も、話者と雨という事象の移動の意味があることがわかる。また、日本語では、語順の違いで、意味の解釈に影響があることがわかる。(62)のように、経路句が文頭にある場合、話者の移動しか読み取れない。一方、(64)と(65)で示したように、雨が文頭にある場合、話者の移動のほか、雨という事象の移動の意味も出てくる。

(62)に対応する中国語の例は以下のようになる。

(66) 从 大阪 到 东京 下 了 一路 雨。

から 大阪 まで 東京 降る PFV ずっと 雨

「大阪から東京まで雨が降っていた。」

(66)では、移動の意味を含んでいない継続動詞「下」(降る)が使われている。「一路」

<sup>11</sup> 影山(2011)では話者の移動と明記していない。

<sup>12</sup> 筆者が訊ねた母語話者の判断による。

を用いることで、移動の経路を表し、文に移動の意味が出ている。日本語及び英語と同様、話者が大阪から東京まで移動している間、ずっと雨が降っていたという解釈ができる。さらに、日本語及び英語と異なり、雨が降る範囲が大阪から東京まで拡大しているという解釈もできる。雨を文頭に置いた日本語の(64)と対応する例は次の二つが考えられる。

(67) 雨 从 大阪 一路 下 到 了 东京。  
雨 から 大阪 ずっと 降る まで PFV 東京  
「雨は大阪から東京までずっと降っていた。」

(68) 雨 一路 从 大阪 下 到 了 东京。  
雨 ずっと から 大阪 降る まで PFV 東京  
「雨は大阪から東京までずっと降っていた。」

(67)と(68)は、「一路」の位置が異なっている。(67)では「一路」は動詞の前に位置し、(68)では、「一路」は対象物である雨の後ろに位置しているが、(67)も(68)も同様に副詞として文を修飾しており、移動の経路を表し、文に移動の意味を与えている。また、(67)と(68)では、意味の解釈に変わりがないため、雨が文頭にある場合、「一路」の位置の違いは、文の解釈に影響がないことがわかった。さらに、(67)(68)は(64)と違い、雨が降る範囲が大阪から東京まで拡大していると解釈でき、あわせて話者の移動も読み取れる。つまり、(66)と(67)(68)から見られるように、中国語は日本語と同様、語順の違いで、解釈に影響が見られる。(66)のように、「从大阪到东京」(大阪から東京まで)という経路句を文頭に置く場合、話者の移動の解釈が、雨が降る範囲の拡大よりも読み取りやすい。一方、(67)(68)のように、雨を文頭に置く場合、「一路」の位置の違いで、二つの例を作ることができるが、意味には違いがない。この二つの例では、いずれも副詞として文を修飾しており、いずれも雨が降る範囲の拡大という解釈が話者の移動よりも読み取りやすくなっている。

雨という自然現象において、移動の意味が含まれない「降る」に着目した場合、英語では話者と事象の移動の両方の意味を取ることができる。日本語と中国語は、いずれも、語順の違いで、意味の解釈に影響が生じる。日本語では、経路句が文頭にある場合、話者の移動の意味しか読み取れないが、雨を文頭に置くと、話者の移動のほか、事象の移動の意味も出てくる。一方、中国語では、経路句が文頭にある場合、範囲の拡大より、話者の移動という解釈の方が強まる。雨を文頭に置くと、二つの例文を作ることができるが、いずれにしても話者の移動より、範囲の拡大の意味が強い(読み取りやすい)。

英語を用いた台風の例は次のとおりである。

(69) The typhoon blew all the way from Osaka to Kyoto.

(69)では、台風という事象の移動しか読み取れない。日本語では、形の上で、次の(70)のようになって、対応する例文を作ることができない。

(70) \*大阪から京都までずっと台風が吹いていた。

次は中国語の例を考える。

(71) 从 上海 到 南京 刮 了 一路 台风。  
から 上海 まで 南京 吹く PFV ずっと 台風  
「上海から南京までずっと台風が吹いていた。」

(71)では、移動の意味がない動詞「刮」（吹く）を使っている。しかし、「一路」がある上に、「从上海到南京」（上海から南京まで）という起点と終点を表す経路句があることで、移動の意味が文に出て、話者が上海から南京まで移動している間、ずっと台風だったという解釈ができる。さらに、台風が上海で生まれ、それが大きくなって、台風の範囲が南京まで拡大しているという解釈もできる。これは、上海から南京までの距離が短かく、台風の範囲が上海から南京まで拡大することが現実的であることから導かれる解釈だと考えられる。

次に提示するのは、ニュースから取り上げた実例と、その語順を変えた例である。

(72) 台风 安比(AMPIL) 一路 从 上海 刮 到 了 北京。  
台风 (名前) ずっと から 上海 吹く まで PFV 北京  
「台風 AMPIL が上海から北京までずっと吹いていた。」

[https://k.sina.cn/article\\_1887344341\\_707e96d504000cwgs.html](https://k.sina.cn/article_1887344341_707e96d504000cwgs.html)

最終閲覧日 2023 年 12 月 18 日

(73) 台风 安比(AMPIL) 从 上海 一路 刮 到 了 北京。  
台风 (名前) から 上海 ずっと 吹く まで PFV 北京  
「台風 AMPIL が上海から北京までずっと吹いていた。」

(72)は sina のニュースから取り上げた実例である。移動の意味が含まれていない継続動詞「刮」（吹く）が使われている。「一路」がある上に、「从上海到北京」（上海から北京まで）という起点と終点を表す経路句があることで、移動の意味が文に包含されてい

る。この結果、台風が上海で生まれ、北京まで台風の範囲が拡大しているとの解釈ができる。ただし、北京と上海の間の距離が相当遠いため、台風が上海から北京まで強風域を広げるということは、現実にはあり得ない。従って、範囲の拡大という解釈より、台風が上海から北京に向かって移動している途中に消え、代わって形成された新たな台風が北京まで移動したと解釈するのが妥当的であろう。故に、台風が上海から北京までの長い距離を移動したという事象の移動に読み替える必要が出てくる。さらに、話者が何らかの移動手段で、上海から北京まで、台風と共に移動したという解釈も不可能ではない。(73)は、「一路」が動詞の前に位置した例文だが、(72)との意味の解釈には変わりがない。このことから、台風を文頭に置いた場合には、「一路」の語順の違いが、文の解釈に影響を及ぼさないことがわかる。

台風という自然現象において、英語では、(69)のように、事象の移動しか読み取れない。日本語では対応する例文は作ることができない。中国語では雨の場合と同様、語順が意味の解釈に影響を及ぼす。経路句が文頭にある場合、主に話者の移動が読み取れる。一方、台風が文頭にある場合、主に台風の範囲の拡大の意味が読み取れる。さらに、台風が文頭にある場合には、「一路」の語順の違いは、文の解釈に影響を及ぼさないことがわかった。

次は「地震」を含む日本語の例である。

(74) 大阪から京都までずっと地震が起こっていた。

(74)では、移動の意味がない瞬間動詞「起こる」を使っている。話者の移動しか読み取れない。地震を文頭に置くと、次のようになる。

(75) 地震が大阪から京都までずっと起こっていた。

(75)では話者の移動のほか、震源地の移動という事象の移動を読み取ることも不可能ではない。

次は(75)と対応する中国語の例である。

(76) 从 大阪 到 京都 地震 震 了 一路。  
から 大阪 まで 京都 地震 揺れる PFV ずっと  
「大阪から京都までずっと揺れていた。」

(76)では、「一路」がある上に、起点と終点を表す「从大阪到京都」(大阪から東京まで)と共起させることで、話者が大阪から東京まで移動している間に、何回も地震があったという解釈ができる。つまり、移動しているのは話者で、話者は、移動中に何回も

地震を体験したことになる。さらに、大阪が震源地で、京都まで広がっているとの解釈も可能である。次は地震を文頭に置いた例である。

- (77) 地震 一路 从 大阪 震 到 了 京都。  
地震 ずっと から 大阪 揺れる まで PFV 京都  
「大阪から京都までずっと地震だった。」

(77)では、地震の波が大阪から京都まで広がったという意味が読み取れる。さらに、話者が地震の間、大阪から京都まで移動したとの解釈もできる。

自然現象において、日本語と英語では、話者の移動と事象の移動の二つの意味が読み取れる。これに対し、中国語では、話者の移動のほか、事象の移動ではなく、範囲の拡大という解釈ができる。語順の違いが意味の解釈に影響を及ぼす点は日本語と中国語に共通している。日本語では、経路句が文頭にある場合は、話者の移動しか表さない。しかし、自然現象が文頭にある場合、事象の移動という意味が出てくる。他方、中国語は、経路句が文頭にある場合、話者の移動の意味が強くなる点は日本語と同じだが、自然現象が文頭にある場合は、自然現象の範囲の拡大という意味が強くなる。また、自然現象が文頭にある場合には、「一路」の語順は文の解釈に影響しないことがわかった。

特殊な構文以外にも、移動の意味が含まれないEO心理動詞を使うことで、文全体で移動の意味を表すこともできる。次の節で見てみよう。

### 3.4.2 EO 心理動詞を含む移動表現

心理動詞 (Experiencer verb) 構文とは、何らかの感情を抱く人と、その感情を引き起こす原因を含む構文である。この構文には、心理変化の経験者が主語位置に現れるES動詞 (Experiencer-Subject verbs) と、心理変化の経験者が目的語位置に現れるEO動詞 (Experiencer-Object verbs) がある。移動表現を考察するために、本章ではEO動詞を主な研究対象にする。なお、丸田 (1998: 44)は次のように、EO動詞を二つの種類に分けている。

(78)a. Frighten類 :

anger, annoy, bother, comfort, depress, frighten, horrify, satisfy, horrify, scare, shock, surprise, worry

b. Remind類 :

arouse, convince, dispose, encourage, incline, remind, familiarize

EO動詞は基本的にT/SM制限 (Target/Subject Matter Restriction) を受ける。T/SM制限とは、EO動詞がT/SM項と共に共起できないことであり、次のような例文が挙げられている。

(79)\*The article in the Times angered Bill at the government.<sup>13</sup>

(80)\*The Chinese dinner satisfied Bill with his trip to Beijing.

(丸田 1998: 30)

T/SM 制限によって、(79)のように、EO 動詞 *anger* が *at the government* と共起できず、(80)のように、EO 動詞 *satisfy* が *with his trip to Beijing* と共起できない。

さらに、EO 動詞は基本的に T/SM 制限を受けるが、反例も見られる。反例では、「方向づけ」と「移動の惹起」が含意される (丸田 1998:33, 47)。つまり、次のように *frighten* という EO 動詞が用いられ、物理的な移動の惹起が含意される文である。

(81)a. Sam frightened Bob out of the room.

b. サムはボブを怖がらせて、部屋の外に出した。

(81a)では、EO 動詞 *frighten* が移動物 *Bob* の心理変化を表しており、移動の意味はないが、前置詞句 *out of the room* があることで、文全体に移動の意味が出ている。さらに、移動の出発点としての働きもしていることがわかる。対応する日本語の(81b)では、「怖がらせる」には移動の含意はなく、「部屋の外に出した」が着点を表すのと同時に、移動の意味も文全体にもたらしめている。(81a)の英語は単文で表現できる一方、(81b)の日本語では「テ節」を使って、複文にする必要があることがわかる。対応する中国語は(82)になる。

(82) 山姆 把 鲍勃 吓 出 了 房间。

サム ACC ボブ 脅かす 出る PFV 部屋

「サムはボブを怖がらせて部屋の外に出した。」

この中国語の単文では、主語が目的語に何らかの働きかけをすることによって、つまり、目的語を処置することになるので、「把」構文を使うほうがより自然になる。「把」を用いることで、目的語である「鲍勃」(ボブ)を述語の前に持ってくると、0のようになる。動詞「吓」(怖かす)が移動物である「鲍勃」(ボブ)の心理変化を表し、移動と出発点を表す「出了房间」(部屋から出る)は動詞句であり、「吓」(怖かす)をしたことを意味しており、結果として必ずしも「出了房间」(部屋から出る)にはならない。従って、派生的結果述語と見なすことができるだろう。

日本語では、ボブは部屋の外へ移動したが、サムが意図した行為と、サムは意図して

<sup>13</sup> (79) 'The article in the times made Bill angry at the government.のように *make* を取り上げると、文が成立するが、本章では考察に入れない。

いなかったという二通りの意味が取れる。一方、英語と中国語では、サムは意図していなかったという意味になる。英語及び中国語と同様に意図しない意味にするには、日本語の翻訳を「サムはボブを怖がらせて、ボブは部屋の外に出て行った」にする必要がある。そして、移動を表すのに、中国語と日本語は動詞で具現化し、英語は前置詞句で行っている。また、英語と中国語では単文で表現できる一方、日本語では「テ節」を使って、複文にする必要がある。これらを一覧にまとめると、次の表1になる。

	移動を表す要素	文
英語	前置詞	単文
中国語	動詞	単文
日本語	動詞	複文

表1

次のように、日本語では単文としては直訳できない三言語の例もある。

(83)a. The sound of siren frightened the thief away.

b. サイレンの音が泥棒を怖がらせて、{\*泥棒が逃げた/\*行かせた}。

c. 警笛声 吓 走/跑 了 小偷。

サイレンの音 脅かす 歩く/走る (離れる) PFV 泥棒

「サイレンの音が泥棒を怖がらせて、泥棒が逃げた。」

(83a)では、EO 動詞 *frighten* が移動者 *thief* の心理変化を表し、副詞 *away* を加えることで移動の意味を出させている。対応する日本語は(83b)のように、「泥棒が逃げた」としても、「行かせた」としても、十分に翻訳しきれないことがわかる。対応する中国語の(83c)では、動詞「吓」(脅かす)が移動物である「小偷」(泥棒)の心理変化を表し、動詞「走」(歩く)や「跑」(走る)がその場から離れるという意味になって移動を具現化している。

さらに、EO 心理動詞は結果述語と共起することもできる。

(84)a. Sam terrified Bob out of his wits.

b. サムはボブをひどく怖がせた。

c. 山姆 吓 坏 了 鲍勃。

サム 怯える 壊れる (程度) PFV ボブ

「サムはボブをひどく怖がせた。」

(84a)では、EO 動詞 *terrify* が *Bob* の心理変化を表し、前置詞句 *out of his wits* が、目的語

である Bob と叙述関係になっている。日本語は、(84b)で示すように、副詞としての形容詞連用形「ひどく」が怖がる程度を表しており、(84a)の英語と違って結果構文ではない。対応する中国語は(84c)になる。動詞「吓」が「鲍勃」(ボブ)の心理変化を表している。派生的な結果述語である「坏(壊れる)」で目的語の「鲍勃」(ボブ)を叙述し、結果構文になっている。意味に関しては、結果述語である「坏(壊れる)」は壊れたことを意味するのではなく、副詞として、「鲍勃」(ボブ)の怖がった程度が相当高いことを意味している。類似する派生的な結果述語には「死」(死ぬ)もあり、「吓死(了)」は死ぬほど怖がったことを意味する。つまり、中国語は日本語と同様、副詞で程度を表すのに対し、英語は、前置詞句で抽象的な移動と、程度の高さを表している。さらに、中国語は英語と同様、結果構文になっている。ここでの考察から、三言語において、移動表現と結果構文には、何らかの共通点があることが予想できる。この移動表現と結果構文の対照は具体的に第五章で見る。

3.4 節では、移動の意味を含まない動詞を用いた移動表現を考察した。英語の *all the way* 構文と、それに対応する日本語と中国語の構文や、EO 心理動詞に移動を表す前置詞句／動詞句を加えることで、文として移動を表すことができることがわかった。三言語とも副詞で表現しているところで共通している。日本語の「ずっと」は、主節の主語の動きと従属節の主語の動きの二つのタイプの動きを区別しないことを示した。一方、中国語では、この二種類の動作は、それぞれ「一路」と「一直」という二つの異なる副詞によって区別される。これらの二つの副詞はどちらも、日本語の「ずっと」と対応する。日本語では移動の意味を与えるために目的地が必要だが、英語の *all the way* と中国語の「一路」は、目的地なしで移動の意味が出せる。日本語と英語では、瞬間状態変化動詞を文の述語として移動の意味を表現するには、継続的な意味を引き出すために、動詞が自動詞の場合には主語が複数であることが、他動詞の場合には複数目的語が必要である。中国語では、「一路」だけで複数の意味を与える。自然現象において、日本語と英語では、話者の移動と事象の移動の意味の二つが読み取れる。これに対し、中国語では、話者の移動と事象の移動ではなく、範囲の拡大も読み取れる。日本語も中国語も語順の違いが、意味の解釈に影響を及ぼす。日本語では、経路句が文頭にある場合、話者の移動しか表さない。しかし、自然現象が文頭にある場合、事象の移動の意味が出てくる。一方、中国語では、経路句が文頭にある場合、話者の移動の意味が強くなる点で日本語と同じだが、自然現象が文頭にある場合は、自然現象の範囲拡大の意味が強くなることがわかった。

### 3.5 移動表現における構造的位置と統語的移動の観点から見る前置詞句／後置詞句<sup>14</sup>

本節では三言語の移動表現において、前置詞句／後置詞句の構造的位置と統語的移動について考察する<sup>15</sup>。前置詞句／後置詞句が表しているのは、主語の移動の方向なのか、目的語の移動なのか、主語や目的語の居場所なのかは、日本語、中国語、英語の三言語では異なるものと考えられる。

#### 3.5.1 PP の構造的位置

この節では、日本語、中国語、英語の三言語において、PP が表しているのは、移動の対象の結果的な位置なのか、主語が表す動作主の位置なのかを見る。そのために、具体的に構造的曖昧性と前置詞句／後置詞句の移動という二つの面から考察を行う。

##### 3.5.1.1 起点を表す「水の中から」と From the water

影山 (2002: 66)は日本語と英語の違いを説明するのに、以下のような対応する両言語の例文を挙げている。

(85)a. He pulled a big fish out of the water.

- b. 彼は水の中から大きな魚を引っ張った。
- c. 彼は水の中から大きな魚を引っ張り上げた。

影山 (2002)によると、英語の(85a)では、大きな魚が水の中にいて、そこから引き上げたという状況で使うことができるが、対応する日本語の(85b)では全く違う状況になる。つまり、「水の中から」は彼の居場所を表し、水の中にいるのは彼であり、そこから魚を引っ張ったという状況になる。(85a)の英語と同様の解釈にするには、(85c)のように複合動詞「引っ張り上げた」を使わないといけないということである。しかし、実際には(85)のどの文も、水の中にいるものの解釈は、目的語の魚なのか、主語の彼なのか曖昧である<sup>16</sup>。Suzuki (2012)と Koopman (2010)は、前置詞句が一般的に移動物の「方向 (Direction)」と「居場所 (Location)」の二つの解釈ができるということを示しているが、前置詞句が主語の居場所を表している可能性は考察していない。そのため、本章ではその解釈が可能であることを提示したい。

(85a)の英語では、目的語は水の中にいるが、主語の居場所は無指定である。(85b)と(85c)の日本語は、主語は水の中にいると解釈すると、目的語の居場所は無指定である。目的語は水の中にいると解釈すると、主語は無指定である。日本語ではこのように、二

<sup>14</sup> 本論文は著者が令和4年度に立命館大学文学研究科の立命館文学 (678)へ投稿した杜 (2022)「中国語、日本語及び英語における移動を表す前置詞句／後置詞句について—構造的位置と統語的移動の観点から—」の一部を加筆・修正したものである。

<sup>15</sup> 以下前置詞句と後置詞句は共に PP と表すことがある。

<sup>16</sup> 以下日本語の例についての判断は佐野まさき先生によるものである。

通りの解釈の可能性を有している。対応する英語は次のようになる。

(86) He pulled a big fish from the water.

以上をまとめたのが次の表 2 である。

	主語の居場所	目的語の居場所
(85a) He pulled a big fish out of the water.	無指定	水の中
(85b) 彼は水の中から大きな魚を引っ張った。	水の中	無指定
(85c) 彼は水の中から大きな魚を引っ張り上げた。	無指定	水の中
(86) He pulled a big fish from the water.		

表 2

先行研究では目的語の移動に着目した検討が行われ、PP が表しているのは主語の居場所であるか、目的語の居場所であるかを区別していない。しかし、上記の表 1 で示したように日本語、英語ともに、この区別は重要である。Inagaki (2001)と Yotsuya et. al. (2014)も第二言語習得の観点から、動詞枠付け言語に分類された日本語と、衛星枠付け言語に分類された英語を、それぞれ母語とする学習者の、移動に関する PP の習得を考察した。さらに、彼らは終点を表す前置詞句 (Goal PP)を考察したが、起点を表す前置詞句については考察しなかった。そこで、この節では、起点を表す前置詞句「水の中から」と From the water について、構造的曖昧性と PP の移動の二つの面から考察する。まずは構造的曖昧性から考察をはじめ。

日本語の(85c)では、水の中にいるのは主語である「彼」あるいは目的語である「魚」の二つの解釈ができる。これは構造的曖昧性で説明することができる。それは、「水の中から」が次の(87)のように「大きな魚を引っ張り上げた」という動詞句の外にある場合と、(88)のように動詞句の中にある場合の二つの可能性が考えられるからである。

(87) 彼は [PP 水の中から][VP 大きな魚を引っ張り上げた]

(88) 彼は [VP [PP 水の中から]大きな魚を引っ張り上げた]

(87)のように PP「水の中から」が動詞句の外にある場合は「水の中から」は彼の居場所を表し、(88)のように、「水の中から」が動詞句 VP の中にある場合は「水の中から」は魚の居場所を表していることがわかる。

次に、語順を変えることで、構造的曖昧性に影響が出るかを見てみよう。

(89) 水の中から、彼は大きな魚を引っ張り上げた。

(90) 彼は大きな魚を[PP 水の中から]引っ張り上げた。

(89)のように「水の中から」を文頭に置いても、(85c)と同様、彼が水の中にいる解釈と、魚が水の中にいる解釈という二つの解釈ができる<sup>17</sup>。一方、(90)のように「大きな魚」の後に「水の中から」を置くと、「魚」が水の中にいる解釈がより強い。これは、目的語の後に現れる PP「水の中から」は動詞句の中に入るからだと考えられる。しかし、実は(90)でも主語の彼が水の中にいて、魚は水の中にいるのではなく、地面にいるという解釈も不可能ではない。この解釈については 5.2 節で詳しく考察する。次は英語を見てみよう。

影山は(85a)の *out of the water* に対応する日本語の後置詞句を(85b)(85c)のように「水の中から」にしたが、本来日本語の「水の中から」と対応する英語は(86)で使われているような起点を表す前置詞句 *from the water* の方だと考えられる。(86)は次のような二つの構造で (が) 見ることができる。

(91) He [<sub>VP</sub> pulled a big fish] [<sub>PP</sub> from the water]

(92) He [<sub>VP</sub> pulled a big fish [<sub>PP</sub> from the water]]

(86)のように PP *from the water* が文末にある場合、(91)のように PP が *pulled a big fish* という動詞句の外にある場合と、(92)のように、PP が VP の中にある場合の二つの可能性が考えられ、つまり、水の中にいるのは「彼」と「魚」の二つの解釈ができる。*From the water* が文頭にある場合は次のようになる。

(93) *From the water, he pulled a big fish.*

(93)の *from the water* は主語 *he* の居場所を表しているとも、目的語 *a big fish* の居場所を表しているとも解釈できる。彼が水の中にいると解釈した場合、魚の元の居場所は無指定で、つまり、魚は岸の上にも良い。例えば、彼が水の中に隠れて、他人が釣って岸に置いた魚を盗むような場合である。ただし、この解釈を行う場合には、次の例のように、魚がどこへ行ったかを文中で述べたほうが自然である<sup>18</sup>。

(94) *From the water, he pulled a big fish, and it slid into the lake.*

また、魚が元々水の中にいるものと解釈した場合には、彼の居場所が無指定になる。次の(95) (Nathaniel Preston 先生による作例) を見てみよう。

<sup>17</sup> 二つの解釈があることを次の節で移動の観点から説明する。

<sup>18</sup> Nathaniel Preston 先生のご指摘による。

(95) From the air, he pulled a floating feather. From the water, he pulled a big fish.

この例では、二つの前置詞句 **from** を対比させることで、動詞の目的語(a floating feather と a big fish)の居場所を対比させているという解釈が可能である。

従って、(93)は **from the water** が文末にある(86)と同様に、二つの解釈が可能だと考えられる。続いて、日本語及び英語の文頭の PP の派生について考察する。

PP が文頭にある場合、PP が主語の居場所あるいは目的語の居場所を表すという解釈が可能である。PP は次の(97)のように最初から文頭にある場合と、(98)のように移動によって文頭に位置する場合の二つが考えられる。

(96) 水の中から、彼は大きな魚を引っ張り上げた。= (85c)

(97) [PP 水の中から] 彼は [VP 大きな魚を引っ張り上げた]

(98) [PP<sub>i</sub> 水の中から] 彼は [VP \_\_\_<sub>i</sub> 大きな魚を引っ張り上げた]



PP が文頭に現れた(96)には、二つの解釈ができる。(97)のように PP 「水の中から」が初めから文頭に位置し、「彼」が水の中にいるという解釈と、(98)のように VP にあった「水の中から」が文頭へ移動し、「魚」の居場所を表すという解釈の二つである。

次は日本語と対応する英語の例である。

(99) From the water, he pulled a big fish. = (93)

(100) From the water, he [VP pulled a big fish]

(101) From the water<sub>i</sub> he [VP pulled a big fish \_\_\_<sub>i</sub>]



文頭の **From the water** は主語 **he** の居場所を表すほか、目的語 **a big fish** の居場所を表すとも考えられる。後者の解釈の場合、(101)のように VP の中から文頭まで移動したという派生が考えられる。前者の解釈の場合は、**from the water** が(100)のように最初から文頭に位置するということになるが、日本語(96)の場合ほど自然ではない。つまり、英語では、PP が文頭までの移動と捉えた解釈のほうが有力だと考えられる。次節では対応する中国語の例を考察する。

### 3.5.1.2 中国語の起点を表す「从水里」

3.5.1 節で扱った日本語及び英語の前置詞句（「水の中から」、**from the water**）に対応する中国語の前置詞句は「从水里」である。この節では、「从水里」を構造的曖昧性と前置詞句移動の観点から考察を行う。まずは構造的曖昧性を見てみよう。

(87)/(91)と対応する中国語の構造は(102)である。(88)/(92)と対応する中国語の構造は(103)である。

(102) 他 [PP从水里] [VP把一条鱼拉了上来]。  
彼 から 水中 ACC 一匹 魚 引っ張る PFV 上がる 来る  
「彼は水の中から、一匹の魚を引っ張り上がってきた。」

(103) 他 [VP[PP从水里] 把一条鱼拉了上来]。  
彼 から 水中 ACC 一匹 魚 引っ張る PFV 上がる 来る  
「彼は一匹の魚を水の中から引っ張り上がってきた。」

(102)が示しているのは、水の中にいるのは、主語の「他」(彼)であるという解釈の構造であり、(103)が示しているのは、水の中にいるのは、目的語の「魚」(魚)であるという解釈の構造である。次に「从水里」を文頭に置いた例文は以下のようになる。

(104) ?从水里，他把一条大鱼拉了上来。

(104)は不自然な文である。(96)の日本語と違い、彼が水の中にいようが、水の外にいようが、いずれの解釈も不自然である<sup>19</sup>。「从水里」は、(105)のように目的語の後に置くこともできる。

(105) 他 [VP把一条鱼 [PP从水里] 拉了上来]。

(105)では「从水里」がVPの中に位置し、魚の居場所であることだけしか表していない。この点については、日本語の(90)と異なる。具体的な違いは5.2節で述べる。

以上をまとめると、日本語、中国語、英語の三言語は共に構造的曖昧性を持ち、PPがVPの外にあるという解釈も、中にあるという解釈もできる。中国語では、(105)のような語順とすることによって、解釈上の曖昧性を解消することができる。

次に、中国語でもPPの移動という操作ができるかについて、以下の例で考えてみよう。

(106) ?[PP从水里]他[VP把一条大鱼拉了上来]。

(107) ?[PP<sub>i</sub>从水里]他[VP把一条大鱼 \_\_\_\_\_<sub>i</sub>拉了上来]。

(108) 在水里，他把一条大鱼拉了上来。

<sup>19</sup> 不自然になる理由は具体的に3.5.2節で考察する。

(106)のように、前置詞句「从水里」は最初から文頭に位置する場合、つまり、VPの外にある場合は、不自然な文になる。自然な文にするには、(108)のように、起点を表す前置詞「从」(から)ではなく、出来事の発生場所を表す前置詞「在」を使い、前置詞句「在水里」(水の中で)を用いることで、主語「他」の居場所を表す必要がある。(107)では、「从水里」がVPの中から外まで移動し、魚の居場所を表すことで、文が自然になるはずだが、やはり不自然である。これは、前置詞句「从水里」を文頭に置く意義、すなわち、トピックのように話題化し、強調する理由がないからだと考えられる。では、強調する理由があれば自然になるのかという点について考えよう。Klippel (1991)は中国語では、終点や体勢を表す前置詞句は文頭に置くことが不可能だが、前置詞「从」で始まるPP(以下「从PP」と表記)を文頭に置くことは比較的的自然になると述べている。しかし、それがなぜなのかの説明はない。「从PP」が文頭に置かれれば(104)のそれよりは自然になる理由としては存現文であることからと考えられる。存現文というのは、人、あるいは事物がある場所(または時間)に存在、出現、消失することを表す文である。存現文<sup>20</sup>は既知のものは、未知のものより前にあるという原則に基づき、「場所句<sup>21</sup>/時間句+動詞+存在物/出現物/消失物」という語順になる(朱德熙 1982: 114)。移動の特徴を考えると、起点が既知であり、未知的な経路を通して、未知的な終点に到着することになる。よって、終点を表す前置詞句は未知と認識することができるので、文頭に置くことが不可能だと考えられる。一方、「从PP」は起点として既知であるから、(104)のように、文頭に置いても、それほど不自然にならないのだと分析でき

<sup>20</sup> 「存在・出現・消失」を表現している例はそれぞれ次のとおりである。

- (i)
- |     |    |     |       |
|-----|----|-----|-------|
| 桌子上 | 放  | 着   | 一本词典。 |
| 机の上 | 置く | ASP | 一冊の辞書 |
- 「机の上に一冊の辞書が置いている。」
- (ii)
- |    |    |     |    |      |
|----|----|-----|----|------|
| 昨天 | 发生 | 了   | 一件 | 大事。  |
| 昨日 | 発生 | PFV | 一つ | 大きな事 |
- 「昨日、大きな事が発生した。」
- (iii)
- |    |    |     |     |     |        |
|----|----|-----|-----|-----|--------|
| 这个 | 宿舍 | 搬   | 走   | 了   | 几个人。   |
| この | 宿舍 | 引越し | 離れる | PFV | いくつかの人 |
- 「この宿舍から何人かが引越して離れた。」

「既知」と「未知」で語順が異なることを説明するのに、次のような有名な二つの例が見られる。

- (iv)
- |    |   |     |
|----|---|-----|
| 下  | 雨 | 了。  |
| 降る | 雨 | PFV |
- 「雨が降ってきた。」
- (v)
- |   |     |     |
|---|-----|-----|
| 雨 | 停   | 了。  |
| 雨 | 止まる | PFV |
- 雨が止んだ。

中国語は既知のものは前で、未知のものは後ろにあるという語順なので、雨はまだ降り始めていないことから、雨は「未知」なことになる。つまり、d)のように未知の「雨」は動詞「下」(降る)の後ろに置かれることになる。一方、雨が止んだという表現は異なる。雨はすでに降っていることから、雨は既知のものである。従って、e)のように既知の「雨」は動詞「下」(降る)の前に置かれることになる。

<sup>21</sup> ここでの「場所句」は出来事が発生する場所を示す。場所を表す前置詞「在」を用いた「在水里(水の中で)」を、(104)の「从水里」と入れ替えると文は完全に許容される。

る。

どんな場合に「从 PP」が文頭に現れるのだろうか。3.5.1.1 節であげた(95) (= From the air, he pulled a floating feather. From the water, he pulled a big fish)のように、対比の意味が含まれている中国語の例文を作ると、次のようになる。

- (109) 从 河 里, 他 把 一 条 鱼 拉 了 上 来;  
から 川 中 彼 ACC 一 匹 魚 引 っ 張 る PFV 上 がる 来 る
- 从 海 里, 他 把 一 只 虾 拉 了 上 来。  
から 海 中 彼 ACC 一 匹 エビ 引 っ 張 る PFV 上 がる 来 る
- 「川からは、彼は一匹の魚を引っ張り上げてきた。海からは、彼は一匹のエビを引っ張り上げてきた。」

「从河里」(川から)と「从海里」(海から)の対比によって、川からは魚、海からはエビのように、対比の意味を表現することで、起点を表す前置詞句が文頭に現れても、文が自然になる。この点については、中国語は英語と同様である。

### 3.5.1.3 移動の結果位置を表す「水の外に」と Out of the water

He pulled a big fish out of the water の out of the water に対応する日本語に関しては、影山は(89)のように、「水の中から」にした。しかし、移動の結果として、目的語である魚は水の外、つまり、空中にあるという解釈ができることから、out of the water に対応する日本語は「水の外に」だと考えられ、日英の対照研究においては、「水の中から」より「水の外に」のほうがより適切であろう。この節では、「水の外に」と out of the water の構造的曖昧性と PP の移動から考察を行う。まずは構造的曖昧性の考察である。

PP が結果位置を表す英語と日本語の例は次のようになる。

(110) He pulled a big fish out of the water. = (85a)

(111) 彼は水の外に大きな魚を引っ張り上げた。

(110)では、out of the water は pulled a big fish が作る動詞句 VP の中にあると考えられる。

(111)の日本語も、「水の外に」は動詞句の中に位置し、英語同様、魚の移動の終点、すなわち、移動の結果位置を表しているものと解釈できる。

(110)と(111)の PP を文頭に置くとそれぞれ次のようになる。

(112) ?Out of the water, he pulled a big fish.

(113) ?[PPi Out of the water] he [VP pulled a big fish \_\_\_\_i]

(114) 水の外に、彼は大きな魚を引っ張り上げた。

(115) [PP<sub>i</sub> 水の外に] 彼は [VP \_\_\_\_<sub>i</sub> 大きな魚を引っ張り上げた]。

(112)は(99)と同様の分析ができる。**out of the water** は魚の結果位置しか表さないが、不自然な文である。一方、(115)は(111)と同様の解釈ができる。「水の外に」は目的語「大きな魚」の結果位置しか表せないが、文としては自然である。さらに、(95)と同様に対比的な文脈にすると、次の(116)のように文頭に PP があっても文が自然になる。

(116) **Out of the river, he pulled a carp; Out of the pond, he pulled a goldfish.**

PP を文頭まで移動する文の派生は次のようになる。

(117) ?[PP<sub>i</sub> out of the water, he [VP pulled a big fish \_\_\_\_<sub>i</sub> ].



(118) [PP<sub>i</sub> 水の外に] 彼は [VP \_\_\_\_<sub>i</sub> 大きな魚を引っ張り上げた]。



(117)は、派生としては問題ないが、上述したように、対比的な文脈が必須である。

以上をまとめると、結果位置を表す PP は日本語も英語も、構造的曖昧性がなく、「水の外に」と **out of the water** は VP の中に由来し、魚の居場所を表す解釈しかできない。

3.5.1 節での考察をまとめると、以下のようなになる。日本語では、PP が最初から文頭にある場合、PP が主語の居場所を表すことになる。PP が VP の中から文頭に移動した場合、PP が目的語の居場所を表すことになる。一方、英語は日本語と違い、PP が VP の中から文頭まで移動したという解釈が強い。PP が最初から文頭に位置する場合、主語の位置を表す解釈は日本語ほど自然ではない ((93)参照)。ただし、対比の文脈では、PP が VP の中から文頭に移動すると、目的語の表すものの移動の出発点を表し、文は自然になる ((95)参照)。中国語では、英語と同様、PP が最初から文頭に位置する場合、文が不自然だが、対比の文脈で、VP の中から文頭に移動する場合では、目的語の表すものの移動の出発点を表すことになり、文が自然になる ((109)参照)。しかし、英語と違い、中国語では、対比でない限り、VP の中から文頭への移動は英語よりも不自然になる。

三言語の共通点としては、日本語も英語も中国語も、PP が元々 VP の外にある場合は主語の居場所を表し、元々 VP の中にある場合は目的語の居場所を表すことになっている。英語では、初めから文頭にある **from the water** は主語の行為の起点も表せる ((93)参照)。一方、初めから文頭にある **out of the water** では主語の行為の終点を表すことはでき

ない。

### 3.5.2 移動表現における目的語の構造的移動

この節では日本語の(90)及び中国語の(106)について分析を行う。(90) (下の(119)として再掲)は、「水の中から」が目的語「魚」の直後に位置する場合、「魚」が水の中にいる解釈が強いが、主語の彼が水の中にいる一方、魚は地面にいるという解釈も不可能ではないと述べた。この解釈は目的語の移動から出てくるものと考えられる。

(119) 彼は大きな魚を [PP 水の中から] 引っ張り上げた。=(90)

(120) 彼は [NP<sub>i</sub> 大きな魚] を [VP [PP 水の中から] \_\_\_\_\_<sub>i</sub>] 引っ張り上げた。



(121) 彼は [NP<sub>i</sub> 大きな魚] を [PP 水の中から] [VP \_\_\_\_\_<sub>i</sub>] 引っ張り上げた。



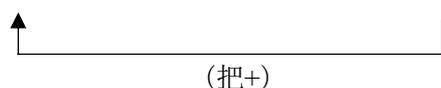
(120)で示しているように、VPの中に位置する目的語である「大きな魚」がVPの外、つまり、VPの中から、主語の直後に移動したことが考えられ、PP「水の中から」もVPの中にあることから、「水の中から」が表しているのは魚の居場所であると考えられる。しかし、(121)のように、PP「水の中から」が元々VPの外にあっても、「大きな魚」はVPの中からVPの外、つまりPPの前に移動した可能性もある。その場合、PP「水の中から」は「彼」の居場所を表すことになっている。従って、(119)は(120)と(121)の二つの可能性が考えられ、二つの解釈ができる。次は中国語についての考察である。

今までの例文では日本語の語順と一致させるために、「把」構文を用い、目的語を動詞の前に移動し、「S 把 OV」という語順にしたが、SVOの語順にすると、次のようになる。

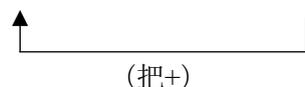
(122) 他 从 水 里 拉 上 来 了 一 条 大 鱼。  
彼 从 水 中 引 っ 張 る あ げ る く る PFV 一 匹 大 き な 魚  
「彼は水の中から大きな魚を引っ張り上げてきた。」

一般的な語順ではなく、わざわざ「把」を用いた文は、沈(2002)によると、話し手の感情、視点、認識という主観性を示す意味があり、目的語の移動も伴う。

(123) 他 [VP [NP<sub>i</sub> 把一条大鱼] [PP 从水里] [VP 拉上来了 \_\_\_\_\_<sub>i</sub>]]。



(124) 他 [VP [PP 从水里] [NP<sub>i</sub> 把一条大鱼] [VP 拉上来了 \_\_\_\_<sub>i</sub>]]。



(123)のように、「把」を用いることで、目的語の「一条大鱼」は文末から主語の直後まで移動している。あるいは、(124)のように、目的語がPP「从水里」の直後まで移動している。(123)も(124)も、「把」の付いた目的語はVPの中に留まっており、VP内の目的語の焦点化が行われているものと考えられる。

以上をまとめると、目的語の移動に関して、中国語では、PPは元々VP中に位置し、目的語の移動は、VP内の移動であって、PPが目的語の居場所のみしか表せない。一方、日本語では、中国語と異なり、目的語がVPの中から外へ移動したとしても、PPは元々VPの外にある場合には、主語の居場所を表すが、PPが元々VPの中にある場合には、目的語の居場所を表すことになる。

次節では、ここまで考察してきた構造的曖昧性と移動の観点から、起点を表す前置詞句「病室から」と対応する英語、中国語でも説明が可能かどうかを検証してみる。

### 3.5.3 「病室から」とそれに対応する中国語の検証

この節では、3.5.1節と3.5.2節での考察が、起点を表す前置詞句「病室から」とそれに対応する中国語の前置詞句を持つ文の構造や、解釈にも当てはまるかどうかを検証する。

#### 3.5.3.1 起点を表す前置詞句「病室から」

影山 (2002: 62)は次のような例を挙げた。

(125) He pushed the wheelchair out of the sickroom.

(126) 彼は病室から車椅子を押した。

影山 (2002: 62)は、(125)の英文を「[彼が] 車椅子を押して、部屋の外に出ていった」と解釈し、(126)の日本語を「押した人は病室の中において、そこから手を伸ばして、廊下にある車椅子を押した」と解釈している。英語と同じ解釈を行うには、様態動詞「押す」ではなく、移動を表す動詞「行く」を加えて、次の(127)のように、「押して行った」を用いないといけない。

(127) 彼は病室から車椅子を押して行った。

| 主語の位置 | 目的語の位置

表 2	(a)	病室から	無指定
	(b)	無指定	病室から

影山の解釈に加え、(125)の英語は(126)の日本語と異なり、主語の彼と目的語の車椅子と一緒に移動しているという解釈もできる。さらに、日本語の(127)は、表 2 で示しているように、二つの解釈ができると考えられる。一つ目は、「病室から」が彼の行為の起点を表し、車椅子の位置が無指定であるとの解釈で、二つ目は、「病室から」が車椅子の移動の起点を表し、彼の位置は無指定であるとの解釈である。表 2 の(a)(b)二つの解釈の構造はそれぞれ(128)(129)のようになる。

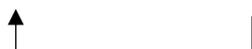
(128) 彼は [PP 病室から] [VP 車椅子を押して行った]。

(129) 彼は [VP [PP 病室から] 車椅子を押して行った]。

(128)は PP が VP の外にあることで、押した人は病室の中にいて、車椅子を押して行ったという(a)の解釈になる。ただし、(a)の「無指定」で示めているように、車椅子は初めから病室の中にある必要がなく、出入り口にあっても良いということである。(129)は PP が VP の中にあるため、車椅子が病室の中から押されて行ったという解釈になる。ただし、主語の彼の居場所については、(b)の「無指定」のように、この構造からはわからない。次を見てみよう。

(130) [PP 病室から] 彼は [VP 車椅子を押して行った]。

(131) [PP<sub>i</sub> 病室から] 彼は [VP \_\_\_\_\_<sub>i</sub> 車椅子を押して行った]。



(130)のように、「病室から」が最初から文頭にある場合、主語の彼の居場所を表すことができる。一方、(131)のように、「病室から」は最初 VP の中であって、車椅子の移動の起点を表し、PP が VP の中から、文頭へ移動した派生も可能である。つまり、解釈としては(130)は(128)と同じであり、(131)は(129)と同じである。

語順の違いで、「病室から」が目的語「車椅子」の直後にある場合は次の(132)になる。

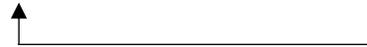
(132) 彼は [VP 車椅子を [PP 病室から] 押して行った]。

(132)は、構造的に「病室から」は VP の中であって、目的語である車椅子の居場所を表すことしかできないはずである。しかし、次のような二つの派生が考えられる。

(133) 彼は [NP<sub>i</sub> 車椅子] を [VP [PP 病室から] \_\_\_\_\_<sub>i</sub> 押して行った]。



(134) 彼は [NP<sub>i</sub> 車椅子] を [PP 病室から] [VP \_\_\_\_\_<sub>i</sub> 押して行った]。



(133)(134)はともに、目的語の移動による派生だと考えられる。(133)では、「病室から」はVPの中にあり、目的語である車椅子がVPの中から外へ移動し、VPの中のPP「病室から」は車椅子の移動の起点を表していることになる。(134)では、PP「病室から」は元々VPの外にあったので、主語の彼の行為の起点を表している。

以上で見てきたことは3.5.1節での考察と一致している。

### 3.5.3.2 中国語の起点を表す前置詞句「从病房」(病室から)

この節では、「病室から」と対応する中国語を考察する。(128)(129)と対応する中国語の例は次のようになる。

(135) 他 [PP 从病房] [VP 把轮椅推了出去]。

(136) 他 [VP [PP 从病房] 把轮椅推了出去]。

(135)と(136)が示している構造のとおり、PP「从病房」(病室から)はそれぞれ主語の「他」(彼)の位置を表しているとする解釈と、目的語の「轮椅」(車椅子)の移動の起点を表しているとする解釈の二つがある。PP「从病房」(病室から)が文頭にある場合は次のようになる。

(137) ?从 病房, 他 把 轮椅 推 了 出 去。  
から 病室 から ACC 車椅子 押す PFV 出る 行く  
「病室から、彼は車椅子を押して出て行った。」

(137)はしかし、不自然な文である。(137)は次の(138)(139)の二つの構造が考えられる。

(138) ?[PP 从病房] 他 [VP 把轮椅推了出去]。

(139) ?[PP<sub>i</sub> 从病房] 他 [VP 把轮椅\_\_\_\_\_<sub>i</sub> 推了出去]。



(138)では、PP「从病房」が最初から文頭に位置し、主語の「他」の居場所を表すが、その解釈では文が不自然になる。(139)のように、VPの中から文頭へ移動した場合も、不

自然なままである。3.5.1.1 節~3.5.1.3 節の考察を踏まえると、対比の文脈にすれば、文が自然になるはずである。次がその例である。

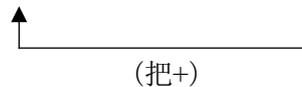
- (140) [PP<sub>i</sub> 从 病房] 他 [VP 把 轮椅\_\_\_\_<sub>i</sub> 推 了 出 去]。  
 から 病室 彼 ACC 車椅子 押す PFV 出る 行く
- [PP<sub>i</sub> 从 教室] 他 [VP 把 椅子\_\_\_\_<sub>i</sub> 推 了 出 去]。  
 から 病室 彼 ACC 椅子 押す PFV 出る 行く
- 「病室からは、彼は車椅子を押して行った。教室からは、彼は椅子を押して行った。」

(140)は対比の文脈であることから、自然な文になっている。VP の中から外へ移動した PP は「轮椅」／「椅子」の移動の起点を表しており、3.5.1.2 節での考察と一致している。

### 3.5.3.3 目的語の移動の検証

この節では、目的語の移動を検証する。次を見てみよう。

- (141) 他 [VP [NP<sub>i</sub> 把轮椅] [PP 从病房] 推了\_\_\_\_<sub>i</sub> 出去]。



- (142) 他 [VP [PP 从病房] [VP [NP<sub>i</sub> 把轮椅] 推了\_\_\_\_<sub>i</sub> 出去]。



(141)と(142)は、いずれも VP 中での目的語の移動である。PP も VP 中にあるため、PP は目的語の居場所だけしか表せない。

次は(126)の日本語と対応する中国語である。

- (143) 他 从 病房 推 了 轮椅。  
 彼 から 病室 押す PFV 車椅子  
 「彼は病室から車椅子を押した。」

(143)は(126)と同様、主語が病室の中において、車椅子の位置が無指定になっている。押された車椅子の結果的な位置は分からない。「病房 (病室)」をさらに文末にもつけると、次の(144)になる。

(144) 他 从 病房 把 轮椅 推 出 了 病房。  
 彼 から 病室 ACC 車椅子 押す 出る PFV 病室  
 「彼は病室から車椅子を病室の外に押し出した。」

(144)は目的語「轮椅」に「把」をつけて、目的語を動詞「推」(押す)の前に置いた文である。(144)のPP「从病房」は出来事が発生する場所と移動の出発点のどちらの意味にも取ることができる。従って、(144)は二つの解釈ができる。一つ目は、病室が出来事の発生場所として、彼が病室から、病室にある車椅子を押して、車椅子と一緒に病室の外へ出たという解釈である。二つ目は、病室は車椅子の移動の出発点として、主語の彼が、病室にある車椅子を押して、車椅子だけが病室の外へ出たという解釈である。この時、主語の彼は病室にいる必要はないが、現実的には病室にある車椅子を押すためには、彼も病室にいると推測される。一方、(143)では、この二つの解釈の違いを明確にできない。

### 3.5.4 「拉出」(引っ張り出す)「拉上」(引っ張り上げる)と対応する日本語の比較

今まで見てきた中国語の例からわかるように、中国語では終点を表すのに「出」か「上」を使う。「水面」という境界線を表す表現とともに「出」を使って、以下のような例を示すことができる。

(145) 他 把 一条 大鱼 拉 出 了 水面。  
 彼 ACC 一匹 大きな魚 引っ張る 出す PFV 水 表面  
 「彼は一匹大きな魚を水面の外に引っ張り出した。」

(145)は、彼が魚を水面の下から水面の上へ、つまり、「水面」という境界線を突破し、空中まで引っ張り出したという解釈になる。中国語の「出了水面」が持つ境界線を突破するという意味と対応する日本語は次のようなものが考えられる。

(146) 彼は一匹大きな魚を水面の中から外に引っ張り出した。

(146)のように、日本語では相対位置を表す名詞「中」「外」を含む「水面の中から外に」を使うことで、水面という境界線を突破する意味が出てくる。

次は(147)の「出」の代わりに「上」を使った例である。

- (147) 他 把 一条 大鱼 拉 上 了 水 面。  
 彼 ACC 一匹 大きな魚 引っ張る 上げる PFV 水 表面  
 「彼は一匹大きな魚を水面まで引っ張り上げた。」

(147)のように「上」を使うと、魚が最初水の中にいて、水面まで達しているという解釈と、水面の上まで到達するという解釈の二つの解釈ができる。二つとも、水の中から距離のある終点まで、上がってくる点で共通している。(145)と(147)の解釈を図にすると、次のようになる。「上」にある二つの解釈を「上<sub>1</sub>」と「上<sub>2</sub>」として表記する。

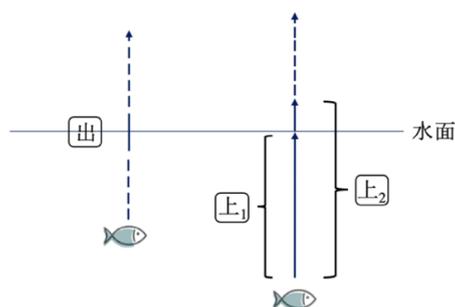


図 1

図 1 で示している「上<sub>1</sub>」と「上<sub>2</sub>」の二つの意味にそれぞれ対応する日本語は次のようなものが考えられる。

- (148) 彼は一匹大きな魚を水面まで引っ張り上げた。  
 (149) 彼は一匹大きな魚を水面の上に引っ張り上げた。

(148)と(149)のように、日本語では「水面まで」と「水面の上に」の使い分けによって、中国語「上了水面」の二つの意味を表すことができる。図 1 の「上<sub>1</sub>」で示しているように、深さのある水の中から、水面という終点まで魚が移動したことを表すには、(148)のように「まで」が適切である。「上<sub>2</sub>」の意味を表す場合、相対位置を表す「の上」が必要であり、(149)のように「水面の上に」という表現になる。Talmy (1985)の空間移動の類型論によると、中国語は英語と同様、衛星枠付け言語に属し、日本語は動詞枠付け言語に属する。しかし、(145)(147)では、移動の経路を表す（している）「拉出了水面」と移動の経路及び終点を表す「拉上了水面」における二番目の要素「出」「上」は動詞であるので、中国語は動詞枠付け言語の性質を持っていることになる。さらに、(148)(149)の日本語では下線部のような異なる後置詞句の使い分けで、中国語の動詞句の意味と対応することがあるので、日本語は衛星枠付け言語の性質も持っていることになる。

### 3.6 まとめ

本章では、移動の意味は動詞だけでなく、PP（前置詞句／後置詞句）や副詞句でも移

動を表すことを考察の対象として、具体的に、移動の意味を含まない動詞を用いる移動表現を考察した。この結果、英語の *all the way* 構文と、それに対応する日本語と中国語の構文や、EO 心理動詞に移動を表す前置詞句／動詞句を加えることで、移動を表すことができることがわかった。

そして、移動を表す文に対して、PP（前置詞句／後置詞句）の文中での構造的曖昧性及び統語的な移動を考察した。さらに、目的語の移動についての考察も加えた。文中に位置する PP は VP の中にあるか、VP の外にあるかの解釈がしばしば曖昧である。PP の移動において、中国語も英語も VP の中から文頭に移動すると、対比的に解釈される限り、文は自然になる。中国語の「把」を伴う目的語の移動において、PP が元々 VP 中に位置し、目的語の移動は、VP 内にとどまり、PP は目的語の居場所しか表せない。さらに、「出」と「上」の使い分けで、「出」は突破する面を、「上」はと到達する面を表現することができる。一方、日本語では、同じ意味を表すのに相対位置を表す名詞が必要である。

## 第4章 日中英三言語における結果構文

### 4.1 はじめに

第二章で見たように、Talmy (1985)が用いた‘resultative complement’は中国語の「方向補語」と「結果補語」の両方に対応していると考えられる。方向補語は位置変化の結果を表す要素、結果補語は状態変化の結果を表す要素であり、どちらも、動詞の後ろに位置し、結果を表す。この点で、移動表現は結果構文と同様である。第三章では、三言語において、移動表現の特徴及び共通点と相違点を見てきた。本章は日中英三言語から、状態変化を表す結果構文を考察する。

本章の構成は以下のとおりである。まず、4.2節で、先行研究を概観し、三言語における結果構文の特徴を明らかにする。次に、4.3節で、三言語における結果構文の動詞と結果述語の関わりを考察し、4.4節では、直接目的語制限 (Direct Object Restriction) が三言語ともに適用されるか否かを考察する。4.5節では、英語と日本語を比較しながら、中国語の結果構文である「非対格動詞+非対格動詞」の構文を見る。最後に、4.6節で本章の分析をまとめる。

### 4.2 三言語の結果構文について

現代中国語の伝統的な分析では、(1)のような位置変化を示す構文における「進」(入る)などの位置変化を表す要素を「方向補語」と呼んでいる。(2)で示した状態変化を表す構文の例では、「累」(疲れる)のような結果述語を「結果補語」と呼んでいる。現代中国語では、このように、位置変化を表す「方向補語」と状態変化を表す「結果補語」を区別している(呂 1980、朱 1982、刘他 1983、刘 1998)。

(1) 他 跑 进 了 房间。  
彼 走る 入る PFV 部屋  
「彼は走って部屋に入った。」

(2) 他 跑 累 了。  
彼 走る 疲れる PFV  
「彼は走り疲れた。」

(1)と(2)は、同じ動詞V「跑」(走る)が行為を表している。そして、その直後に位置する述語Rが行為の結果を表しており、具体的には(1)の、「进(了)房间」(部屋に入った)という位置変化を表す述語と、(2)の「累」(疲れる)という状態変化を表す述語に分かれている。この結果を表す述語Rは共に非対格動詞になっている。(1)と(2)が示すよ

うな、行為と結果をこの順番で表す構文は Verb Resultative Construction (以下 VR 構文) と呼ばれる。

また、中国語の VR 構文に、日本語の V1V2 の形をした複合動詞が対応する事例が頻繁に見られることから、中国語の動詞と結果補語の組み合わせと、日本語の複合動詞とを比較する研究が盛んに行われてきた。こうした研究例としては、望月 (1990a)、楊 (2008)、申 (2009)、崔 (2013)、陳 (2019)などが挙げられる。

具体的に、次の(3a)と(3b)を見てみよう。

(3) a. 太郎は二郎を押し倒した。

b. 张三 推 倒 了 李四。  
張三 押す 倒れる PFV 李四  
「張三が李四を押し倒した。」

(3a)は、太郎が二郎を押して、二郎が倒れたという解釈になり、(3b)は、張三が李四を押して、李四が倒れたという解釈になる。(3a)で示している日本語の複合動詞「押し倒す」と、(3b)で示している動詞と結果の組み合わせ「推倒」(押し倒す)はともに、前項となる動詞が原因を表し、後項となる動詞は結果を表しているという共通性がある。ただし、日本語の複合動詞は「他動詞+他動詞」であることから、結果を表す後項動詞は他動詞になっている。他方、中国語の、動詞と結果の組み合わせの場合は、「他動詞+非対格自動詞<sup>22</sup>」の組み合わせとなっており、自動詞で結果を表している。影山 (1993: 117)の他動性調和の原理によると、他動詞は他動詞と、非能格自動詞は非能格自動詞と、他動詞は非能格自動詞と結合して複合動詞になる。しかし、(3b)で示しているような「推倒」(押し倒す)という「他動詞+非対格自動詞」の結合は日本語では存在しない(「\*押し倒れる」)と思われる。この点で、中国語の VR 構文は日本語の複合動詞とは異なっている。

中国語の VR 構造を結果複合動詞とみなす先行研究は多い(木村 2003、沈 2004、于 2015)が、中国語の「推倒」(押し倒す)は日本語の「押し倒す」とは違うため、複合動詞と見るには無理がある。日本語の V1V2 の形をした複合動詞は、V1V2 の間に何も入れることができない。これに対し、「推」と「倒」の間には、次の(4)(5)のように、能力可能を表す助詞「得」や能力可能の否定を表す「不」を加えることができる。

<sup>22</sup> 「推」(押す)は主語と目的語を要求する二項動詞であるため、他動詞になっている。「倒」(倒れる)は対象だけをとる一項動詞なので、一般に非対格動詞とされる。

- (4) 张三 推 得 倒 李四。  
 張三 押す 倒れる 李四  
 「張三が李四を押し倒せる。」

- (5) 张三 推 不 倒 李四。  
 張三 押す NEG 倒れる 李四  
 「張三が李四を押し倒せない。」

中国語の VP 型結果構文の V1 と V2 との繋がり、日本語の複合動詞の V1 と V2 の繋がりよりも弱いと言える。従って、先行研究に反し、中国語の VP 型結果構文と日本語の複合動詞は、区別して見る必要がある。

続いて、日本語と英語の結果構文にかかる対照分析の例としては、影山 (2001, 2002, 2021)、Suzuki (2021)、三原(2022)などが挙げられる。これらの先行研究は次のような日本語の結果述語と英語の結果述語を対照している。

- (6) a. ジョンは壁を赤く塗った。  
 b. John painted the wall red.

- (7) a. 太郎は花瓶を粉々に割った。  
 b. Taro broke the vase into pieces.

- (8) a. パン生地を平らに伸ばした。  
 b. The cook pressed the dough flat. (影山 2002: 90)

(6)-(8)の英語でわかるように、英語では、結果述語として red, flat のような AP (Adjective Phrase)が使われているのと同時に、into pieces のような PP も使われている。日本語に関しては、影山 (2001: 156)は「赤く」のような述語を「形容詞+く」と、「平らに」のような述語を「形容動詞+に」とみなしており、影山の分析では、(6a)の「赤く」と(8a)の「平らに」は AP になる。(7a)の「粉々に」に関しては、ナ形容詞として名詞を修飾することができない(粉々 (の/\*な) 花瓶)ため、「粉々」は名詞と同類と本研究では見ることにする。つまり、「粉々に」は「名詞+助詞」で、PP になる。従って、(6)-(8)で示しているように、日本語も英語も、結果述語は AP 型結果述語と PP 型結果述語の二種類があることになる。上で見た(1)(2)のような中国語の VR 構文は次節以降で詳しく見るが、VR 構文には、AP 型結果構文 (4.4.1 節) と VP 型結果構文 (4.3 節) が存在する。

### 4.3 三言語における結果構文の動詞と結果述語の関わり

影山 (2001: 155)は、結果構文を「主動詞が表す行為の結果として何らかの状態変化が生じることを表す」と定義した。さらに、影山 (2001: 159)は動詞の意味の中に状態変化が含まれているか否かが、結果構文の成立に影響すると主張している (影山 (2002)も参照)。Washio (1997: 7)は、動詞の意味と結果述語の意味がお互いに完全に独立しているような結果構文を *Strong resultative* と呼び、それ以外を *Weak resultative* と呼んでいる。影山 (2001: 164)は *Strong resultative* に対応するものを「派生的な結果構文」と呼び、*Weak resultative* に対応するものを「本来的な結果構文」と呼んでいる。英語も日本語も「本来的な結果構文」を許すが、日本語は「派生的な結果構文」を許さない (影山 2001: 164, 三原 2022: 139-140)。影山 (2001: 159)で示唆されているように、二種類の結果構文に分類する必要があるのは、日英では動詞の意味の中に状態変化が含まれているかどうか、結果構文の成立に影響するからである。本節は日本語、中国語及び英語の結果構文の比較から、動詞の意味の中の状態変化の有無と結果構文の許容度との関係を概観する。

#### 4.3.1 日本語と中国語における結果構文と動詞の中にある状態変化の有無

日本語の結果構文についての先行研究には、影山 (2001, 2002, 2021)、Suzuki (2012)、三原 (2022)などがあり、影山 (2001: 156)は、英語の結果構文の例 (後出) の日本語訳として、次の(9)のような結果構文を挙げている。

- (9) a. ステンドグラスが粉々に壊れた。  
b. ジョンはステンドグラスを粉々に壊した。

(9a)と(9b)では、ステンドグラスが割れた結果、それがどうなったのかを具体的に表現した「粉々に」が結果述語になっている。「粉々に」は「形容動詞+に」という形になるため、AP型結果構文になっている。非対格動詞の例(9a)でも、他動詞の例(9b)でも、動詞は状態変化の意味が含まれ、動詞「壊れる」「壊す」の意味から「粉々に」という状態を予測できる。影山 (2001)はこのような構文を「本来的な結果構文」と呼び、Washio (1997)は *Weak resultative* と呼んでいる。

中国語の結果構文及び日本語との対照分析についての先行研究には、沈 (2004)、丸尾 (2005)、申 (2007, 2009)、楊 (2008)、邱 (2017)などがある。他の言語の結果構文との対照で、中国語の結果構文には特別な性質があることがしばしば指摘されている。中国語で、動詞が他動詞、項が一つの例を作ると次のようになる。

- (10) 花瓶 打 碎 了。  
花瓶 叩く 割れる PFV  
「花瓶が粉々に割れた。」

(10)の「打+碎」は「他動詞+非対格動詞」という、影山 (1993: 117)の他動性調和の原則に反する組み合わせになっている。他動詞「打」に状態変化がなく、結果述語「碎」(割れる)がVPであるため、(10)はVP型結果構文になっている<sup>23</sup>。(10)は他動詞「打」を用いているにも関わらず、項は「花瓶」(花瓶)一つしか持たないため、「花瓶」は他動詞「打」の対象でありながら、非対格動詞「碎」の対象にもなっている。「花瓶」には二つの役割があると考えられる。結果述語である非対格動詞「碎」(割れる)が、「花瓶」(花瓶)の結果状態を叙述している。通常、中国語の語順はSVOで、主語は動詞の前に位置し、目的語は動詞の後に位置するが、目的語であるはずの「花瓶」が主語の位置を占めている。このように、動作主ではなく、対象が他動詞の主語の位置を占めるようなものをFake Subjectと呼んでおこう。擬似主語(Fake Subject)についての考察はまた具体的に4.4.3節でみる。

次は他動詞について、項が二つの例を見てみよう。

- (11) 太郎 打 碎 了 花瓶。  
太郎 叩く 割れる PFV 花瓶  
「太郎は花瓶を叩いて、花瓶が割れた。」

(11)の中国語は(9)の日本語と同様、項を二つ持つ他動詞型結果構文である。(11)の主語である「太郎」は動詞「打」の動作主であり、非対格動詞である結果述語「碎」(割れる)が目的語である「花瓶」の結果状態を叙述している。しかし、(10)と(11)の中国語の動詞「打」(打つ)には、対応する日本語と違って、動詞の意味に状態変化が含まれておらず、行為の意味しかない。つまり、中国語では、動詞の意味の中に、状態変化が含まれていなくても、結果構文が成立する<sup>24</sup>。(10)(11)のように、中国語の結果構文はVP型結果構文になっている。影山 (2001)が「本来的な結果構文」、Washio (1997)がWeak resultativeと呼ぶものである。

次は非能格動詞を使って、項が一つだけの例である。

- (12) a. 太郎 跑 累 了。  
太郎 走る 疲れる PFV  
「太郎はクタクタに走った。」

<sup>23</sup> 以下の中国語の結果構文の例はすべてVP型である。

<sup>24</sup> 邱 (2017)や陽 (2008)や申 (2009)では、結果構文に対し、状態変化の意味の有無の関与については触れていない。

b. \*太郎はクタクタに走った。

(12a)では、非能格動詞「跑」(走る)と非対格動詞「累」(疲れる)の組み合わせで、動詞「跑」には状態変化の意味が含まれないが、文法的である。結果述語である「累」が主語である「太郎」を叙述しているかに見えて、直接目的語制限を守らなくなるようだが、結果述語「累」は非対格動詞であることで、結果述語である「累」は、表層構造で主語に見えて、深層構造で目的語になる「太郎」と叙述関係になっている。具体的な考察は4.4.3節でみる。日本語では、(12c)の「走る」のように、動詞の意味の中に状態変化がない場合、動詞「走る」の意味から、クタクタという状態を予測できないため、結果述語をつけても、非文になる。このような構文を影山(2001)は「派生的な結果構文」と呼び、Washio(1997)は *Strong resultative* と呼んでいる。

次は動詞に非能格動詞を使って、項を二つ持つ例である。

(13) a. 太郎 跑 破 了 鞋子。  
太郎 走る 破れる PFV 靴  
「太郎が走ったことで、靴が破れた。」

b. \*太郎は靴をボロボロに走った。

(13a)は、非能格動詞「跑」と非対格動詞「破」の組み合わせで、項を二つ持つような他動詞型結果構文に似た形になっている。日本語では(13b)の「走る」のように、動詞の意味の中に状態変化がない場合、「ボロボロに」という結果状態を予測できないため、結果述語をつける場合、非文になる。

以上をまとめると、中国語の結果構文では、動詞の中に状態変化が含まれていなくても、結果構文が成立する。つまり、中国語では、影山(2001)が「本来的な結果構文」と「派生的な結果構文」と呼び、Washio(1997)が *Weak resultative* と *Strong resultative* と呼ぶ二つの種類の結果構文がともに存在し、中国語の結果構文はVP型結果構文になっている。日本語では、動詞の中に状態変化が含まれない、動詞の意味から結果を予測できない場合は、非文になる。つまり、日本語では、「本来的な結果構文」、*Weak resultative* しか存在せず、さらに、結果構文がAP型結果構文になっている。次は英語についての考察である。

#### 4.3.2 因果関係の程度から見た三言語の結果構文の比較

英語と日本語の対照研究では、影山(2001:156)は次のような英語の例を挙げられてい

る。それぞれ、(14a)(14b)に対応している。

- (14) a. The stained glass broke to pieces.  
b. John broke the stained glass to pieces.

(14a)と(14b)では、stained glass が割れた結果、to pieces という結果述語が表すような結果状態になっている。動詞 break は非対格動詞としても、他動詞としても、状態変化の意味を含んでいる。影山 (2001) はこのような構文を「本来的な結果構文」と呼び、Washio (1997)は Weak resultative と呼んでいる。

動詞が非能格動詞になっている例は次のようになる。

- (15) a. \*John ran tired.  
b. John ran himself tired.  
c. John ran his shoes threadbare.

(15a)のように動詞が非能格動詞の場合、結果述語 tired をつけるだけでは非文になる。しかし、(15b)のように、擬似目的語として、再帰代名詞 himself を入れると、文法的になる (Simpson 1983, Levin and Rappaport 1995)。また、(15c)のように、別の擬似目的語として、his shoes のような主語と所有関係にあるような表現を取り入れて、結果述語をつけると、文が成立する。動詞 run から、主語の John が疲れたや主語の靴がボロボロになったという結果まで予測することが不可能であり、動詞の意味の中に状態変化が含まれていないため、(15b, c)は、影山 (2001) による「派生的な結果構文」で、Washio (1997) による Strong resultative である。擬似目的語 (Fake Object)については、より詳しく 4.4.2 節で見る。

次は状態変化の意味を含まない他動詞の例である。

- (16) a. John hammered the metal flat.  
b. John kicked Tom black and blue.  
c. They beat the man bloody.  
d. The horse dragged the logs smooth.

(草山・一戸 2005: 176)

(16)では、他動詞 hammer, kick, beat, drag には状態変化の意味がないが、それぞれ flat, black and blue, bloody, smooth がつくことで、目的語の結果状態を表す結果構文になる。草山・一戸 (2005: 176)は次のように、因果関係の程度の強さと英語、日本語において、結果構文が文法的になるか否かの関係を表にまとめた。

	英語	日本語
因果関係の程度が強い	○	○
因果関係の程度が弱い	○	×
因果関係が想起されない	×	×

表 1

(草山・一戸 2005: 176)

草山・一戸 (2005)によると、表 1 のように、(16)の英語に見られるような結果述語は、動詞との因果関係の程度が弱い、英語では文法的になる。草山・一戸 (2005)は日本語と英語を研究対象にして比較し、中国語を考察の対象に入れなかった。(16)の英語に対応する中国語を考えてみよう。

(16a)に対応する中国語は次の(17)のようになる。

- (17) 约翰 敲 平 了 金属。  
 ジョン 叩く 平らに PFV 金属  
 「ジョンは金属を平らに叩いた。」

(17)からわかるように、動詞「敲」(叩く)と結果述語「平」(平らに)の組み合わせで、英語と同様、結果構文を作ることができる。(16b)に対応する中国語では、状況が変わってくる。

- (18) a. \*约翰 踢 遍体鳞伤 汤姆  
 ジョン 蹴る 怪我だらけ トム
- b. \*约翰 把 汤姆 踢 遍体鳞伤。  
 ジョン ACC トム 蹴る 怪我だらけ
- c. 约翰 把 汤姆 踢 得 遍体鳞伤。  
 ジョン ACC トム 蹴る 怪我だらけ  
 「ジョンはトムを怪我だらけに蹴った。」

(18a)のように、(17)と同様の、動詞と結果述語の組み合わせだけでは非文になる。(18b)のように「把」構文を用いて、目的語を動詞の前に持ってきて、容認できない。「把」

構文は、「把」を主語の後ろに挿入し、目的語をその直後に移動させることで、処置<sup>25</sup>を表す構文のことである（呂 1980: 54）。(18c)のように、「把」構文を用いながら、「得」で導かれる程度補語<sup>26</sup>も使うことで、初めて文法的になる。「踢得遍体鳞伤」（怪我だらけに蹴る）のような例に見られる構文は「V 得 R」構文<sup>27</sup>と呼ばれている。さらに、(16c, d)と対応する中国語は次のようになる。

(19) 他们 把 那个人 打 得 鲜血淋漓。  
 彼ら ACC あの 人 殴る 血だらけ  
 「彼らはあの人を血だらけに殴った。」

(20) 那匹马 把 圆木 拖 得 光滑。  
 あの馬 ACC 丸太 引きずる すべすべ  
 「あの馬は丸太をスベスベに引きずった。」

(19)と(20)は(18)と同様、VR 構造である結果構文や、その上に「把」構文を重ねたものにしても、非文であるが、さらに「V 得 R」構文を重ねると、文法的になる。

上述のように、(16b, c, d)に対応する中国語は、英語と構文的に違ってきて、結果構文で表現することができないが、「把」構文と「V 得 R」構文を重ねることで、文法的になる。構文は異なってくるが、「V 得 R」構文は統語的には、VR 構文に「得」を、動詞と結果述語の間に入れた構文になるので、「得」の後ろの要素は、VR 構文が有する結果という意味を持つ結果構文からの派生だと言えるだろう。さらに、英語との違いは構文上のほか、因果関係との想起からも見られる。

因果関係との想起について、英語、日本語と異なる中国語の例を見てみよう。

<sup>25</sup> 「把」が処置を表すという説明は王 (1943)が「中国現代語法」で初めて提唱した。

処置式是指把人怎样安排，怎样支使，怎么对付；或把物怎样处理，或把事情怎样进行。它既然专为处置而设，如果行为不带处置性质，就不能用处置式...“把”字所介绍者乃是一种“做”的行为，是一种施行 (execution)，是一种处置(王 1985: 125)。(処置とは人をどう扱い、どう行動させ、どうその人に対処するか、あるいは、物をどう処理し、物事をどう進行させるかを表したものである。「把」構文はこのような処置を表すものであり、もし、動詞が表す行為にこのような処置の性質がなかったら、「把」構文は使えない...「把」構文は、「把」で導入された目的語に対する、一種の行為であり、一種の働きかけであり、一種の処置 (取り扱い) である。(和訳筆者))

「把」構文の説明については、張 2000、沈 2002、王 2003、胡 2005、石 2006 などにも見られる。

<sup>26</sup> 「得」で導かれる補語については、研究者によって呼び方が異なる。劉他 (1983)では「情态补语」(情態補語)、朱 (1983)では、「状态补语」(状態補語)、馬 (2015)では、「程度补语」(程度補語)と呼んでいる。本論では、動詞が表す動作を行った結果状態が、どんな程度になっているかを表現するものと見なすため、馬 (2015)と同様、程度補語と呼ぶことにする。

<sup>27</sup> 「V 得 R」構文とは、「動詞+得+結果補語」という形を持っている「可能补语」(可能補語)と呼ばれている構文のことである(徐 (2001)、杉村 (2010)、鍾&黄 (2016))。統語的に見ると、「V 得 R」構文は結果構文 VR を元に、動詞と結果述語の間に「得」を入れたものである。つまり、意味上、「V 得 R」構文は結果構文との関わりが見られる(田口 1990、沈 1991、苞山 1995)。

- (21) a. 张三 把 窗户 擦 干净 了。  
 张三 SA 窓 拭く きれい PFV  
 「張三が窓をきれいに拭いた。」
- b. 张三 把 窗户 擦 脏 了。  
 张三 SA 窓 拭く 汚い PFV  
 「張三が窓を拭いて、窓が汚くなった。」
- c. 张三 把 窗户纸 擦 破 了。  
 张三 SA 障子 拭く 破れる PFV  
 「張三が障子を拭いて、障子が破れた。」

中国語では、(21a, b, c)はどれも文法的になる。動詞との因果関係から考えると、動詞「擦」(拭く)が表す動作をした結果として、窓がきれいになるのは想起でき、(21a)は文法的である。しかし、(21b)のように、動詞「擦」(拭く)から、因果関係がないと言える「脏」(汚い)が結果述語として動詞の後ろに付いても、文法的になる。それは、例えば、汚い雑巾を使って窓を拭いた場合なら、窓が汚くなるのは自然であるからである。同様に因果関係がない「破」(破れる)も結果述語として、(21c)のように使うことができる。障子の場合、拭くと破れることが自然に起こり得るためである。従って、中国語の結果構文では(21b, c)のように、動詞から因果関係が想起されない結果述語を許容できる場合があることになる。対照的に英語と日本語の結果構文を見てみよう。

- (22) a. She washed her clothes clean.  
 b. \*She washed her clothes dirty.

- (23) a. 床をきれいに拭いた。  
 b. \*床を汚く拭いた。

(22)(23)からわかるように、英語と日本語では結果述語が clean、「きれい」である時は結果構文が成立するが、dirty、「汚い」の場合は容認されない。つまり、日本語と英語では、中国語と違って、動詞から因果関係が想起できない場合は、その結果述語が容認されないことがわかる。この点は、中国語の結果構文の独特なところと言えるだろう。草山・一戸 (2005: 176)を踏まえて、中国語を入れると、次の表2になる<sup>28</sup>。

<sup>28</sup> 影山 (2021: 75)は、日英の相違をまとめるために、結果構文を、本来的結果構文と派生的結果構文に分類した。本論では、影山 (2021: 75)の結果構文の分類をするのではなく、草山・一戸 (2005: 176)の、動詞と結果述語の因果関係に基づいて、三言語間の結果構文の許容度の相違を示すことにする。

	英語	日本語	中国語
因果関係の程度が強い	○	○	○
因果関係の程度が弱い	○	×	○
因果関係が想起されない	×	×	○

表 2

草山・一戸 (2005: 176)が挙げた(16)を日本語にすると、次になる。

- (24) a.? 彼は金属を平らにたたいた。  
 b.? 太郎が次郎をアザだらけに蹴った。  
 c.? 彼らは血まみれにその男を殴った。  
 d.\* 馬が丸太をスベスベに引きずる。  
 e.? 彼は金属をペチャンコにたたいた。

(草山・一戸 2005: 176 の例を一部変更)

動詞の意味の中に状態変化が含まれていない場合、英語では結果構文を許容するが、日本語では結果構文を許容しない (三原 2022: 140) <sup>29</sup>。上で見た草山・一戸 (2005: 176)の表 1 が示すように、結果述語は、動詞との因果関係の程度が弱い場合、日本語では非文になる<sup>30</sup>。(24a)では、行為動詞「たたく」には状態変化が含まれていないため、彼は金

<sup>29</sup> (23a)で用いられている動詞「拭く」は状態変化の意味が含まれていないため、派生的な結果構文になる。しかし、4.3 節の最初で述べたように、影山 (2001: 164)によると日本語は派生的な結果構文を許さない。(23a)が成立する理由は以下のように考えられる。

影山による本来的な結果構文と派生的な結果構文は、動詞の意味の中に状態変化が含まれているかどうかによって区別される。しかし、結果述語の形容詞に目を向けると、段階的形容詞 (gradable adjective)と非段階的形容詞 (non-gradable adjective)に分けることができる (段階的と非段階的 (な形容詞) の区別については、Bolinger (1972)および安井他 (1976: 117-120)等参照)。段階的形容詞と非段階的形容詞がそれぞれ状態変化の意味が含まれていない動詞と共起する例は次のようなものである。(本論の他の箇所と同様、形容詞と形容動詞 (ナ形容詞) の区別はしない。)

- (i) a. 金属を真っ平らに叩いた。(非段階的形容詞)  
 b. \*金属を{なだらか/なめらか}に叩いた。(段階的形容詞)

- (ii) a. 机を真っ赤に殴った。(非段階的形容詞)  
 b. \*机を赤く殴った。(段階的形容詞)

(i)は状態変化の意味が含まれていない動詞「叩く」が、結果述語である非段階的形容詞「真っ平ら」と段階的形容詞「なだらか/なめらか」と共起した例で、(ii)は状態変化の意味が含まれていない動詞「殴る」が、結果述語である非段階的形容詞「真っ赤」と段階的形容詞「赤」と共起した例である。(ia)と(iaa)が示しているように、非段階的形容詞が使われた場合、結果構文が成立している。一方、(ib)と(iib)のように、段階的形容詞が使われた場合は、非文になる。つまり、日本語では、状態変化の意味が含まれていない動詞が、非段階的形容詞の結果述語と共起する場合は、派生的な結果構文を許容できると言える。(23a)を(iii)として再掲して見てみよう。

- (iii) 床をきれいに拭いた。(cf. 「\*床を美しく拭いた。」(結果構文としては非文))

iii はすでに述べたように動詞「拭く」には状態変化の意味が含まれていない。しかしこの文の結果述語「きれいに」は「美しく」と異なり非段階的形容詞であると考えれば、派生的な結果構文でありながら、(ia)や(iaa)と同様に成立していると言えよう。

<sup>30</sup> 草山・一戸 (2005: 176)は(24)のような日本語に「\*」をつけているが、(24d)に比べると、他の例は明らかに許容度が上がっているため、本論文では、「?」とする。

属を平らにたたいたが、平らにならなかったという結果キャンセルができるため、動詞の意味から結果述語が表す状態を予測できない、つまり、金属を叩いた結果、必ず平たくなるとは限らない。同様に、(24b)も行為動詞「蹴る」という動作をした結果として、必ずしもアザだらけにはならない、(24c)も殴ったという動作をした結果として、必ず血まみれになるとは限らない、(24d)も引きずったという動作をした結果として、必ずしもスベスベにはならない、(24e)もたたいた結果として、必ずしもペチャンコにならないため、(24)の例文はすべて結果キャンセルができる。結果構文としては不自然な文になる。また、草山・一戸 (2005)の判断と違い、(24a, b, c, e)は日本語として不自然な文になるが、(24d)と比べると(24d)のほうがより文の容認度が悪くなっている。

まとめると、英語の結果構文では、動詞が非能格動詞の場合、動詞に状態変化の意味を含まず、擬似目的語を使うと、文が成立する。動詞が他動詞の場合、動詞に状態変化が含んでいる場合、文が成立する。一方、動詞に状態変化が含まない場合、結果述語との因果関係が弱くても、文が成立する。日本語では、動詞に状態変化が含まなく、結果述語との因果関係が弱い、動詞の意味から予測される範囲内ではない結果述語が選ばれると、文の容認度がさらに低くなる。

4.3 節で考察した三言語において、動詞に状態変化の有無と結果構文の成立関係を表にすると、次の表 3 になる。

	日本語	中国語	英語
動詞に状態変化の意味あり	○	○	○
動詞に状態変化の意味なし	?	○	△ <sup>31</sup>

表 3

動詞に状態変化の意味がない場合、日本語では非文になるが、英語では注 30 で述べた条件付きで結果構文が成立する。一方、中国語では、選ばれた結果述語が意味的に自然であれば、結果構文が成立する ((21)の下の説明を参照)。

#### 4.4 三言語における直接目的語制限 (Direct Object Restriction)

結果構文に関する研究では、結果述語と、それが叙述する対象が、盛んに議論されている。Simpson (1983), Levin & Rappaport Hovav (1995)によると、英語の結果構文が成立するには、深層構造で結果述語が直接目的語と叙述関係になっていないといけない。これは「直接目的語制限 (Direct Object Restriction)」と呼ばれている。中国語は直接目的語制限に従って、結果述語が目的語と叙述関係になっていることもあるが、直接目的語制限に従わず、主語と叙述関係になっている例も多く指摘されている (沈 2004, Huang 2006, 陽 2008)。そこで、本節は英語、日本語と比較しながら、中国語の結果構文で、

<sup>31</sup> 非対格自動詞の場合と異なり、非能格自動詞の場合、擬似目的語が必要になるので、△にしている。

直接目的語制限が適用されない例について、その理由を探る。まずは三言語において、直接目的語制限が適用されるように見える例を見てみる。

#### 4.4.1 日本語、英語と中国語の直接目的語制限

三原 (2022: 137-138)は、次のような例を挙げている。

(25) John painted the house [AP pale blue].

(26) Mary broke the vase [PP into pieces].

(27) ヒロシは愛車を [AP 赤く] 塗った。

(28) 睦は家宝の皿を [AP 粉々に] 割ってしまった。

英語の(25)と(26)では、結果述語である *pale blue* と *into pieces* がそれぞれ、直接目的語である *the house* と *the vase* に対して叙述する働きを担っている。日本語の(27)と(28)も同様に、結果述語である「赤く」と「粉々に」が直接目的語である「愛車」と「家宝の皿」に対して叙述する働きを担っている。日本語も英語も、形容詞句や前置詞句が結果述語を構成している。

中国語でも同様の現象が見られる。(25)と対応している中国語の例は次のようになる。

(29) 约翰 涂 [AP 蓝] 了 房子。

ジョン 塗る 青 PFV 家

「ジョンは家を青く塗った。」

(29)では、結果述語である「藍」(青い)が形容詞であり、意味的には直接目的語である「房子」(家)と叙述関係を担っているように見える。この例文のように結果述語が形容詞(句)であるような結果構文を三原 (2022)に倣って、AP型結果構文と呼ぶ。(26)と対応している例は次のようになる。

(30) 玛丽 摔 [VP 碎] 了 花瓶。

メアリー 投げる 割れる PFV 花瓶

「メアリーが花瓶を(投げて)割った。」

(30)では、結果述語である「碎」(割れる)が非対格動詞であり、(30)でも「碎」(割れる)は直接目的語である「花瓶」(花瓶)と叙述関係を担っているように見える。この例文は「碎」が動詞なので、VP型結果構文と呼べる。

(30)からわかるように、中国語では AP 型結果構文だけでなく、結果述語が動詞（句）であるような VP 型結果構文も存在する。しかし、日本語と英語では、VP 型結果構文は存在しない。一方、中国語では英語の(26)の into と同様に前置詞を結果述語に取り込むような PP 型結果述語は存在しない。なぜこのようなタイポロジーになるのかについては第 5 章で考察する。

(29)や(30)で直接目的語制限が中国語では働いているかどうかは 4.4.3 節で具体的に述べる。

日英では、直接目的語制限によって、結果述語が主語と叙述関係を担う結果構文は、一般に次のように非文になる。

(31) a. \*Mary painted the wall [<sub>AP</sub> exhausted].

b. \*花子は壁を [<sub>AP</sub> クタクタに] 塗った。

(三原 2022: 138)

(31)では、結果述語である exhausted や「クタクタに」は the wall や「壁」のような物体ではなく人間しか意味的に叙述できない。しかしその解釈では直接目的語制限を破ることになり、非文となる。しかし、次の例を見ると、対応する中国語は直接目的語制限を破ることができるように見える。

(32) 花子 吃 [VP 累] 了 飯。

花子 食べる 疲れる PFV ご飯

「花子のご飯を食べて、花子が疲れた。」

(31)と意味的に似ている結果述語「累」（疲れる）を用いた(32)の中国語では、目的語の位置にある「飯」（ご飯）は意味的に疲れることがないので、結果述語は主語である「花子」を叙述することになる。結果述語が主語を叙述し、直接目的語制限を破っていることになる。なぜ、目的語を叙述せず、主語を叙述できるのだろうか。具体的には 4.4.3 節で考察したい。

#### 4.4.2 擬似目的語 (Fake Object)

一般に日本語では非能格動詞で結果構文を作ることができないが、英語ではそれができる。ただし、非能格動詞で構成された英語の結果構文では、擬似目的語が必要になる（三原 2022: 138）。そして、この擬似目的語と結果述語が叙述関係になって、結果構文を構成する。この節では、擬似目的語の例として、再帰代名詞、譲渡不可能／所有名詞句、下位範疇化されない名詞句、明示化されない真の目的語に代わる名詞句を考察する。

#### 4.4.2.1 再帰代名詞

非能格動詞を結果構文で使おうとすると、通常は出てこない再帰代名詞が結果述語の叙述の対象として目的語の位置に現れることがある。次の(33)と(34)の例を見てみよう。

- (33) a. They danced.  
b. \*They danced themselves.  
c. \*They danced tired.  
d. They danced themselves tired. (踊ってクタクタになった) (影山 2001: 168)

- (34) a. The lecturer talked.  
b. \*The lecturer talked himself.  
c. \*The lecturer talked hoarse.  
d. The lecturer talked himself hoarse. (喋りすぎて、声がかれた) (影山 2001: 168)

(33)と(34)では、非能格動詞 *dance* と *talk* がそれぞれ用いられ、(33b, c)と(34b, c)のように再帰代名詞のような目的語だけをとったり、結果述語だけをとったりすることはできないが、(33d)と(34d)で示しているように再帰代名詞と結果述語を同時に使うことで、結果構文を作ることができる。一方、日本語では再帰代名詞の有無に関係なく次のように許容されない。

- (35) \*彼らは(自分を)クタクタに踊った。  
(36) \*その先生は(自分を)しゃがれ声にしゃべった。

一方(33d)と対応する中国語を考えてみると、次のような文ができる。

- (37) 他们 跳 累 了 (他们) 自己。  
彼ら 跳ぶ 疲れる PFV 彼ら 自分  
「彼らは跳んで、疲れた。」

(37)では、動詞に非能格動詞「跳」(跳ぶ)、結果述語に非対格動詞「累」(疲れる)と叙述の対象に再帰代名詞「(他们)自己」((彼ら)自身)を用い、英語の AP 型結果構文である(33d)に対応する VP 型結果構文になっており、文として成立する。しかし、さらに、中国語では、(37)のように再帰代名詞「(他们)自己」がなくても、文は成立する。再帰代名詞のない非文法的な(33c)とは対照的である。

- (38) 他们 跳 累 了。  
 彼ら 跳ぶ 疲れる PFV  
 「彼らは跳んで疲れた。」

再帰代名詞「(他们) 自己」のない(38)では、結果述語「累」(疲れる)が主語「他们」(彼ら)と叙述関係になっているように見えるが、結果述語「累」(疲れる)が非対格動詞であり、主語の位置にある「他们」(彼ら)は結果述語の内項になり、同時に、非能格動詞の外項にもなっている。具体的に4.4.3節で分析する。

(34d)と対応する中国語は次のようになる。

- (39) 老师 喊 哑 了 他 自己。  
 先生 叫ぶ かれる PFV 彼 自分  
 「先生は叫んで、喉がかれた。」

(39)では、非対格動詞である結果述語「哑」(かれる)が、擬似目的語である再帰代名詞「他自己」(彼自身)と叙述関係になっている。擬似目的語の再帰代名詞をとると、英語では(34c)のように非文になるが、中国語では(40)のように依然として文が成立する。

- (40) 老师 喊 哑 了。  
 先生 叫ぶ かれる PFV  
 「先生は叫んで、喉がかれた。」

(40)は(38)と同様、結果述語「哑」(かれる)が非対格動詞であることが重要である。具体的な考察は4.4.3節で行う。

以上をまとめると、英語では、再帰代名詞のような擬似目的語を用いて、結果構文を構成することができるが、日本語では、再帰代名詞の有無に関係なく、非文になる。また、中国語では、結果述語を用いると、再帰代名詞はあってもなくても結果構文は成立する。

#### 4.4.2.2 譲渡不可能/所有名詞

次は、擬似目的語として、主語の身体部分や所有物のようなものをとる結果構文である。

- (41) She cried her eyes out.  
 (42) He ran his Nikes threadbare.

(影山 2001: 168)

(41)の擬似目的語は譲渡不可能な身体部分である *her eyes* で、(42)の擬似目的語は主語の所有物である。 *his Nikes* になっている。三原 (2022: 139)によると、このような結果構文は英語では許容されるが、日本語では許容されない。上の英語と対応するような擬似目的語を含んだ例は次の三原 (2022: 139)のようになる。

(43) \*花子は目を赤く泣いた。

(44) 花子は目を赤く泣き腫らした。

(45) \*太郎はスニーカーを (ボロボロに) 走った。

(46) 太郎はスニーカーを (ボロボロに) 履き潰した。

(43)と(45)で示されているように、譲渡不可能な身体部分を目的語に用いた結果構文は、日本語では一般に許容されない。しかし、(44)と(46)からわかるように、「泣き腫らす」「履き潰す」のような複合動詞を用いると、文は成立する (三原 2022: 139)。(43)と対応する中国語は次のようになる。

(47) 她 哭 红 了 (她 的) 眼睛。

彼女 泣く 赤い PFV 彼女 GEN 目

「彼女は泣いて、(彼女の)目を赤くした。」

(47)では、「哭」(泣く)という非能格動詞と、結果述語である「红」(赤い)という形容詞で、AP型結果構文を構成している。(45)と対応する中国語の例は次のようになる。

(48) 太郎 跑 破 了 鞋子。

太郎 走る 潰れる PFV 靴

「太郎は走って、靴を履き潰した。」

(48)では、「跑」(走る)という非能格動詞と、「破」(潰れる)という非対格動詞でVP型結果構文を構成している。

このように、日本語では「泣き腫らす」や「履き潰す」のような複合動詞を結果構文で用いなければならないのに対し、中国語は英語と同様、単独の動詞だけで結果構文を構成できる。

#### 4.4.2.3 下位範疇化されない名詞

英語と中国語では、本来目的語をとらない非能格動詞が下位範疇化されない名詞を目

的語にして、それに結果述語を加えることで、他動詞型結果構文を作ることができる。  
具体的な英語と中国語の例は次のようになる。

(49) a. \*犬が彼を覚めた状態に吠えた。

b. The dog barked him awake.

(三原 2022: 138)

c. 狗 叫 醒 了 他。  
犬 叫ぶ 覚める PFV 彼  
「犬が吠えて、彼が目覚めた。」

(49a)のように、日本語では許容されないが、(49b)と(49c)のように、英語と中国語では許容される。(49b)と(49c)の bark、「叫」(叫ぶ)は、共に非能格動詞で、本来は目的語をとらないが、結果述語として awake、「醒」(覚める)をさらに加えることで、容認可能になっている。似たような例に次のようなものがある。

(50) a. \*彼女はハンカチをビショビショに泣いた。

b. She cried the handkerchief wet.

c. 她 哭 湿 了 手帕。  
彼女 泣く 濡れる PFV ハンカチ  
「彼女はハンカチを泣き濡らした。」

(崔 2019: 11)

つまり、英語と中国語は非能格動詞が下位範疇化されない名詞を目的語にとって、結果構文を作ることができるが、日本語ではそれができない。

#### 4.4.2.4 非選択的他動詞結果構文

この節で見るのは、結果構文において目的語の位置を占めるのが明示化されない目的語になっているものである。具体的な例は次のようになる。

(51) a. \*彼らはティーポットを（空っぽに）飲んだ。

b. 彼らはティーポットを（空っぽに）飲み干した。

(52) a. \*They drank the teapot.

b. They drank the teapot dry.

(Rappaport Hovav and Levin 2001: 776)

(53) a.\* 他们 喝 了 茶壶。  
彼ら 飲む PFV ティーポット

b. 他们 喝 干 了 茶壶。  
彼ら 飲む 干す PFV ティーポット  
「彼らはティーポットを飲み干した。」

(51)-(53)は飲み物を目的語にとる動詞が飲み物の容器を目的語にとっている三言語の例である。(51a)のように、日本語では、動詞「飲む」の場合、結果述語の有無にかかわらず非文になる。一方、(51b)のように、複合動詞「飲み干す」の場合は、「空っぽ」のような結果述語の有無にかかわらず文法的である。一方、英語と中国語は、(52)と(53)で示しているように、結果述語がさらに必要である。似たような例として次のようなものがある。

(54) \*太郎は飲み屋を（カラカラに）{飲んだ／飲み干した}。

(55) a. \*John drank the pub.

b. John drank the pub dry. (影山 2002: 93 (一部修正))

(56) a. \*太郎 喝 了 酒吧。  
太郎 飲む PFV バー

b. 太郎 喝 干 了 酒吧。  
太郎 飲む 干す PFV バー  
「太郎はバーを飲み干した。」

(54)-(56)は目的語を、飲み物の容器ではなく、飲み物を飲む場所にした例である。日本語の(54)では、複合動詞があろうとなかろうと、また、結果述語があろうとなかろうと、非文になっており、(51b)と異なっている。つまり、複合動詞「飲み干す」は、液体が移動した結果、容器の状態変化の意味はあるが、飲む場所の状態変化の意味はない。従って、飲む場所である「飲み屋」は目的語としてとることができない。しかしながら、英語と中国語は日本語と違い、目的語が、飲み物を飲む場所であっても、結果述語がさらに続く限り、文法的になる。

以上をまとめると、英語と中国語は、目的語が容器であろうと、飲み物を飲む場所であろうと、結果述語が続く限り、文法的になる。一方、日本語では、飲む場所が目的語として続けると、結果述語があろうとなかろうと、非文になる。

#### 4.4.3 中国語には直接目的語制限があるか

日本語と英語が直接目的語制限を受けている (Simpson 1983, Levin et. 1995) のに対して、中国語では直接目的語制限を受けている例以外に、直接目的語制限を受けていないと思われる例も見られる (沈 2004、Huang 2006、陽 2008)。以下直接目的語制限に関する先行研究を見る。

##### 4.4.3.1 中国語における直接目的語制限の考察の概観

Cheng et. al (1994)は中国語の結果構文について、結果述語の叙述対象は直接目的語になるが ((57)を参照)、目的語が非指示的 (non-referential) 名詞句 ((58)の「酒」、あるいは目的語を伴わない場合 ((59)を参照) は、主語が叙述対象に選ばれると主張している。つまり、目的語が非指示的名詞句であったり、目的語を伴わない場合は、直接目的語制限を受けず、結果述語は例外的に主語を叙述できると見ている。さらに、目的語が (60)のように、指示的名詞句になると、結果述語が主語を叙述できず、非文になる。石 (2000)も、例外に見える「吃饱饭」(ご飯をいっぱい食べる)、「喝醉酒」(お酒を酔うまで飲む) について考察した。

(57) 武松 打 死 了 老虎。

武松 打つ 死ぬ PFV 虎

「武松が虎を打ち殺した。」

(崔 2006: 102)

(58) 他 喝 醉 了 酒。

彼 飲む 酔う PFV 酒

「彼はお酒を飲んで酔った。」

(崔 2006: 102)

(59) 他 喝 醉 了。

彼 飲む 酔う PFV

「彼は飲んで酔った。」

(崔 2006: 102)

(60) \*他 喝 醉 了 那瓶酒。

彼 飲む 酔う PFV あの瓶のお酒

(崔 2006: 102)

次に見る Sybesma (1999)は、中国語が直接目的語制限を受けるとの立場をとっている。(61)のように、目的語を伴わない結果構文は、非対格仮説で説明し、表層構造では主語に見えるが、深層構造では目的語とする。結果述語は深層構造では目的語を叙述することになるため、直接目的語制限を受けていることになる。さらに、動詞が非対格動

詞だけではなく、非能格動詞の場合でも、結果述語と一緒にあって、全体が非対格動詞の性質に変わること、結果構文が作られるとしている。

- (61) 张三 哭 累 了。  
 张三 泣く 疲れる PFV  
 張三は泣き疲れた。

(Sybesma 1999: 41 原文の用例はピンインのみ)

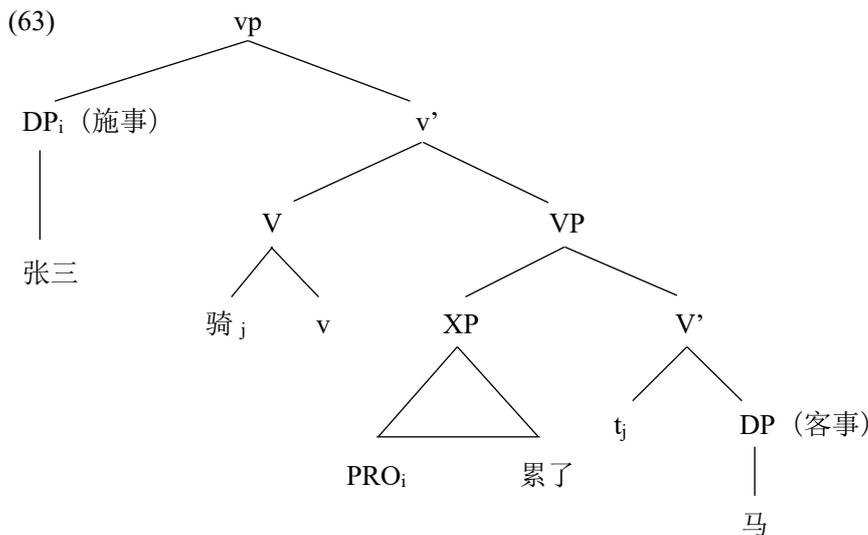
(61)のように、目的語を伴わない場合は、一見直接目的語制限を破っているようだが、結果述語「累」(疲れる)が非対格動詞であるため、表層構造では主語に見える「张三」は深層構造では目的語である。Sybesma (1999)は、「哭」と「累」が全体で非対格の性質を持つことで、直接目的語制限を守っているとする。しかし、Sybesma (1999)は、結果述語が主語と目的語のどちらでも叙述可能な場合があることを考慮していない。

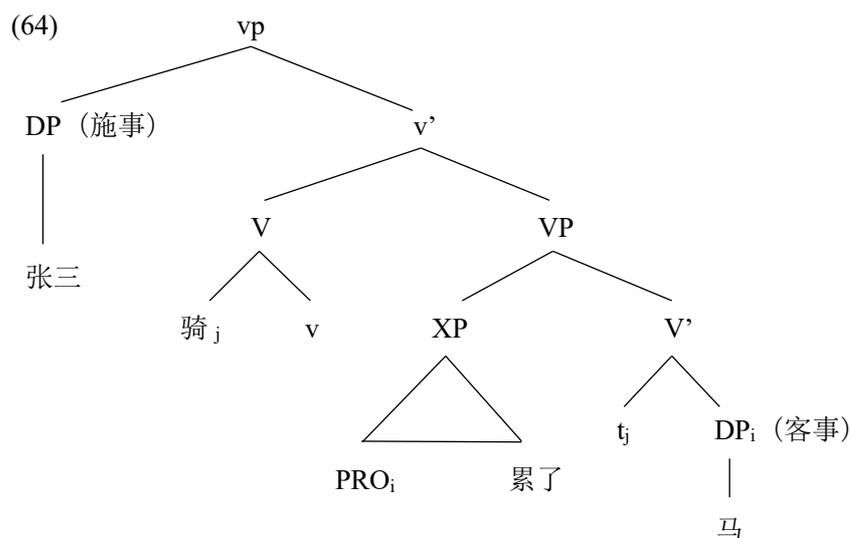
結果述語が主語と目的語のどちらでも叙述可能な例について、王 (2001)、沈 (2004)、崔 (2013)、濱口 (2017)などが分析を行った。次のような例である。

- (62) 张三 骑 累 了 马。  
 张三 乗る 疲れる PFV 馬  
 i. 「張三が馬に乗って、馬が疲れた。」  
 ii. 「張三が馬に乗って、張三が疲れた。」

王 (2001: 170)

王 (2001: 170-173)は(62)には二つの解釈ができることを以下の樹形図で説明している。





(63)のように、「骑」の動作者である「张三」が PRO をコントロールする場合、(62ii)の解釈になる。(64)のように、「骑」の対象である「马」が PRO をコントロールする場合は、(62i)の解釈になる。

崔 (2013: 104)は(62)のように、結果述語が目的語だけでなく、主語も叙述可能な他動詞結果構文は、直接目的語制限が働いていないように見えるが、「固定された表現としての特徴を持っており、あくまでも例外的なものである」としている。

濱口 (2017)は(63)では、動詞「骑」(乗る)と姉妹関係になる v を「行為軽動詞」としている。一方、(64)では、v を「使役軽動詞」とみなして、「张三」に使役者の意味役割が付与されると主張している。つまり、(64)では、张三が馬に乗って、馬を疲れさせたという解釈になる。濱口 (2017)は v を「行為軽動詞」と「使役軽動詞」に分けることで、二つの解釈の可能性を説明した。

以上の先行研究をまとめると、王 (2001)も濱口 (2017)も(62ii)の解釈は、直接目的語制限を守っていない分析をしていることになる。崔 (2013)も同様に例外扱いをしている。

#### 4.4.3.2 直接目的語制限は働いているか

本節では、中国語では直接目的語制限は働いていないことを主張する。先行研究で盛んに論じられている二つの解釈が可能な例(62)も直接目的語制限が働いていない証拠になると考えられる。(62)の王(2001)の例、及び次の(65)(66)の沈(2004)の例のように、先行研究では、結果述語が「累」(疲れる)で、動詞は「追」(追う)「骑」(乗る)になっている例だけしか考察されていない。

- (65) 太郎 追 累 了 花子。  
 太郎 追う 疲れる PFV 花子  
 i. 「太郎が花子を追って、花子が疲れた。」  
 ii. 「太郎は花子を追って、太郎が疲れた。」

- (66) 太郎 騎 累 了 馬。  
 太郎 乗る 疲れる PFV 馬  
 i. 「太郎が馬に乗って、馬が疲れた。」  
 ii. 「太郎が馬に乗って、太郎が疲れた。」

沈 (2004: 11) 一部変更

(65)では(65i, ii)の日本語訳が示しているように、結果述語「累」(疲れる)は主語の「太郎」と目的語の「花子」を叙述することができ、二つの解釈ができる。同様に(66)では(66i, ii)の日本語訳が示しているように、結果述語「累」(疲れる)は主語の「太郎」と目的語の「馬」を叙述することができ、二つの解釈ができる。つまり、主語を叙述する解釈では、直接目的語制限を破っていることになる。

この二つの結果構文を詳しく見ると、次のような特徴が見られる。主語も目的語も生物であることで、意味的にどちらでも疲れることがありえ、結果述語「累」は適用できる。さらに、構造面から見ると、中国語の結果構文は「SVR 了 O」という構造になっており、結果述語 R は主語との構造的距離と目的語との構造的距離が等しいと見ることができる。従って、次のような、構造的距離に基づいた仮説を立てることができる。

#### (67) 構造距離叙述関係仮説 (その1)

結果述語は、主語と目的語との構造的距離が等しい場合、(その叙述対象を意味的に適切に修飾できるのであれば) 主語と目的語のどちらを叙述することもできる。

直接目的語制限ではなく、構造的距離という統語的視点から、結果構文の叙述関係を説明する構造距離叙述関係仮説(67)が、結果述語が上の例で見た「累」(疲れる)以外でも、適用できるか見てみよう。下の例は、どれも、iのように目的語を叙述する解釈も、iiのように主語を叙述する解釈もできる<sup>32</sup>。

- (68) 太郎 遛 累 了 狗。  
 太郎 散歩させる 疲れる PFV 犬  
 i. 「太郎が犬を散歩させて、犬が疲れた。」  
 ii. 「太郎が犬を散歩させて、太郎が疲れた。」

<sup>32</sup> (68)-(71)の作成にあたって、郭湘婷さん、万鑫さん、周藝さん、陳曦さん、鄭思柔さんの協力を得た。

- (69) 太郎 赶 糊涂 了 马。  
 太郎 驅り立てる ボケる PFV 馬  
 i. 「太郎が馬を追って、馬がわけがわからなくなった。」  
 ii. 「太郎が馬を追って、太郎がわけがわからなくなった。」

- (70) 太郎 骂 累 了 花子。  
 太郎 叱責 疲れる PFV 花子  
 i. 「太郎が花子を叱責して、花子が疲れた。」  
 ii. 「太郎は花子を叱責して、太郎が疲れた。」

- (71) 太郎 说 烦 了 花子。  
 太郎 話す めんどう PFV 花子  
 i. 「太郎が花子に話しかけて、花子がめんどうくさくなった。」  
 ii. 「太郎は花子に話しかけて、太郎がめんどうくさくなった。」

(68)-(71)のように、結果述語が、先行研究で使われてきた「累」のほか、「糊涂」(ボケる)、「烦」(めんどう)も、上で述べた二つの解釈ができる結果述語として機能している。さらに、文の動詞も先行研究で使われてきた「追」(追う)「騎」(乗る)のほか、「遛」(散歩させる)「赶」(驅り立てる)「骂」(叱責)「说」(話す)などを使うこともできる。これらの結果構文の共通点として、主語だけでなく目的語も生物であることで、意味的に結果述語が主語も目的語も叙述することが可能であるということがある。

(68)(69)では、移動の意味が含まれる動詞が使われ、(70)(71)では、移動の意味を持たない様態動詞が使われている。つまり、結果述語が主語も目的語も叙述可能な例は、先行研究が示唆しているように、特別なものではない。重要なのは、これらの例では、統語的に見ると、結果述語が主語との距離も、目的語との距離も等しくなっているということであり、そのために、叙述する対象が主語でも目的語でも選ばれるということである。従って、構造距離叙述関係仮説(67)が働いていることがわかる。

しかし、中国語の結果構文は、日本語や英語同様、結果述語が目的語しか叙述できない例が存在する。意味の視点から、これらの例を見てみよう。

- (72) 约翰 涂 [AP 蓝] 了 房子。  
 ジョン 塗る 青 PFV 家  
 「ジョンは家を青く塗った。」

- (73) 玛丽 摔 [vp 碎] 了 花瓶。  
 メアリー 投げる 割れる PFV 花瓶  
 「メアリーが花瓶を（投げて）割った。」

(72)では結果述語「藍」(青)は主語の「约翰」(ジョン)と目的語の「房子」(家)との構造的距離が等しくあることで、どちらをも叙述することができ、二つの解釈ができるはずだが、実際には、目的語である「房子」(家)を叙述することしかできない。それは、「藍」(青)は、「约翰」(ジョン)のような人間には叙述できない形容詞であるためである。統語的な選択ではなく、意味的な選択だと言える。(73)は同様に、意味的な選択で、主語である「玛丽」(メアリー)が、割るという意味の結果述語「碎」(割れる)が表している意味に変化することが不可能なため、結果述語の叙述対象は目的語の「花瓶」しか選択できない。

従って、(72)(73)のような結果構文で、結果述語が目的語しか叙述できないのは、直接目的語制限が働いているからではなく、意味的に、その結果述語が主語を選ぶことができないため、目的語しか叙述できなくなっているのである。次は主語を叙述する例を見てみよう。

まず非能格動詞「跑」(走る)を用いた例を見てみよう。

- (74) a. 我 跑 了。  
 私 走る PFV  
 「私は走った。」
- b. 我 跑 累 了。  
 私 走る 疲れる PFV  
 「私は走って疲れた。」

中国語は英語や日本語と違い、動詞が非能格動詞で、結果述語が非対格動詞で構成された結果構文が存在する。(74a)のように非能格動詞「跑」(走る)で構成された自動詞文に、(74b)のように結果述語「累」(疲れる)加えることで、目的語のない結果構文ができる。この結果構文では、意味的に主語の「我」(私)が結果述語「累」(疲れる)の叙述対象になることができ、私が走って、私が疲れたという解釈になる。このように、非能格動詞と、結果述語として非対格動詞で構成された結果構文は、主語が結果述語の叙述対象に選ばれる。従って、直接目的語制限に反する例になっていると言える。

4.4.2.1 節で挙げた(35)(36)からわかるように、日本語では非能格動詞を結果構文で使うことはできない。英語の非能格動詞を用いた結果構文では、(33)(34)からわかるように、結果述語を使うと同時に再帰代名詞のような擬似目的語を加えないと非文になる。一

方、中国語では、擬似目的語はあってもなくても文法的になる。

(75) 他们 跳 累 了 (他们自己)。  
彼ら 跳ぶ 疲れる PFV (彼ら自身)  
「彼らは(彼ら自身が)跳んで疲れた。」

(76) 老师 喊 哑 了 (自己)。  
先生 叫ぶ かれる PFV (自身)  
「先生は叫んで、(自身の)喉がかれた。」

(75)(76)は(74b)と同様、非能格動詞と結果述語である非対格動詞とで構成された結果構文である。丸カッコで示しているように、再帰代名詞のような擬似目的語はあってもなくても文法的である。この二つの例文は、丸カッコ内のように、再帰代名詞が擬似目的語としてあった場合、その再帰代名詞を叙述対象としているとみなせることから、動作主体の自分に対しての意図性が生じ、他動性を生ずることがわかる。結果述語と叙述対象との構造的距離から見ると、次のような分析ができる。擬似目的語が現れない場合、(74b)と同様、目的語が存在しないため、主語の「他们」(彼ら)「老师」(先生)が結果述語の「累」(疲れる)「哑」(かれる)の叙述対象に選ばれ、意味的にも、主語の彼らが疲れ、主語の先生(の喉)がかれるという自然な解釈になる。擬似目的語「他们自己」(彼ら自身)「自己」(自身)がある場合は、結果述語は主語との構造的距離が等しい擬似目的語を叙述することができる。従って、直接目的語制限がなくても、構造的距離から叙述対象を決めることができる。

まとめると、(67)の構造距離叙述関係仮説は次のような結果構文の叙述関係を説明できる。直接目的語制限に反している(74b)と擬似目的語を省略した(75)(76)では、結果述語の叙述対象は表れている主語しかなく、それが選ばれる。擬似目的語が現れた場合の(75)(76)では、結果述語は、主語との構造的距離と、擬似目的語との構造的距離が等しくあることで、どちらを叙述することもできる。これら三つの例すべてにおいて、(67)の構造距離叙述関係仮説で叙述関係を説明できる。

結果述語が主語と目的語との構造的距離が等しい、「SVR 了 O」の形をした例を見てきた。しかし、4.3.2 節で見てきたように、「把」構文を用いて目的語を動詞の後ろから動詞の前に持ってくるることができる。「把」を用いることで、結果構文が「SVR 了 O」から「S 把 OV [RAP/VP]」という構造になる。(72)=(77a)に「把」を加えたのが(77b)になる。

(77) a. 约翰 涂 蓝 了 房子。

ジョン 塗る 青 PFV 家

「ジョンは家を青く塗った。」

b. 约翰 把 房子 涂 蓝 了。

ジョン SA 家 塗る 青 PFV

「ジョンは家を青く塗った。」

(77b)は、(77a)同様、結果述語「藍」(青)は目的語「房子」(家)しか叙述することができない。しかし、理由が異なる。(77b)を構造的距離という統語的視点から見ると、(77b)が持つ「S 把 OV [R<sub>AP</sub>]の構造では、結果述語 AP は、主語との構造的距離と目的語との構造的距離が、(77a)と違って、等しくなく、目的語との構造的距離のほうが、主語との構造的距離より近い。そうすると、結果述語はより近い目的語しか叙述できないという可能性が考えられる。同じことが、(73)=(78a)と、それに「把」を加えた(78b)でも言える。

(78) a. 玛丽 摔 碎 了 花瓶。

メアリー 投げる 割れる PFV 花瓶

「メアリーが花瓶を(投げて)割った。」

b. 玛丽 把 花瓶 摔 碎 了。

メアリー SA 花瓶 投げる 割れる PFV

「メアリーが花瓶を(投げて)割った。」

(78b)は、「S 把 OV [R<sub>VP</sub>]という構造である。つまり、(77b)と同様、「把」を加えたことで、結果述語「碎」(割れる)は目的語「花瓶」との構造的距離が主語「玛丽」(メアリー)との構造的距離より近くなっている。(77b)も(78b)も結果述語は目的語を叙述しているので、結果述語はより近い目的語しか叙述できないという可能性が考えられる。そうすると、次のような仮説が立てられる。

### (79) 構造距離叙述関係仮説 (その2)

結果述語は主語との構造的距離と、目的語との構造的距離が異なる場合、より近いほうを叙述する。

この仮説は、結果述語が、(77a)や(78a)とは違って、主語と目的語のどちらも意味的には叙述可能な場合、「把」構文を使って主語との構造的距離と目的語との構造的距離を異な

らせることで、その妥当性を確認できる。

主語と目的語の両方が叙述対象になる(65)=(80a)に「把」を加えて、「把」構文にした例(80b)を見てみよう。

- (80) a. 太郎 追 累 了 花子。  
太郎 追う 疲れる PFV 花子  
i. 「太郎が花子を追って、花子が疲れた。」  
ii. 「太郎は花子を追って、太郎が疲れた。」
- b. 太郎 把 花子 追 累 了。  
太郎 SA 花子 追う 疲れる PFV  
「太郎が花子を追って、花子が疲れた。」

結果述語「累」(疲れる)の叙述対象が主語「太郎」と目的語「花子」の二通りの解釈ができる(80a)に対して、(80b)では、結果述語は目的語しか叙述できない。「把」構文になっている(80b)では、結果述語の主語との構造的距離と、目的語との構造的距離が等しい(80a)の状況と異なり、結果述語は、目的語のほうとより近い構造的距離を持つようになっている。(79)の構造距離叙述関係仮説(その2)の予想通り、(80b)の結果述語は目的語しか叙述できない。

(66)=(81a)に「把」を加えて「把」構文にした例(81b)でも(79)の仮説を検証してみよう。

- (81) a. 太郎 骑 累 了 马。  
太郎 乗る 疲れる PFV 馬  
i. 「太郎が馬に乗って、馬が疲れた。」  
ii. 「太郎が馬に乗って、太郎が疲れた。」
- b. 太郎 把 马 骑 累 了。  
太郎 SA 馬 乗る 疲れる PFV  
「太郎が馬に乗って、馬が疲れた。」

(81b)のように「把」を加えることで、結果述語「累」(疲れる)は構造的距離がより近い目的語「马」(馬)しか叙述しない馬が疲れたという(81ai)の意味しか残らなくなる。

擬似目的語を用いた例も同様の分析ができる。

(82) a. 他们 跳 累 了 (他们自己)。

彼ら 跳ぶ 疲れる PFV (彼ら自身)

「彼らは(彼ら自身が)跳んで疲れた。」

b. 他们 把 他们自己 跳 累 了。

彼ら SA 彼ら自身 跳ぶ 疲れる PFV

「彼らが彼ら自身を跳んで疲れた。」

(75)=(82a)に「把」を加えると(82b)になる。結果述語「累」(疲れる)は、主語の「他们」(彼ら)との構造的距離と比べ、より近い構造的位置にある擬似目的語「他们自己」(彼ら自身)と叙述関係を担っている見ることができる。このことから、(82b)は(82a)とは違って、意図的に目的語である「他们自己」(彼ら自身)を疲れさせるという意味が読み取れることになると考えられる。次も同様な分析ができる。

(83) a. 老师 喊 哑 了 (自己)。

先生 叫ぶ かれる PFV (自身)

「先生は叫んで、(自身の)喉がかれた。」

b. 老师 把 自己 喊 哑 了。

先生 SA 自身 叫ぶ かれる PFV

「先生が自身を叫んでかれた。」

(76)=(83a)に「把」を加えると(83b)になる。結果述語「哑」(かれる)は主語の「老师」(先生)との構造的距離と比べ、構造的距離がより近い擬似目的語「自己」(自身)を叙述していると見ることができる。(82b)と同様の意図性も出てくる。

今まで考察してきた内容をまとめる。中国語の結果構文は、直接目的語制限の代わりに、構造的距離という統語的な見方で結果述語の叙述対象を決めることができる。結果述語の、主語との構造的距離と目的語との構造的距離とが等しい場合、主語も目的語もどちらも叙述する対象になる。構造的距離が等しくなければ、より近いほうが叙述する対象に選ばれる。

中国語の結果構文は構造的距離で説明できることを見たが、日本語と英語も同様に構造的距離で叙述関係を説明できるかどうかを見てみよう。次の日本語と英語で対応関係にある例文から見てみよう。

(84) a. ジョンは壁を赤く塗った。(=4.2 節(6a))

b. John painted the wall red. (=4.2 節(6b))

(85) a. 太郎は花瓶を粉々に割った。(=4.2 節(7a))

b. Taro broke the vase into pieces. (=4.2 節(7b))

日本語は結果述語が目的語と叙述関係になることは、4.4.1 節でも見たように直接目的語制限からも説明できる。日本語の結果構文の構造は、SO [R<sub>AP/PP</sub>] V になっている。構造的距離から見ると、(84a)では結果述語「赤く」は目的語「壁」との構造的距離のほうが主語「ジョン」との構造的距離より近い。同様に、(85a)では結果述語「粉々に」は目的語「花瓶」との構造的距離のほうが主語「太郎」との構造的距離より近い。つまり、日本語では、結果述語は構造的距離がより近いほうを叙述していると言える。英語でも、日本語と同様、結果述語が目的語と叙述関係になることは直接目的語制限からも説明できる。英語の結果構文の構造は、SVO [R<sub>AP/PP</sub>] になっている。日本語と同様に構造的距離から見ると、(84b)では結果述語 red は目的語 the wall との構造的距離のほうが主語 John との構造的距離より近い。同様に、(85b)では結果述語 into pieces は目的語 the vase との構造的距離のほうが主語 Taro との構造的距離より近い。つまり、英語も日本語と同様、結果述語は構造的距離がより近いほうを叙述していることが言える。従って、日本語、中国語、英語の三言語の結果構文は、直接目的語制限で叙述関係まとめることはできないが、構造的距離という統語的視点から統一的に説明することができる。(67)の構造距離叙述関係仮説(その1)と(79)の構造距離叙述関係仮説(その2)をまとめると、次のようになる。

#### (86) 構造距離叙述関係仮説

日本語、中国語、英語の三言語とも、結果述語は主語との構造的距離と、目的語との構造的距離が等しい場合、どちらでも叙述可能である。構造的距離が異なる場合、より近いほうを叙述する。

しかし、(86)では、説明が難しい例も存在する。まずは次のような中国語の例を見よう。

(87) ??约翰 涂 [VP 累] 了 墙壁。

ジョン 塗る 疲れる PFV 壁

i. 「??ジョンが壁を塗って、ジョンが疲れた。」

ii. 「\*ジョンが壁を塗って、壁が疲れた。」

「SV[R<sub>VP</sub>]了 O」という構造を持っている結果構文(87)は、結果述語は主語との構造的距離と、目的語との構造的距離が等しいため、主語と目的語のどちらも叙述できるはずで

ある。意味的には壁が疲れることはないので、叙述対象は主語の太郎という解釈になるはずである。しかし、実際は、叙述対象の判断に揺れが生じて、目的語である壁を結果述語が叙述する、意味的に不自然な解釈のほうにも判断が揺れる。つまり、厳密に言えば直接目的語制限が働いていないとは断言できない。今後の課題として直接目的語制限の働きをさらに考察すべきだと考える。

次は日本語の例である。日本語の語順は中国語より自由であり、構造的距離で叙述関係を説明できない場合が出てくる。

(88) a. ジョンは壁を赤く塗った。(=(84a))

b. ジョンは赤く壁を塗った。

(88a)の結果構文では、結果述語「赤く」は主語より近い構造的距離にある目的語「壁」を叙述しているが、(88b)のように語順を変えて結果述語を主語と目的語の間に置くと、結果述語は主語との構造的距離と、目的語との構造的距離とが等しくなる。(86)の構造距離叙述関係仮説によると、(88b)の結果述語は主語と目的語のどちらでも叙述できるはずだが、実際は目的語しか叙述できない。つまり、構造距離叙述関係仮説では叙述関係をうまく予想できない結果構文がある。今後の課題として語順を入れ替えた結果構文も含めた考察を進めるべきだと考える。

4.4.3 節をまとめる。直接目的語制限では、日本語、中国語、英語三言語の結果構文における叙述関係を統一的に説明することができないが、(86)の構造距離叙述関係仮説では、三言語の結果構文における叙述関係を統一的に説明することができる。ただし、構造距離叙述関係仮説でもうまく扱えない例が中国語にはある。(87)のように、中国語では、主語と目的語の両方が叙述可能な場合、結果述語の意味から、主語を叙述することしかできない場合でも、その解釈が自然ではないことがある。

#### 4.4.4 疑似主語 (Fake Subject)

中国語には、日本語と英語では存在しない、文頭の位置を占める主語が深層構造では目的語になっている特殊な結果構文が存在する。次はその特殊な結果構文の中国語の例である。

(89) 饭 吃 完 了。  
ご飯 食べる 終わる PFV  
「ご飯が食べ終わった。」

(89)は、「他動詞+非対格動詞」の構造である。文頭の位置を占める主語が深層構造では他動詞「吃」(食べる)の対象であるはずで、結果述語「完」(終わる)は表層構造では

主語の位置を占める「飯」（ご飯）と叙述関係を担っている。深層構造では、主語が隠れていて、目的語が文頭に表れていると考えられる。このように、深層構造では目的語でありながら、主語の位置に現れるものを擬似主語（Fake subject）と呼んでおこう。

主語の位置に現れるのは実際目的語であるため、意味解釈には受け身の意味が入っている。よって、受け身のマーカーを入れることができると考えられる。

- (90) 飯 被 吃 完 了。  
ご飯 PASS 食べる 終わる PFV  
「ご飯が食べ終わられた。」

(89)に受け身のマーカー「被」を入れると、(90)になる。表層構造では、主語の位置にあるものは、深層構造では目的語である。(89)と(90)も項を一つしか持たないことになっている。さらに、「把」構文を用いて、目的語を動詞の前に持ってくると、次のようになる。

- (91) 我 把 饭 吃 完 了。  
私 SA ご飯 食べる 終わる PFV  
「私はご飯を食べ終わった。」

(91)のように、項を一つ増やし、主語を加えると、表層構造で(89)では主語の位置を占める「飯」（ご飯）は「把」構文によって、目的語の位置に移動し、目的語の特徴を示している。(89)-(91)で見てきたものは、(89)の「飯」（ご飯）は擬似主語とも言える証拠の一つでもあるだろう。

4.4.3.2 節で見てきたように、目的語が非指示的（non-referential）名詞の場合、次のような文を作ることができる。

- (92) 张三 喝 醉 了 酒。  
張三 飲む 酔う PFV お酒  
「張三はお酒を飲んで酔った。」

- (93) 张三 喝 空 了 酒。  
張三 飲む 空 PFV お酒  
「張三はお酒を飲んで、お酒が空になった。」

(92)と(93)の結果述語はそれぞれ、「醉」（酔う）と「空」（空）になっている。4.4.3 で考察したとおり、直接目的語制限が働かないため、結果述語は動詞の動作の結果を叙述

し、(92)の場合は、主語の張三が酔ったという結果状態を表し、(93)は目的語のお酒が空になった状態を表している。つまり、意味的に、主語の結果状態を表しているか目的語の結果状態を表しているかは、結果述語で決定されている。(92)の意味と同様、張三が酔ったという解釈ができる中国語の結果構文を見てみよう。なお、この結果構文は、日本語と英語には存在しない。

(94) \*酒 喝 醉 了 张三。  
酒 飲む 酔う PFV 張三

(95) 这 瓶 酒 喝 醉 了 张三。  
この CL 酒 飲む 酔う PFV 張三  
「この酒は張三を（飲んで）酔わせた。」

(马&张 2021)

この二つの例文は「他動詞と非対格動詞」の構造で、文頭の主語の位置にあるものは深層構造では目的語であり、文末の目的語の位置にあるものは深層構造では主語になっている。(94)のように、深層構造では目的語になるものは非指示的 (non-referential) 名詞「酒」になると、非文になるが、(95)のように、指示的 (referential) 名詞「这瓶酒」(この一瓶のお酒) になると、文法的になる。

沈 (2004: 3)は動詞と結果述語との組み合わせである結果複合動詞には、使役性を持つものと持たないものがあると述べている。また、于 (2015:106)は、結果複合動詞は、前項動詞 V1 と後項動詞 V2 が合成した時点で、その間には使役関係が成立すると述べている。つまり、(95)では、主語「这瓶酒」(この一瓶の酒) は、直接な原因を表す Causer の意味役割を担っていると考えられる。よって、このお酒が張三を酔わせたという解釈ができる。

(96) \*这 瓶 酒 喝 空 了 张三。  
この CL 酒 飲む 空 PFV 張三

(95)の結果述語「酔」を「空」にすると、(96)のように、非文になる。それは、(96)は使役性を持つため、結果述語が目的語の位置を占める要素の結果状態を表していることになる。(96)では原因項の意味役割を担うお酒が張三を空に飲ませたという解釈ができないため、非文になると考えられる。つまり、「他動詞と非対格動詞」の構造で、深層構造では目的語になるものが主語の位置を占め、深層構造では主語になるものが目的語の位置を占める構文の場合、(92)(93)と違い、使役性を持ち、結果述語が目的語の位置を占める、深層構造では主語になっている要素の結果状態を叙述することになる。

「非能格動詞と非対格動詞」の構文の結果構文を見てみよう<sup>33</sup>。

- (97) a. 马拉松 跑 累 了 张三。  
マラソン 走る 疲れる PFV 張三  
「張三がマラソンを走ったことで、張三が疲れた。」  
b. \*マラソンが太郎をクタクタに走った。  
c. \*The marathon ran John tired.

(邱 2017: 2)

(97a)の中国語は「非能格動詞と非対格動詞」の構文で、結果述語である「累」(疲れる)が目的語の位置を占める「张三」と叙述関係になっている。しかし、表層構造では、文の主語の位置にあるのは、無生物である「马拉松」(マラソン)で、動作主ではなく、邱(2017)の言うところによると、原因項になっている。逆に、動作主である「张三」が目的語の位置にある。邱(2017: 26)は(97a)のような構文を原因型結果構文と呼んでいる。(97b, c)からわかるように、このような原因型結果構文は英語や日本語では成立しない(Huang 2006、石村 2011)。次も原因型結果構文の例である。

- (98) a. 烈酒 醉 倒 了 张三。  
強い酒 酔う 倒れる PFV 張三  
強い酒で張三が酔って倒れた。

(邱 2017: 22)

- b. \*強い酒が太郎をフラフラに酔った。  
c. \*The strong alcoholic drink John down.

(98a)は(97a)と違い、「非対格動詞+非対格動詞」の構文になっている。非対格動詞「醉」(酔う)は状態変化しか意味していない。結果述語である「倒」(倒れる)が「张三」と叙述関係になっている。そして、主語の位置にある「烈酒」(強い酒)は、張三が酔って倒れた原因を表す原因項である。(97a)と(98a)で示されるように、中国語では、主語の位置を占める要素が原因項になることができる。(98a)と対応する日本語と英語としては(98b)と(98c)のようなものを作ることができるが、非文になる。しかし、(98b)の日本語の動詞を「酔わせる」とし、使役文にすると、事情が異なってくる。このことを次の例で見てみよう<sup>34</sup>。

(97a, b)を使役文にすると、それぞれ次のようになる。

<sup>33</sup> (100a) のグロスと日本語訳は筆者杜による。

<sup>34</sup> 英語の使役文では、make を用いた複文になるため、考察に入れない。

- (99) a. 马拉松 让 张三 跑 累 了。  
 マラソン CAUSE 張三 走る 疲れる PFV  
 「マラソンが張三を走り疲れさせた。」  
 b. \*マラソンが太郎をクタクタに走らせた。

(99a)のように、「让」(させる)という使役のマーカを用いることで、使役文が作られる。語順については、使役のマーカである「让」によって、動作主である「张三」が動詞「跑」の前に位置することになる。(97a)と同様「马拉松」(マラソン)は原因項になっている。(99b)の日本語は、依然として非文である。

(98a, b)に対応する使役文はそれぞれ次のようになる。

- (100)a. 烈酒 让 张三 醉 倒 了。  
 強い酒 CAUS 張三 酔う 倒れる PFV  
 「強い酒が張三を酔わせて倒れさせた。」  
 b. 強い酒が太郎をフラフラに酔わせた。

(99a)と同様、(100a)では、「让」(させる)という使役のマーカを用いることで、「醉」(酔う)の前に、動作主である「张三」が位置している。「烈酒」(強い酒)は今まで同様、原因項になっている。(100b)は(99b)と異なり、文法的になっている。

なぜ(99b)は非文で、(100b)は文法的という違いが出るのか。それは、「走る」と「酔う」の意味的な違いが関係していると考えられる。「走る」には状態変化の意味がないが、「酔う」には状態変化が含まれている。そのため、次のような対比が生まれる。

- (101)a. \*太郎が (マラソンで) クタクタに走った。  
 b. 太郎が (強いお酒で) フラフラに酔った。

(101a)と(101b)の文法性の違いがそのまま(99b)と(100b)の違いに反映していると考えられる。

中国語の原因型結果構文である(97a)と(98a)は対応する日本語(97b)(98b)と違い文法的で、使役のマーカを用いた結果構文(99a)(100a)も同様に文法的である。つまり、中国語は「让」(させる)のような使役のマーカを使った使役文であろうと、それを使わない原因型結果構文であろうと、4.3.1 節の(11)(12a)で見たように、状態変化の意味の有無は文の成立に影響しない。

この節で明らかにした日中の重要な違いは次の点である。中国語は動詞の意味の中に状態変化が含まれているかどうかに関わらず、結果述語を付けることで、結果構文が成立するが、日本語では、動詞の意味の中に状態変化が含まれない場合(101a)(99b)のよう

に、結果構文が成立しない。

#### 4.5 まとめ

日中英三言語における結果構文の動詞と結果述語の関わりを考察してきた。特に、動詞と結果述語との因果関係について、英語では、動詞が状態変化の意味を含まない場合、結果述語との因果関係が弱くても、結果構文が成立する。一方、日本語では、動詞が状態変化の意味を含まず、結果述語との因果関係が弱い場合は、許容度が下がる。さらに、動詞と結果述語との因果関係が想起されず、結果述語の意味が、動詞の意味から予測が外れた場合は草山・一戸 (2005)がまとめているように、英語も日本語も結果構文は成立しない。しかし、中国語では、動詞の意味から予測が外れた場合でも、容認できる場合がある。

さらに、あらたに構造距離叙述関係仮説を立てた。結果述語は、日中英三言語とも主語との構造的距離と、目的語との構造的距離とが等しい場合、(その叙述対象を意味的に適切に修飾できるのであれば) 主語と目的語のどちらを叙述することもできる。さらに、中国語の結果構文において、「把」構文が使われた場合、結果述語は構造的距離がより近い目的語しか叙述できない。三言語とも、結果述語は、構造的距離がより近いほうを叙述するとまとめることができる。

三言語の結果述語の品詞は次の表 4 になる。

言語	英語	日本語	中国語
結果述語	AP/PP	AP/PP	AP/VP

表 4

表 4 のように、英語と日本語は結果述語の可能な範疇が同じである。中国語では、英語や日本語にある PP 結果述語を持っていない代わりに、VP 結果述語がある。

## 第5章 日本語、中国語、英語における移動表現と結果構文

### 5.1 はじめに

第2章では三言語の移動表現において、英語では前置詞句だけが完結性に影響を与えているのに対し、日本語では位置変化を表す動詞が、中国語では動詞連続の中での二番目の位置変化を表す動詞が、完結性に影響を与えていることがわかった。結果構文を扱った第4章では、構造的距離の観点から、三言語とも結果述語はより近いNPを叙述すると論じた。それによって、中国語でSV<sub>[rAP/VP]</sub>Oという構造の場合、結果述語はより近い目的語のほうを叙述することになる。

第2,3章で考察してきた移動表現における位置変化表現の範疇と、第4章で見た結果構文における結果述語の範疇は、次の表1のようになる。

	位置変化	状態変化
英語	PP (1)	AP/PP (4)
日本語	PP (2)	AP/PP <sup>35</sup> (5)
中国語	VP (3)	AP/VP (6)

表1

表1で示しているように、品詞から見ると、同じ言語の中で移動表現であろうと、結果構文であろうと、前置詞（英語）／後置詞（日本語）／動詞（中国語）で変化を表すという共通性を持っている。表の中の丸カッコ付きの番号は下の例文に対応している。

(1) John ran [PP to the station].

(2) 太郎は [PP 駅に] 走って行った。

(3) 太郎 跑 [VP 到<sup>36</sup> 车站] 了。  
 太郎 走る 到着 駅 PFV  
 「太郎は走って駅に到着した。」

(4) a. John shot Mary [AP dead].

b. John shot Mary [PP to death].

<sup>35</sup> 日本語の状態変化を表す結果述語がAP/PPであることに関しては、第4章の4.2節を参照。

<sup>36</sup> 中国語の「到」のような、伝統的に方向補語と言われているものが動詞であることに関しては、第2章を参照。

- (5) a. 太郎は壁を [AP 赤く] 塗った。  
 b. 太郎は壁を [PP 真っ赤に] 塗った。  
 c. 太郎は花瓶を [PP 粉々に] 割った。

(6) a. 太郎 塗 [AP 紅] 了 墙壁。  
 太郎 塗る 赤い PFV 壁  
 「太郎は壁を赤く塗った。」

b. 太郎 吃 [VP 完] 了 飯。  
 太郎 食べる 終わる PFV ご飯  
 「太郎はご飯を食べ終わった。」

移動表現の位置変化と結果構文の状態変化は一定の類似性が見られると先行研究でしばしば指摘されてきた (Goldberg and Jakendoff 2004, 上野 2007、米山 2009)。小野 (2007: 92-93)は、次の(7)-(10)のような英語と日本語の結果構文と移動構文の例を挙げて、移動構文と結果構文には類似性があると主張している。

- (7) a. He pounded the metal flat.  
 b. I felt knocked breathless.

- (8) a. \*太郎は金属を平らに叩いた。  
 b. \*太郎はふらふらにぶたれた。

(7)と(8)からわかるように、動詞の意味から結果述語が表す状態を予測できない派生的結果構文の場合、日本語では非文になる。移動表現でも似たような日英の違いが見られる。次の例文を見てみよう。

- (9) a. John ran to the station.  
 b. The bottle floated into the cave.

- (10) a. ??ジョンは駅に走った。  
 b. ??瓶が洞窟の中に漂った。

(9)の英語は文法的であるが、(10)の日本語は、移動動詞「走る」「漂う」の意味の中に、移動の結果を含んでいないため、「駅に」「洞窟の中に」のような到着点を表す表現と共起すると、不自然な文になる。英語では派生的な結果構文も移動表現も文法的になる

が、日本語では非文か、不自然な文になる。(7a)と(8a)と対応する中国語の例は次の(11)に、(9a)と(10a)と対応するのは(12)になる。

(11) 他 敲 平 了 鉄。  
彼 叩く 平らに PFV 鉄  
「彼は鉄を平らに叩いた。」

(12) 太郎 跑 到 车站 了。  
太郎 走る 到着 駅 PFV  
「太郎は走って駅に到着した。」

中国語では派生的な結果構文でも、移動表現でも、文法的になる点で、英語と同様である。しかし、第4章の4.4節で見えてきたように、結果構文では、中国語は英語や日本語と違い、直接目的語制限は働かない。この章では、移動表現でも同様な違いが見られるかを探りたい。このことを踏まえて、本章は日中英の三言語において、移動表現における位置変化の表現と結果構文における結果述語にどんな共通点と相違点があり、どのような観点からタイポロジー上に整合性が求められるかを考察する。

本章の構成は以下の通りである。5.2節では変化を表す中国語の結果／方向補語、英語の前置詞句、日本語の後置詞句、日英中三言語の移動表現と結果構文のケジメの有無、派生的／強い結果構文か本来的／弱い結果構文の三言語における分類から、移動表現は結果構文とどのような共通性を持っているかを考察する。移動表現は結果構文の分類5.3節では、第4章で考察してきた直接目的語制限は移動表現でも通用するかを考察し、「把」構文でしか結果述語が目的語を叙述しない中国語では、移動表現においてどんな振る舞いをするかを明らかにし、構造的距離から移動表現も結果構文も説明できるかを見る。最後に、5.4節では本章の分析をまとめる。

## 5.2 移動表現と結果構文の共通点と相違点

第2章では三言語の移動表現において、どんな要素が文の完結性に影響を与えているかを考察した。第4章では三言語の結果構文において、動詞と結果述語との因果関係の関わりや直接目的語制限で結果述語と目的語との叙述関係を叙述するのではなく、構造的距離から、三言語の共通点がわかった。本節は三言語において、移動表現と結果構文との共通性を見る。

### 5.2.1 同一言語の中での移動表現と結果構文の類似性

Talmy (1985: 102)は中国語の移動表現の衛星について、“Another kind of satellite is the second element of a verb compound in Chinese, called by some the ‘resultative complement’.”

(もう一つの種類の衛星は、中国語の動詞複合語の二番目の要素であり、「結果補語」と呼ばれているものである)と述べている。Talmy (1985)が用いた“resultative complement”は中国語の「方向補語」と「結果補語」の両方に対応していると考えられる。

- (13) 他 拿 来 一 本 书。  
彼 持つ 来る 一 冊 本  
「彼は一冊の本を持ってくる。」

- (14) 把 喜欢 的 都 拿 走。  
ACC 好き の 全部 持つ 離れる  
「好きなものを全部持って行って。」

((13)(14)とも朱 1982: 126, 128 の例にグロスと日本語訳を追加)

動詞「拿」(持つ)の後ろに方向補語である「来」(来る)をつけることで、(13)のような移動表現ができる。同様に、同じ動詞「拿」の後ろに結果補語である「走」(離れる)をつけることで、(14)のような結果構文ができる。「来」のような方向補語は位置変化の結果を表す要素で、「走」のような結果補語は状態変化の結果を表す要素である。これら二つの補語は同じように動詞の後ろに位置し、似たような統語的特徴を持っていると言えるだろう。(14)の結果補語「走」の代わりに、方向補語「来」を使うと、次のような移動表現になる。

- (15) 把 喜欢 的 都 拿 来。  
ACC 好き の 全部 持つ 来る  
「好きなものを全部持って来る。」

(14)(15)のように、中国語では、結果補語は状態変化を表し、方向補語は位置変化を表しているが、どちらの補語も「拿」(持つ)のような動詞の後ろに位置し、変化を表しているという共通点がある。

英語では、小野 (2007: 70-71)が先行研究からまとめているように、結果述語は有界的なスケールを持ち、そのスケールは抽象的な「経路」(path)と概念的に並行すると仮定できる。下の例のように、移動表現でよく使われる前置詞 to や into は結果述語でも用いることができる。

- (16)a. The water froze to ice.  
b. John hammered the metal into a ball.

(小野 2007: 71)

形容詞句は一般に、ものがおかれた状態や性質を表すが、(16)の *to ice, into a ball* のように、形容詞句だけでなく、前置詞句も、結果構文において状態変化の結果を表すことができる (小野 2007: 71)。つまり、英語では移動表現と結果構文の共通点として、前置詞で導かれた PP で状態変化や位置変化を表すことができる。さらに、結果構文は、達成事象(accomplishment)とも関係性を持っている点でも移動表現と共通する。

(17) John broke the egg into pieces.

(18) John ran to the store.

(19) John broke the egg into a glass.

(17)では、*into pieces* によって、到達事象から達成事象に変わっている。主語 John の働きかけが始まってから結果述語が表す状態に至るまで時間が必要である。それを時間の流れで形成された経路とみなすことができる。(18)では、着点句 *to the store* によって、活動事象から達成事象に変わっている。主語 John が着点まで移動する距離が必要である。それは移動の経路である。(19)では、卵が状態の変化をしながら位置を変えている。結果述語の位置に、移動の経路を表す *into a glass* が現れている例と見ることができる。従って、移動表現も結果構文も、達成事象を表し、経路を持っているという共通性が見られる。

移動表現と結果構文の類似性を指摘している米山 (2009)は(20a, b)のような結果構文と(20c)の Boas (2003)からの移動表現の例を出している。

(20)a. John golfed himself into a divorce.

(ジョンはゴルフに熱中し、離婚する羽目になった)

b. John drank himself into an early grave.

(ジョンは酒を飲みすぎて早死にした)

(米山 2009: 100)

c. Kim ran herself to the store.

(キムは店までなんとか走って行った。)

(米山 2009: 102; Boas 2003: 246)

第四章の 4.4.2.1 節で見たように、英語では非能格動詞が使われた場合、再帰代名詞と結果述語を同時に使うことで、結果構文を作ることができる。(20a, b)では、*golf, drink* のような、状態変化の意味を含まない非能格動詞が使われ、擬似目的語として再帰代名詞 *himself*、状態変化を表す前置詞句を続けると、結果構文になる。動詞に状態変化の意味が含まれないため、(20a, b)のような結果構文は派生的／強い結果構文である。(20c)の移

動表現を見ると、移動様態動詞 *run* が使われているが、状態変化の意味は、持っていない。この動詞に再帰代名詞 *herself* と位置変化を表す前置詞句 *to the store* が後続して移動表現になっている。つまり、(20a, b)の派生的／強い結果構文と(20c)の移動表現の共通点として、動詞に状態変化の意味が含まれないこと、再帰代名詞と変化を表す前置詞句が続いているということがある。

次に示しているのは、(20a, b)と似たような意味を、*way* 構文で表現した例である。

(21)a. John golfed his way into a divorce.

b. John drank his way into an early grave.

(米山 2009: 100)

c. John elbowed his way through the crowd.

状態の変化を表す(21a, b)の *way* 構文の非能格動詞と前置詞句は、(20a, b)の結果構文と同様である。位置変化を表す(21c)の *way* 構文の前置詞句は、経路を表している。これらの例からも、移動表現と結果構文の類似性が見られるだろう。

移動の様態を表す非能格動詞 *run* と再帰代名詞が同時に現れる場合でも、移動表現と結果構文を作ることができる。

(22)a. John ran himself into the ground.

(ジョンは走ってへとへとになった。)

(米山 2009: 105; Weckslar 2005: 256)

b. Kim ran herself to the store. (=20c)

(キムは店までなんとか走って行った。)

(22a, b)も移動様態動詞 *run*、再帰代名詞、前置詞句が使われている。(22a)は前置詞句 *into the ground* が結果述語として、擬似目的語である再帰代名詞 *himself* と叙述関係になっている。動詞 *run* には状態変化の意味がないため、派生的／強い結果構文になる。(22b)は前置詞句 *to the store* が位置変化を表し、移動表現である。このように、(22)のような例からも派生的／強い結果構文と移動表現の類似性が見られる。

(20)から(22)は非能格動詞を使った例だったが、次は他動詞 *hammer* が使われた例である。

(23)a. John hammered the metal into a ball. ((16b)再掲)

b. John hammered the metal into the ground.

(ジョンは金属を叩いて地中に埋めた。)

(米山 2009: 105; Weckslar 2005: 256)

hammer の意味の中には状態変化が含まれていない。(23a)は前置詞句が結果述語として、目的語である metal と叙述関係になっている。つまり、(23a)は派生的／強い結果構文である。(23b)は、前置詞句 into the ground が位置変化を表していることで、移動表現になっている。(23)のように、他動詞の例でも、派生的／強い結果構文と移動表現の類似性があると言える。

米山 (2009: 98)は移動表現は弱い結果構文と平行していると指摘しているが、上で見たように、むしろ、移動表現は強い結果構文と平行していると思われる。

日本語でも、移動表現と結果構文において、後置詞「に」で導いたものには共通点が見られる。

(24)a. 京都駅に走って行った。

b. 太郎は壁を真っ赤に塗った。

第2章で述べたように、(24a)のような移動表現では、「に」で導かれた後置詞句「京都駅に」は終点に至る位置変化を表す表現である。(24b)のような結果構文では、後置詞句「真っ赤に」は状態変化を表している。つまり、日本語では移動表現と結果構文に現れる「に」で導かれた後置詞句は、変化という性質が共通していると言えるだろう。

三言語の共通性として、移動表現と結果構文に現れる、中国語の結果／方向補語、英語の前置詞句、日本語の後置詞句はどれも、変化を表している。また英語では、派生的／強い結果構文と移動表現の類似性が見られる。

### 5.2.2 ケジメの有無から見る三言語の移動表現と結果構文

影山 (2002)は、ケジメという概念が、日本人の言葉だけでなく、日常生活にも関わってきていると述べている。言葉のケジメ、移動のケジメ、行為のケジメ、モノのケジメなどのケジメについて具体的に考察している。例えば、勝負で結果が出るのがケジメで、移動の最終目的地に到着することがケジメで、状態変化を経て最終的な結果になるのもケジメである。本節の考察対象である移動表現と結果構文もケジメの観点から考察することができると思われる。

影山 (2002)のケジメの有無から移動表現と結果構文の共通性を見てみよう。まずは英語の例である。

(25)a. The ironsmith pounded the iron.

b. The ironsmith pounded the iron flat.

(影山 2002: 91)

動詞 pound が表す動作は、何度も続けることができる。継続している行為に、結果述語 flat を加えると、(25b)のように継続的な行為にケジメをつけることになる。(25)と対応する日本語は次のようになる。

- (26)a. 鍛冶屋が鉄をたたいた。  
b. \*鍛冶屋が鉄を平らにたたいた。  
c. 鍛冶屋が鉄を平らにたたき延ばした。

(影山 2002: 91)

継続動詞「たたく」を使った(26a)に、結果述語「平らに」を加えて(26b)のようにすると、非文になる。つまり日本語では、英語のように結果述語をつけるだけでは、ケジメをつけることにならない。(26c)のように、さらにもう一つ「延ばす」のような状態変化を表す動詞を用いて、はじめて動作のケジメをつけることになる。

ケジメという視点から見ると、中国語はどうなるか見てみよう。

- (27)a. 铁匠 敲 了 金属。  
鍛冶屋 たたく PFV 金属  
「鍛冶屋は金属をたたいた。」  
  
b. 铁匠 敲 平 了 金属。  
鍛冶屋 たたく 平らに PFV 金属  
「鍛冶屋は金属を平らに叩いた。」

(27a)のように、継続動詞「敲」(たたく)を使うことで、意味的に鍛冶屋は何度もたたくことができる。動作のケジメをつけるために、(27b)のように結果述語「平」(平らに)を加えるだけで良いという点で、英語と同様である。

影山 (2002: 41-56)が述べているように、英語と日本語の移動表現でも、ケジメの違いが見られる。

- (28)a. The dog swam to the shore.  
b. ?犬は岸に泳いだ。  
c. 犬は岸に泳ぎ着いた。

(影山 2002: 42)

(28a)は、移動物 the dog と終点句 to the shore を含んだ表現である。(28a)の英語と対応する日本語は、(28b)のように不自然な文になる。つまり、英語では終点句である to the

shore があることで、移動という行為にケジメをつけることになる。日本語では(28b)のように、「岸に」だけでは移動という行為にケジメをつけることにはならない。ケジメをつけるには、影山が指摘するように、(28c)のようにもう一つ動詞を加えて、「泳ぎ着いた」にすることが必要である。つまり、日本語では位置変化を表す動詞「着く」でケジメをつけていると言えるだろう。次は着点ではなく、起点を含む例文である。

(29)a. She ran/danced out of the room. (彼女走って／踊りながら部屋から出て)

b. \*彼女は部屋の中から走った／踊った。

(影山 2002: 51)

c. 彼女は部屋の中から{走って／踊って}行った。

(29a)は out of the room という起点句を含んだ表現である。(29a)の英語と多応する日本語は、(29b)のように非文になる。つまり、英語では out of the room で移動の始まりというケジメをつけていると言えるだろう。日本語では(29c)のように、もう一つ動詞を加えて、「走って行った／踊って行った」にすると文法的になる。つまり、日本語でケジメをつけているのは位置変化を表す動詞「行く」と言えるだろう。

中国語はどうか見てみよう。まずは到着点を含んだ(28)に対応する中国語の例である。

(30)a. \*狗 游 了 海岸。

犬 泳ぐ PFV 岸

b. 狗 游 到 了 海岸。

犬 泳ぐ 到着 PFV 岸

「犬は泳いで岸に到着した。」

(30)は終点「海岸」(岸)を含んだ例である。文の構造から見ると、日本語の(28b, c)にそれぞれ対応する中国語の(30a, b)は、日本語と直接対応しているように見える。日本語の(28b)では、動詞「泳ぐ」だけでは不自然であったが、対応する中国語の(30a)も同様に、動詞「游」(泳ぐ)だけでは非文になる。さらに、日本語では(28c)のように、もう一つ位置変化を表す動詞「着く」を加えることで文法的になったが、対応する中国語の(30b)も同様に(30a)にもう一つ位置変化を表す動詞「到」(到着)を加えることで文法的に見えるように見える。この見方では、中国語は日本語と全く同様な振る舞いをして見える。

しかし、ケジメの観点から見ると、中国語は日本語と全く違う見方になる。日本語では、(28c)(29c)のように文のケジメをつけているのは位置変化を表す動詞「着く」や「行

く」になっている。英語では、(28a)のように前置詞句 *to the shore*、(29a)のように前置詞句 *out of the room* でケジメをつけている。一方、中国語には「に」や *to* と対応する後置詞／前置詞は存在しないため、移動の行為にケジメをつけるのは終点を含んだ動詞句「到(了) 海岸」(岸に到着し(た))」という見方ができる。さらに、次の(31)からも動詞句でケジメをつけているという見方が得られる。

(31) 狗 游 了  
犬 泳ぐ PFV

(31)に英語の前置詞句 *to the shore* と対応する、終点を表す動詞句「到(了) 海岸」(岸に到着し(た))」を加えると(30b)になる。(30b)の終点を表す動詞句「到(了) 海岸」で移動の結果を表現し、ケジメをつけていると見ることができる。終点句でケジメをつけることは英語と同様である。起点も同様なことが言えるかどうか見てみよう。

(32)a. \*她 跑 了 房间。  
彼女 走る PFV 部屋

b. 她 跑 出 了 房间。  
彼女 走る 出る PFV 部屋  
「彼女は走って部屋から出た。」

(32)は起点「房间」(部屋)を含んだ例である。(32a, b)はそれぞれ日本語の(29b, c)と似ているように見える。動詞(「跑」(走る))一つだけでは(32a)のように非文になるが、もう一つ位置変化を動詞(「出」(出る))を加えることで、(32b)のように文法的になる。しかし、ケジメの観点から見ると、終点を含んだ例(30b)と同様、ケジメをつけているのは、「出了房间」(部屋から出た)という起点を表す動詞句になる。これは、(32b)と次の(33)との関係からも裏付けることができる。

(33) 她 跑 了  
彼女 走る PFV

(33)に英語の前置詞句 *out of the room* と対応する、起点を表す動詞句「出了房间」を加えると(32b)になる。起点を表す動詞句がケジメをつけている。

以上をまとめると、結果構文において、日本語では状態変化を表す動詞を加えてケジメをつける。一方、英語と中国語では結果述語でケジメをつけている。移動表現においては、日本語では位置変化を表す動詞を加えることでケジメをつけているが、中国語は

英語と同様、終点句や起点句でケジメをつけることができる。さらに、中国語では動詞句でケジメをつけているが、英語では前置詞句でケジメをつけている。

### 5.2.3 移動表現と結果構文にある「派生的／強い結果構文」「本来的／弱い結果構文」との比較

4.3 節では、三言語の結果構文において、動詞の中にある状態変化の有無の結果構文との関係性を考察してきた。英語も日本語も「本来的／弱い結果構文」を許すが、日本語は状態変化の意味を持たない動詞を用いた「派生的／強い結果構文」を許さないという先行研究の指摘を踏まえて、中国語は英語と同様、「派生的／強い結果構文」を許すことがわかった。さらに、英語と違い、動詞の意味から予測されるのと逆の意味を表す結果述語でも結果構文を構成することが可能であることがわかった。本節では、完結性の有無と結果キャンセル可能性との関係から、三言語の移動表現の、「本来的／弱い結果構文」、「派生的／強い結果構文」との類似性を見てみよう。

2.5.2 節で考察してきた移動表現の例文を再掲しながら、結果構文との比較を試みる。

(34)a. ?太郎は西院駅に走った (が、円町でやめた)。

b. ?太郎は金属を平らにたたいた (が、平らにならなかった)。

2.5.2 節で考察してきたように、判断の揺れを棚上げにすれば、(34a)は「が、円町でやめた」をつけることで、「西院駅」という終点に到着する結果をキャンセルすることができる。(34b)の結果構文では、動詞「たたく」の意味の中に状態変化が含まれていないため、結果述語である「平らに」という結果をキャンセルすることができる。また、動詞「走る」は、位置変化の意味を含んでいず、動詞「たたく」は、状態変化の意味を含んでいない。つまり、どちらの動詞も変化の意味を含まない。さらに、このような変化の意味を含まない動詞は完結性を表す表現（「西院駅に」「平らに」）と共起すると「？」で示されているように不自然な文になる。キャンセル可能性、変化の意味の欠如、文の不自然さという三点から移動表現と結果構文との類似性が見られる。(34b)は（対応する英語では）派生的／強い結果構文と言われているが、移動表現の(34a)も移動の結果を表す構文としての一種の派生的／強い結果構文と言えるだろう<sup>37</sup>。

さらに、変化の意味を含んだ動詞を用いた移動表現と結果構文を比較してみよう。

(35)a. 太郎は西院駅に走って行った (\*が、円町で行くのをやめた)。

<sup>37</sup> Boas (2003: 247)は(20a, b)(22a)のように、状態変化を表す前置詞句を *Property Resultative* と呼び、(20c)のように、位置変化を表す前置詞句を *Location Resultative* と呼んでいる。性質と移動で区別しているが、広い意味で両方とも *Resultative* としている。

b. 太郎は壁を赤く塗った (\*が、赤くならなかった)。

2.5.2 節で考察してきたように、移動表現(35a)では、様態動詞「走る」に、文を完結的にする「行く」という位置変化を表す動詞を加えている。その場合、「が、円町で(行くのを)やめた」を続けられず結果をキャンセルすることができない。結果構文(35b)では、動詞「塗る」の意味の中に状態変化が含まれているため、結果述語である「赤く」という結果をキャンセルすることができない。キャンセル不可能性、変化の意味の存在、文の自然さという三点から移動表現と結果構文との類似性が見られる。(35b)は本来的/弱い結果構文と言われているが、同様な振る舞いをする移動表現の(35a)も移動の結果を表す構文としてのも一種の本来的/弱い結果構文と言えるだろう。

最後に、比較できる結果構文は持たないが、2.5.2 節で考察した次の移動表現も見てみよう。

(36)a. 太郎は西院駅に行った (\*が、円町でやめた)。

b. 太郎は西院駅に走っていった (が、円町で走るのをやめた)。

c. 太郎は西院駅に走り着いた。

(36a)は、位置変化を表す動詞「行く」が使われ、(35a)と同様の理由で「が、円町でやめた」を続けられず結果をキャンセルすることができない。キャンセル不可能性、変化の意味の存在、文の自然さという三点から(36a)は(35a)と同様に、移動の結果を表す構文としてのも一種の本来的/弱い結果構文と言えるだろう。(36b)は、様態動詞「走る」と、(35a)の「て行く」と違ってアスペクトを表す補助動詞「ていく」が使われている。従って位置変化を表す動詞がないため、「が、円町で走るのをやめた」を続けることができ、結果をキャンセルすることができる。キャンセル可能性、変化の意味の欠如という二つの点で(36b)は(34a)と共通し、その意味で一種の派生的/強い結果構文と言えるだろう。ただし、(34a)は不自然であったが、(36b)は自然な文である。それは、(36b)の「ていく」は「西院駅に」のように「に格」を選択できる点で、(35a)の「て行く」と同様であるが、(34a)では「に格」を選択する要素が欠如しているためだと考えられる。

(36c)は複合動詞「走り着く」になっている。後項動詞である「着く」は「行く」と似ていて、位置変化を表し、終点に到着するという結果の意味を持っている。つまり、この移動表現では、後項動詞が状態変化を表す結果述語と類似していると言えるだろう。

つまり、日本語では、「行く」や「着く」のような位置変化を表す動詞が含まれ終点まで到着したという意味を持つことで、結果をキャンセルすることができない移動表現は、本来的/弱い結果構文と同様の振る舞いをしている。移動様態動詞だけで、位置変化を表す動詞が含まれず、終点まで到着したという意味を持たないことで、結果をキャンセルすることができる移動表現は、派生的/強い結果構文と同様の振る舞いをする。

第4章で見てきた、日本語の結果構文と対応する中国語の例文を再掲し、本来的／弱い結果構文と派生的／強い結果構文とどのような対応関係があるかを見てみよう。

- (37)a. 约翰 涂 红 了 房子 (, \*但是房子没有红)。  
ジョン 塗る 赤い PFV 部屋 (\*しかし、部屋は赤くならなかった)。  
「ジョンは部屋を赤く塗った (\*が、部屋は赤くならなかった)。」
- b. 约翰 敲 平 了 金属 (, \*但是金属没有平)。  
ジョン たたく 平らに PFV 金属 (\*しかし、金属は平らにならなかった)。  
「ジョンは金属を平らにたたいた (\*が、金属は平らにならなかった)。」

(37a)は、動詞「涂」(塗る)の意味の中に状態変化が含まれ、さらに結果をキャンセルすることができないので、本来的／弱い結果構文に分類される。(37b)は、対応する日本語では(34b)のように不自然になるが、(37b)のように、状態変化の意味が含まれない動詞「敲」(たたく)と結果述語「平」(平らに)で構成されており、派生的／強い結果構文に分類される。そして、(34b)は結果をキャンセルすることができたが、中国語の(37b)は結果をキャンセルすることができない。

次は第2章ですでに考察した移動表現の例を再掲し、結果構文の分類とどのような類似性があるかを見てみよう。

- (38)a. 太郎 去 了 西院站 (, \*但是在元町放弃了)。  
太郎 行く PFV 西院駅 (しかし、円町でやめた)。  
「太郎は西院駅に行った (\*が、円町でやめた)。」
- b. 太郎 跑 去 了 西院站 (, \*但是在元町放弃了)。  
太郎 走る 行く PFV 西院駅 (しかし、円町でやめた)。  
「太郎は走って西院駅へ行った (\*が、円町でやめた)。」
- c. 太郎 跑 向 了 西院站 (, 但是在元町放弃了)。  
太郎 走る 向かう PFV 西院駅 (しかし、円町でやめた)。  
「太郎は西院駅へ向かって走った (が、円町でやめた)。」

(38a)の移動表現と、その(38a)に様態動詞「跑」(走る)を加えた(38b)の移動表現では、動詞「去」(行く)に位置変化の意味が含まれ、結果をキャンセルすることができない。(38b)は本来的／弱い結果構文と同様の振り舞いをしていることがわかる。(38c)の動詞「向」(向かう)は位置変化の意味を含まず方向しか表さないなので、結果をキャンセルす

ることができることになる。つまり、(38b)は派生的／強い結果構文と似ている。

ここまでをまとめると、本節で考察してきた移動表現を一種の結果構文とみなすと、中国語では、移動表現も含めた結果構文は、本来的／弱い結果構文であろうと、派生的／強い結果構文であろうと、結果をキャンセルすることができないということになる。ただし、(38c)で見たように、方向しか表さない動詞が使われた場合は、結果をキャンセルすることができる。

最後に英語の移動表現と結果構文との関係を見てみよう。

(39)a. John painted the wall red (\*, but the wall didn't become red).

b. John hammered the metal flat (\*, but the metal didn't become flat).

(39a)は、動詞 *paint* が状態変化の意味を含むので、結果をキャンセルすることができない本来的／弱い結果構文になる。(39b)では、動詞 *hammer* は状態変化の意味を含まないが、結果をキャンセルすることができない。このような派生的／強い結果構文は日本語では存在しない。英語も中国語も、結果構文において、本来的／弱い結果構文であろうと、派生的／強い結果構文であろうと、結果をキャンセルすることができないという共通性を持っている。次は移動表現を見てみよう。

(40)a. John ran to the station (\*, but he didn't arrive).

b. John ran toward the station (, but he didn't arrive).

c. John arrived at the station (, \*but he didn't arrive).

(40a)と(40b)は、移動様態動詞 *run* に位置変化の意味が含まれないところが、派生的／強い結果構文と対応する。丸括弧内からわかるように、(40a)は結果をキャンセルすることができないのに対し、(40b)は結果をキャンセルすることができる。それは、前置詞 *to* が終点まで到着した意味を表し、*toward* は方向しか表さないからである。(40c)の動詞 *arrive* は、位置変化の意味を含み、本来的／弱い結果構文と似ており、さらに、結果をキャンセルすることができない。つまり、ここでも、移動表現を一種の結果構文とみなすと、英語では移動表現も含めた結果構文は、本来的／弱い結果構文であろうと、派生的／強い結果構文であろうと、結果をキャンセルすることができない。ただし、方向しか表さない前置詞が使われた場合は、中国語の方向しか表さない動詞の場合と同様、結果をキャンセルすることができる。

まとめると、移動表現を一種の結果構文とみなして考えると、中国語は英語と同様の特徴を持っている。移動表現は両言語とも、結果構文と同様に、派生的な結果構文と本来的な結果構文が存在している。さらに、移動表現も結果構文も、派生的な結果構文であろうと、本来的な結果構文であろうと、両言語とも結果をキャンセルすることができな

い。それに対し、方向しか表さない前置詞／動詞が使われた場合は、両言語とも結果をキャンセルすることができる。

日本語は中国語英語の両言語と違って来る。日本語の結果構文は、本来の結果構文は存在するが、派生的な結果構文は存在しないか不自然である。そして本来の結果構文は結果をキャンセルすることができないが、不自然である派生的な結果構文は不自然さを棚上げすれば、結果をキャンセルすることができる。一方、移動表現において、本来の結果構文は結果をキャンセルすることができないが、派生的な結果構文は結果をキャンセルすることができる。

### 5.3 三言語における結果構文と移動表現における直接目的語制限

第4節で行った考察のように、日本語と英語の結果構文では、結果述語の叙述対象を直接目的語制限だけで説明できるが、中国語では直接目的語制限ではなく、構造的距離から叙述関係が説明できる。三言語の共通性を捉えるには、4.4.3節で提案した構造距離叙述関係仮説のように、構造的距離から結果述語の叙述対象を決める必要がある。具体的には、日本語と英語の結果構文も、中国語の「把」を含んでいる結果構文も、構造的距離がより近い対象が叙述対象になっている。5.2節で述べたように、結果構文の結果述語は移動構文の位置変化の述語と共通性がある。そこで、三言語において、移動表現でも、直接目的語制限が働くかどうか、あるいは4.4.3節の構造距離叙述関係仮説で説明できるかどうかをこの節で見てみよう。

#### 5.3.1 直接目的語制限は移動表現に通用するか

Levin (1993: 105)は移動様態動詞を“run”動詞と“waltz”動詞の二種類に分けた。これらの動詞は非能格動詞である同時に、活動動詞でもあり、継続性を持っている。

(41)a. run, walk, jump, march, roll, stroll...

b. dance, waltz, tango...

具体的に run と dance を用いた例を見てみよう。次は run を用いた移動表現の例とそれに対応する日本語と中国語の例である。

(42) John ran to the station.

(42)の英語では動詞 run に前置詞句 to the station をつけることで、完結性 (telic)を持ち、移動表現を構成している。結果構文の状態変化を表す結果述語に対応する移動表現における位置変化を表す表現は、前置詞句 to the station であることだと考えられる。この位置変化を表す表現は主語の移動を表し、つまり、結果構文で働いている直接目的語制限

は、自動詞が使われている移動表現では働かないことがわかる。

(43)a. ?ジョンは駅に走った。

b. ジョンは駅に走って行った。

(43a)の日本語では、動作動詞 (activity verbs) 「走る」は継続動詞で、完結性を持たないため、「駅へ」と共起すると、不自然な文になる。一方、(43b)のように「行く」をつけ、経路を加えることで、アスペクトが継続的から達成 (accomplishment) になり、文が自然になる。さらに、影山 (2001: 62, 63) が述べたように、(42)の英語では、主語の John が station という終点まで到着したという完結的な解釈ができるが、日本語では主語のジョンが駅という終点まで到着したかどうかは述べていないことになる。日本語も英語と同様、位置変化を表す表現は主語のジョンの移動を表し、結果構文で働いている直接目的語制限は働いていないことが言える。

(44)a. \*约翰 跑 了 车站。

ジョン 走る PFV 駅

b. 约翰 跑到 了 车站。

ジョン 走る 到着 PFV 駅

「ジョンは駅まで走った。」

(43a)の不自然な日本語と対応する(44a)の中国語は非文になる。中国語では、非能格動詞「跑」(走る)は目的語を取ることができないため、「车站」(駅)をくっつけことで、非文になる。文法的な文にするには、(44b)のように、終点までの経路を表す動詞「到」(到着)を動詞の後ろに加えないといけない。中国語も日本語と同様、経路を加えることで、文に完結性を持たせ、アスペクトが継続的から達成になり、文法的になる。中国語の移動表現も日本語、英語と同様、主語「约翰」の移動を表し、結果構文で働いている直接目的語制限は働いていないと言える。

日中英三言語の位置変化を表す表現 to the station、「駅へ走っていった」「到了车站」はそれぞれ主語である John、ジョン、「约翰」の移動を表している。すなわち、位置変化を表す表現は、結果構文の状態変化を表す結果述語と同様な扱いをすれば、移動表現を一種の結果構文としてみなし、非能格動詞を用いた移動表現では、日本語、中国語、英語も直接目的語制限は働かない。

移動様態動詞 dance を用いた移動表現とそれに対応する日本語と中国語は次になる。

(45) He danced into the room.

(45)の英語では、非能格動詞 **dance** に前置詞句 **into the room** をつけることで、完結性を持ち、主語である **he** が終点まで移動した解釈になる。

(46)a.??彼は部屋に踊った。

b.?彼は部屋に踊って入った。

c.彼は部屋に踊って入っていった。

(46a)のように、「踊る」は動作動詞で継続性を持ち、完結性を持たないため、かなり不自然な文になる。一番自然な文にするには、(46c)のように、経路を表す「入る」をつける上に、移動を表す「行く」もつけることである。この移動表現の例文では、動詞がバラバラに移動の様態、経路、移動の意味役割を担っていることがわかる。さらに、(46c)の日本語の移動表現は(46b)と同様、主語の「彼」が終点である「部屋」の中に入ったどうかは言及していない。

(47)a. \*他 跳 了 房间。

彼 ジャンプ PFV 部屋

b. 他 跳 舞 跳 进 了 房间。

彼 踊る ダンス 踊る 入る PFV 部屋

「彼は踊って、部屋に踊って入っていった。」

(47a)の中国語では、非能格動詞である移動様態動詞「跳」に終点である「房间」をつけると、非文になる。それは「跳」が動作動詞であるため、完結性を欠け、終点と共起できないと考えられる。(47b)では動詞コピー文<sup>38</sup>を用いたのは、様態動詞「跳」だけでは、「ダンスをする」の「跳」か「ジャンプをする」の「跳」かに限定できないため、「跳舞」(ダンスをする)を用い、さらに動詞コピー文という構文を使ったことになる。(47b)は日本語と同様、経路を表す「进了房间」(部屋に入った)を動詞の後ろにくっつけることで、文法的になる。また、英語と同様、主語である「他」が終点まで移動し、到着したという解釈になる。

まとめると、移動表現を一種の結果構文としてみなすと、(42)-(47)の日中英三言語において非能格動詞を用いた移動表現は直接目的語制限が働かないことがわかる。この点において、三言語は共通している。

<sup>38</sup> 動詞コピー文とは、呂 (1999: 355) 李, 石 (1997)で言及した「动+宾+动+了+数量」(動詞+目的語+了+数量詞)の「动+宾+动」の部分である。具体的な構文は「主語+動詞+目的語+動詞+補語」になっている。その中の二つの動詞が同じ動詞になっているのが特徴的であり、この特徴で「動詞コピー文」と呼ばれている。

### 5.3.2 構造距離叙述関係仮説からの説明

4.4 節で日本語、中国語、英語の三言語の結果構文における直接目的語制限について考察してきたように、英語と日本語では直接目的語制限が働くが、中国語の結果構文では直接目的語制限が働いていない。(ただし、4.4 節(87)参照。)そのため、直接目的語制限の代わりに、4.4 節(86)の構造距離叙述関係仮説を立て、日本語、中国語、英語の三言語とも、構造的距離がより近いほうを叙述するとした。また、前節で、移動表現では直接目的語制限が働かないことがわかった。そこで、移動表現でも構造距離叙述関係仮説が成立するかどうかを見てみよう。

#### 5.3.2.1 移動表現の統語構造と構造距離叙述関係仮説

本節では、構造的距離は Rosenbaum (1965: 10)が述べたように、行き着く枝の数で決まるものとする。前置詞句が文頭にある例を見てみよう。

(48)a. From the water, John pulled a fish.

b. Out of the water, John pulled a fish.

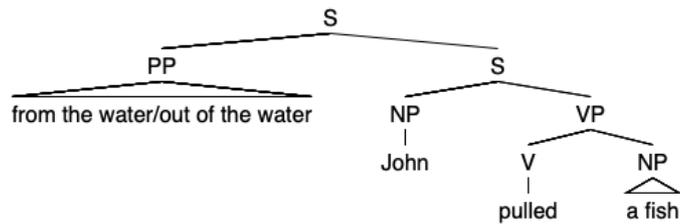
(48a, b)はそれぞれ起点を表す *from the water* と終点を表す *out of the water* を用いた例である。3.5 節で考察したように、構造的曖昧性があることで、解釈も曖昧になる。(48a)は *the water* が John の居場所を表し、John が水の中において、John がその水の中から居場所が無指定である魚を引き上げたという状況で使うことができる。一方、弱い解釈として、不自然な解釈にはなるが、*the water* が John でなく魚の居場所を示し、居場所が無指定である John が水の中にいる魚を引っ張り上げたという解釈もできる。魚の居場所を表す文をより自然にするには、具体的に魚の居場所や対比的な文を加えたほうがより自然な文になる<sup>39</sup>。(48b)は *the water* が John の居場所を表し、John が水の中において、John がその水の外に場所が無指定の魚を引き上げたという解釈ができる。一方、(48b)の弱い解釈として、*out of the water* (水の外) が魚の居場所を示し John が水の外に位置している解釈もできる。まとめると、強い解釈として、前置詞句である *from the water* と *out of the water* は主語である John の移動の起点と終点をそれぞれ表し、弱い解釈として、主語ではなく目的語の居場所を表すことも不可能ではない。(48a, b)の構造は、次の(49a)で示している PP が VP の中にある構造と、(49b)で示している PP が VP の外にある構造の二つの可能性が考えられる。

<sup>39</sup> この点については第3章ですでに考察した。次の(i)と(ii)のように、魚の居場所や対比の文を加えることでより自然な文になる。

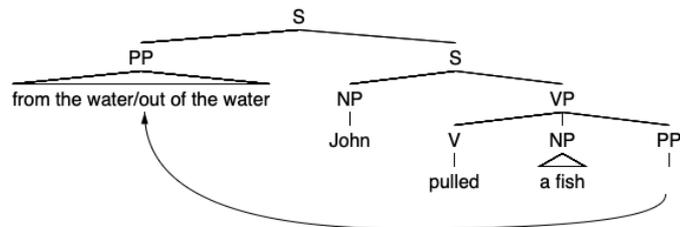
(i) From the water, he pulled a big fish, and it slid into the lake. (=3.5.1.1 節の(94))

(ii) From the air, he pulled a floating feather. From the water, he pulled a big fish. (=3.5.1.1 節の(95))

(49)a.



b.



PP=from the water/out of the water が主語 John の居場所を表す解釈の場合、(49a)のような構造が考えられる。その場合、PP は主語との構造的距離のほうが目的語との構造的距離より近い。なぜなら、PP から主語までの枝の数は3つで、目的語までは4つだからである。従って、PP が目的語とではなく、主語と叙述関係になることが、構造的距離を枝の数で測る構造距離叙述関係仮説で正しく予測できる。PP が目的語 fish の居場所を表す弱い解釈の場合、移動を含んだ(49b)のような構造が考えられる。その場合、PP は移動する前の位置で、主語との構造的距離より、目的語との構造的距離がより近い。PP から目的語への枝の数は2つで、主語への枝の数は3つであるからである。従って、PP がより近い目的語と叙述関係になることは、移動前の距離に基づけば、構造距離叙述関係仮説で予想できる。

以上、日中英の結果構文だけでなく、英語の移動表現でも、構造距離叙述関係仮説が叙述対象の選択に影響し、解釈の強さに影響していると言えるだろう。英語では、強い解釈ではあるが、目的語ではなく主語の移動の起点あるいは終点を表すことができることから、他動詞を用いた移動表現では直接目的語制限は強くは働いていないということになる。本論では、直接目的語制限で三言語の移動表現の叙述関係を説明することはせず、構造距離叙述関係仮説だけで説明する。

次は、日本語の移動表現を見てみよう。(48)と対応する日本語は次の(50)になる。

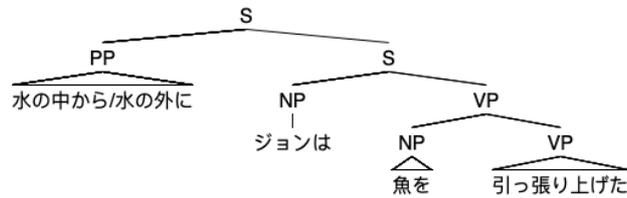
(50)a. 水の中からジョンは魚を引っ張り上げた。

b. 水の外にジョンは魚を引っ張り上げた。

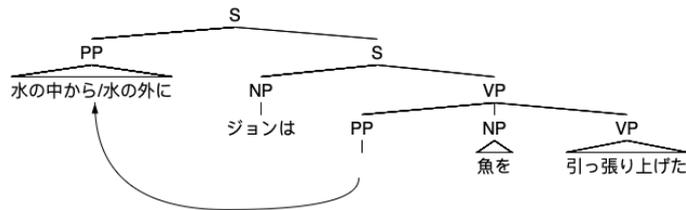
日本語の場合も解釈に曖昧性があり、(50a, b)のどちらも二つの解釈ができる。「水の中から」と「水の外に」というPPが文頭に現れる場合、PPが主語「ジョン」を叙述する

解釈では、PP は下の(51a)のように最初から VP の外の文頭にあり、一方、PP が目的語「魚」を叙述する解釈では、PP は(51b)のように VP から文頭に移動していると考えられる。

(51)a.



b.



(51a)では、PP「水の中から/水の外に」から主語「ジョン」までの枝の数は3つで、目的語「魚」までは4つであることで、構造距離叙述関係仮説によると、PPは目的語「魚」ではなく、より近いほうの主語「ジョン」を叙述することになる。(51b)では、移動前の距離に基づくと、PPから主語「ジョン」までの枝の数は3つで、目的語「魚」までは2つであるので、同仮説によると、PPは移動する前の位置では主語「ジョン」ではなく、より近いほうの目的語「魚」を叙述することになる。以上の日本語の移動表現の例からわかるように、日本語でも構造距離叙述関係仮説で、PPの叙述関係を説明できることがわかる。ただし、構造距離叙述関係仮説は、英語と同様日本語でも、移動前の構造を見ていることになる。

日本語も英語も、構造距離叙述関係仮説で、PPとその叙述対象との叙述関係を説明することができた。次は中国語を見てみよう。

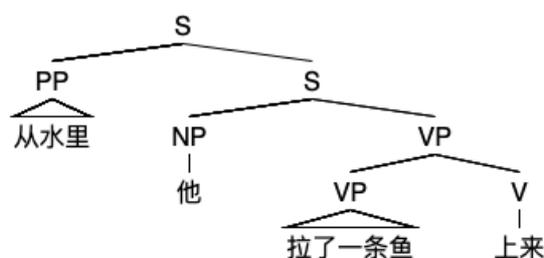
PP「从水里」を文頭に置くと、次の(52)になる。(52)は3.5.1.2節の(104)と同様である。)

(52) ?从 水里， 他 拉 了 一条 鱼 上 来。  
 から 水中 彼 引っ張る PFV 一匹 魚 上がる 来る  
 「水の中から、彼は一匹の魚を引っ張り上げてきた。」

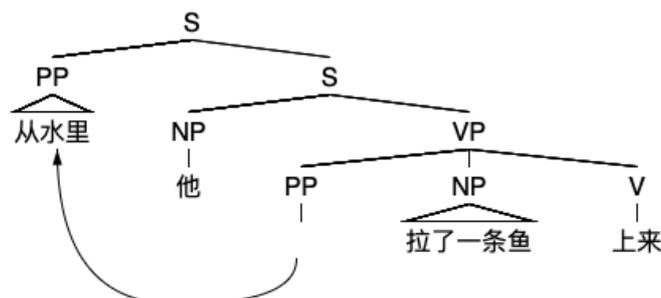
3.5.1.2節で考察してきたように、PP「从水里」を文頭に置いた(52)は不自然な文になる

が、日本語の(50a)と同様、二つの解釈ができる。一つは、PPが主語「他」(彼)を叙述する解釈で、その場合次の(53a)のように、PPが最初からSに付加している構造が考えられる。もう一つは、PPが目的語「一条鱼」(一匹の魚)を叙述する解釈で、その場合(53b)のように、PPがVPの中から文頭に移動してSに付加した構造が考えられる。

(53)a.



b.



(53a)では、PP「从水里」から主語「他」までの枝の数は3つで、目的語「一条鱼」までは4つであるので、構造距離叙述関係仮説によると、PPは目的語「一条鱼」ではなく、構造的距離がより近いほうの主語「他」を叙述することになる。(53b)では、移動前の構造に基づくと、PPから主語までの枝の数は3つで、目的語「一条鱼」までは2つであるので、同仮説によると、PPは移動する前の位置で主語「他」ではなく、構造的距離がより近いほうの目的語「一条鱼」を叙述することになる。以上の中国語の移動表現の例からわかるように、中国語でもPPの移動前の構造に基づいて、構造距離叙述関係仮説でPPの叙述関係を説明できることがわかる。

日中英三言語の移動表現の叙述関係をまとめると、三言語とも、PPの移動前の構造に基づいて、構造距離叙述関係仮説で叙述関係が説明できる。前置詞句の叙述対象は、構造的距離によって決まり、より近い構造的距離にある対象の居場所や移動先や移動元を表すことになる。

### 5.3.2.2 結果構文の統語構造と構造距離叙述関係仮説

前節では三言語の移動表現で構造距離叙述関係仮説が働いているかどうかを見てき

た。すでに 4.4.3.2 節で、三言語の結果構文で構造距離叙述関係仮説が働いていることを述べたが、本節では、樹形図を通して、そのことを確かめる。

まずは英語と日本語の結果構文から確かめてみよう。

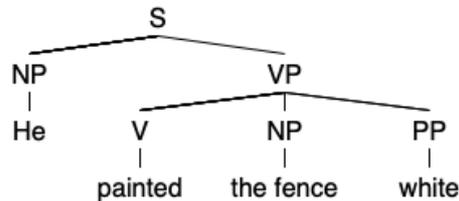
(54)a. He painted the fence white.

b. 彼はフェンスを白く塗った。

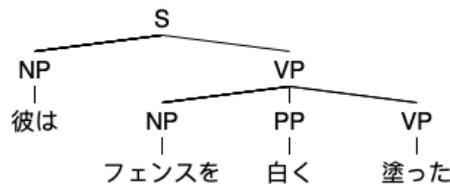
(影山 2001: 163)

(54a)と(54b)の構造はそれぞれ次の(55a)と(55b)のようなものが考えられる。

(55)a.



b.



(55a)の英語の結果構文の構造は、結果述語 **white** が VP の中にあり、目的語 **the fence** まで、2つの枝を辿って行き着く。主語 **he** までは、3つの枝を辿って行き着く。構造距離叙述関係仮説によると、行き着く枝の数が少ない目的語のほうを叙述することになる。

(55b)の日本語の結果構文の構造は、結果述語「白く」は VP の中にあり、目的語「フェンス」まで、2つの枝を辿って行き着く。主語「彼」までは、3つの枝を辿って行き着く。構造距離叙述関係仮説によると、行き着く枝の数が少ない目的語のほうを叙述することになる。

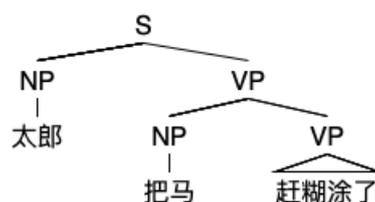
中国語の結果構文では、結果述語が主語と目的語のどちらとも距離が同様で、どちらも叙述可能であることを 4.4.3.2 節で見てきた。「把」構文を用いる場合、構造的距離を変えることで、叙述する対象を変えることができる。その「把」構文を用いた結果構文の樹形図を見てみよう。「把」構文を用いた結果構文の例は、次の(56) (4.4.3.2 節の(69))を「把」構文にしたもの)と(57) (4.4.3.2 節の(68))を「把」構文にしたもの)である。

- (56) 太郎 把 馬 赶 糊涂 了。  
 太郎 SA 馬 驅り立てる ボケる PFV  
 「太郎が馬を追って、馬がわけがわからなくなった。」

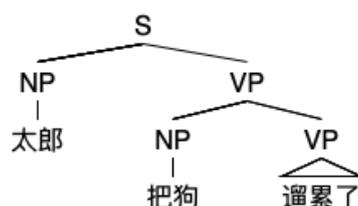
- (57) 太郎 把 狗 遛 累 了。  
 太郎 SA 犬 散歩させる 疲れる PFV  
 「太郎が犬を散歩させて、犬が疲れた。」

(56)と(57)の樹形図は、それぞれ次の(58)と(59)になる。

(58)



(59)



(58)の樹形図で示しているように、結果述語「糊涂」(ボケる)はVPの中にあり、目的語「馬」(馬)までに、3つの枝を辿って行き着く。主語「太郎」(太郎)までには、4つの枝を辿って行き着く。構造距離叙述関係仮説によると、行き着く枝の数が少ない目的語「馬」を叙述することになる。(59)も同様のことが言える。結果述語「累」(疲れる)はVPの中に位置し、構造距離叙述関係仮説によると、結果述語「累」(疲れる)が目的語「狗」(犬)との構造的距離は、主語「太郎」(太郎)との構造的距離より近いため、目的語を叙述することになる。

以上見てきた日中英三言語の樹形図からわかるように、三言語すべてにおいて、移動表現も結果構文も、叙述関係が構造距離叙述関係仮説で説明される。

#### 5.4 まとめ

本章では、結果構文の直接目的語制限は、日本語と英語では働くが、中国語では働かないと主張した。一方、移動構文では、三言語とも直接目的語制限に対応する制約がな

いように見える。しかし、解釈上は結果構文における結果述語の叙述対象も、移動表現における位置変化述語の叙述対象も、叙述とその叙述先である対象との構造的距離が影響している点で三言語が共通していると主張した。すなわち、結果構文と移動表現の二つとも第4章で提案の(86)の構造距離叙述関係仮説が適用できる。さらに、日本語の許容可能な移動表現では、結果をキャンセルすることができないことから、「本来的／弱い結果構文」と類似性を持ち、許容度が低い日本語の移動表現は結果をキャンセルできることから、「派生的／強い結果構文」と類似性を持っていると言える。

## 第6章 結論

本研究では、日本語、英語、中国語の三言語を対象にして、移動表現と結果構文に関する統語論と意味論の観点から、移動表現と結果構文の対照研究を行なった。三言語の移動表現と結果構文に見られる共通点と相違点について、論を重ねてきた。以下、三つの観点から結論を述べる。

### 6.1 日本語、中国語、英語の三言語の移動表現

本研究は Talmy (1985, 2000) の類型論を再考し、さらにそれを発展させた Lamarre (2003) などの主張に対して、中国語の移動表現は、英語よりはむしろ、日本語に類似していることを明らかにした。中国語では、Lamarre (2003) の主張に反し、様態のない移動表現だけではなく、様態のある移動表現でも、動詞枠付け言語の特徴を示す構文がある。具体的には、完了アスペクト「了」の分布、疑問文の応答、否定のスコープの三つの側面から意味的主要部と統語的主要部を考察することで、中国語の方向補語は経路でありながら、動詞になっている。完了アスペクト「了」の分布の考察から、Talmy による中国語の分類の判断基準になる方向補語を、衛星としてみなすことはできない。そして、否定のスコープと意味的焦点の考察から、到着点のような地 (Ground) の要素を入れた移動表現では、中国語は動詞枠付け言語の特徴を表している。疑問文を含む応答と意味的焦点の考察から、地の要素が含まれていない場合、意味的焦点を判断することはできないが、地の要素を含む場合は、経路を表す方向補語は意味的焦点であり、動詞である。つまり、衛星とは言えないため、動詞枠付け言語と特徴付けられると主張した。この点で、中国語は、動詞枠付け言語である日本語と類似している。従って、Talmy による中国語の移動表現の分類において、方向補語を衛星とみなすことは妥当ではない。

Talmy (1985, 2000) の類型論では、経路が何によって表現されるかが分類の判断基準になっているが、場所 (Place) と経路を共に Path として一括している。これに対し、本研究では、場所と経路を分けて考え、日本語の移動表現において、経路は動詞ではなく、後置詞の「に」「へ」「まで」が経路であるという、Talmy の類型論とは異なる視点から、日本語、中国語、英語それぞれの移動表現の特徴とそれらの関連性を探った。具体的には、言語によって文の完結性に影響を与えている要素が異なる。英語では前置詞句だけが完結性に影響を与えているのに対し、日本語では、位置変化を表す動詞と、終点を表す後置詞句との共起が完結性を決める。中国語では、位置変化を表す動詞と、終点を表す名詞句との共起が完結性を決める。

Talmy (1985) は移動表現において、衛星枠付け言語では、移動と様態が動詞に融合していると説明している。しかし、移動の意味が含まれていない動作動詞の場合は、同様の分析を行ってはいけなくと考えられ、移動の意味は動詞、前置詞 (句) / 後置詞 (句)

のいずれに含まれているかについて、三言語間で再考を行った。さらに、動詞自体に移動の意味が含まれていない「東京までずっと寝ていた」のような特殊な構文で、移動の意味はどこから出てくるのかも考察を行った。具体的には、Vendler (1967)の分類で活動動詞に分類された「寝る」「泣く」「降る」や瞬間動詞に分類された「死ぬ」「殺す」が「東京までずっと寝ていた」構文の動詞として使われた場合や、それと対応する英語及び中国語の表現を考察した。日本語では、「ずっと」は時間の継続のみを表しているのに対して、中国語では、日本語の「ずっと」と対応する「一直」と「一路」との使い分けで、時間の継続と移動を区別して表現できる。さらに、日本語はマデ句で移動を表し、英語は *all the way* で、中国語は「一路」で移動を表しているが、三つの表現はどれも副詞であることが共通している。また、移動の意味が含まれていないEO心理動詞

(Experiencer-Object verbs) でも、移動を日英では前置詞句／後置詞句で、中国語では動詞句で表現することができる。以上のことから、Talmyの見方と異なり、移動の意味がない動詞が使われた場合、移動の意味は前置詞句／後置詞句／副詞句／動詞句で表すことができることがわかった。

前置詞句／後置詞句の構造的位置と統語的移動についての考察も行った。前置詞句／後置詞句が表しているのは、主語の移動の方向なのか、目的語の移動なのか、あるいは主語や目的語の居場所なのかは、言語によって異なる。文中に位置する前置詞句／後置詞句が動詞句の中にあるのか、外にあるのかの解釈がしばしば曖昧である。前置詞句／後置詞句の統語的移動において、中国語も英語も動詞句の中から文頭に移動すると、対比的に解釈される限り、文は自然になる。中国語の「把」を伴う目的語の統語的移動において、「把+目的語」は動詞句内にとどまるため、前置詞句は目的語の居場所しか表せないことになる。

## 6.2 日本語、英語、中国語の三言語の結果構文

日本語、英語、中国語の三言語における結果構文の動詞と結果述語の因果関係や、動詞に含まれる状態変化の意味の有無からの考察をした結果、次のようなことがわかった。

英語の結果構文では、動詞が非能格動詞の場合、状態変化の意味が含まれていないが、擬似目的語を結果述語と共に使うと、結果構文が成立する。動詞が目的語をもとと取る他動詞の場合は、動詞に状態変化が含まれていれば、結果構文が成立する。一方、状態変化を含まない他動詞は、結果述語との因果関係が弱くなることになる。それでも、結果構文が成立する。ただし、他動詞と結果述語との因果関係が想起されない場合は、結果構文は成立しない(第4章表2参照)。

それに対し、日本語では、非能格自動詞を用いた結果構文は存在しないが、他動詞を用いてその動詞の中に状態変化の意味が含まれ結果述語が表す意味が予測される場合は、英語と同様、結果構文が成立する。しかし、他動詞に状態変化が含まれておらず、

動詞の意味から予測される範囲内ではない結果述語が選ばれると、予測される範囲内の結果述語が選ばれた場合より、文の容認度がさらに悪くなる（第4章の注7を参照）。

しかし中国語では、英語や日本語と違って、動詞の意味から予測ができない場合でも、結果構文が容認できる場合がある。例えば、選ばれた結果述語が意味的に自然であれば、結果構文が成立する（第4章(21b)参照）。

英語の結果構文は SVO<sub>[rAP/PP]</sub>、日本語の結果構文は SO<sub>[rAP/PP]V</sub>、中国語の「把」を用いた結果構文は S 把 OV<sub>[rAP/VP]</sub>の形をしている。三言語とも結果述語が目的語の結果状態を叙述し、直接目的語制限を守っているように見えるが、中国語の SV<sub>[rAP/VP]O</sub> という語順になっている結果構文では、主語と目的語のどちらも結果述語の叙述の対象になれる中国語の結果構文も存在する。この点で、中国語の結果構文は直接目的語制限に違反しているように見える。よって、本研究では直接目的語制限で三言語の結果構文の叙述関係を説明するのではなく、構造的距離の視点から三言語の結果述語の叙述対象の決定のされ方を説明した。三言語とも結果述語の対象が、主語しかない場合は、主語しか叙述できない。主語と目的語がある場合は、構造的距離がより近いほうが叙述対象として選ばれる。結果述語が目的語と主語の間に位置し、どちらからの構造的距離も等しいとみなせる中国語の場合は、目的語と主語のどちらも叙述の対象になることができる。すなわち、三言語とも構造距離叙述関係仮説が適用し、結果述語は、可能な叙述対象が二つあったとき、構造的距離がより近いほうを叙述する点で共通しているのである。

### 6.3 日本語、英語、中国語の三言語の移動表現と結果構文の共通点と相違点

三言語の共通性として、移動表現と結果構文に現れる、中国語の方向補語／結果補語、英語の前置詞句、日本語の後置詞句はどれも、変化を表している。

文の構造から見ると、日本語では様態動詞の次にもう一つ位置変化を表す動詞を加えることで文法的になったが、対応する中国語も同様に様態動詞の次に、位置変化を表す動詞を加えることで文法的になっているように見えた。この見方では、中国語は日本語と同様な構造であるように見えるが、影山 (2002)のケジメの概念から見ると、移動表現においては、日本語では位置変化を表す動詞を加えることでケジメをつけているが、中国語は英語と同様、終点句や起点句でケジメをつけていることになる。結果構文においては、日本語では状態変化を表す動詞を加えてケジメをつけているが、中国語は英語と同様、結果述語でケジメをつけている。つまり、ケジメの観点では、中国語は実は日本語ではなく、英語とより似ているのである。ただし、ケジメとして働く要素の品詞は異なる。中国語では動詞句でケジメをつけているが、英語では前置詞句でケジメをつけている。

移動表現を一種の結果構文とみなして、完結性の有無と結果キャンセル可能性との関係を考察した。一種の結果構文とみなした移動表現と、「本来的／弱い結果構文」「派生

的／強い結果構文」との類似性を見ると、次のことがわかる。中国語と英語の移動表現は、結果構文と同様に、派生的な結果構文と本来的な結果構文が存在している。さらに、移動表現も結果構文も、派生的な結果構文であろうと、本来的な結果構文であろうと、両言語とも結果をキャンセルすることができない。それに対し、方向しか表さない動詞（中国語）／前置詞（英語）が使われた場合は、両言語とも結果をキャンセルすることができる。一方、日本語では中国語英語と違って来る。日本語の結果構文は、本来的な結果構文は存在するが、派生的な結果構文は存在しないか不自然である。そして本来的な結果構文は結果をキャンセルすることができない点で英中と同様であるが、派生的な結果構文は不自然さを棚上げすれば、英中と違って結果をキャンセルすることができる。日本語の移動表現においても、本来的な結果構文は結果をキャンセルすることができないが、派生的な結果構文は結果をキャンセルすることができる。

構造的距離の考察から、構造距離叙述関係仮説という仮説を立てた。（この仮説については、杜・佐野 (2024)で発表している。）移動表現と結果構文について、三言語とも、位置変化を表す前置詞句や状態変化を表す結果述語と、主語や目的語との構造的距離が、意味の解釈に影響を与える。そのような前置詞句や結果述語が、主語よりも目的語と構造的距離が近い場合、目的語を叙述する解釈になる。一方、目的語より主語と構造的距離が近い場合、主語を叙述する解釈になる。さらに、位置変化を表す前置詞句や状態変化を表す結果述語が、主語と目的語の間に位置する場合、すなわち、主語と目的語との構造的距離が同様になる場合、主語か目的語かを叙述する可能性も同様になる。

#### 6.4 本研究の意義

移動表現の考察から、中国語の方向補語は、Talmyの意味での衛星と統語的な振る舞いが異なることから、Talmyの分類はすべての言語に適用するとは限らないと言える。さらに、移動の意味について、移動様態動詞だけでなく、動作動詞、副詞句、前置詞句／後置詞句でも、文全体に移動の意味を含意させることがあることから、移動の意味はどこから出てくるかに新たな視点見方を提案した。

日中英三言語の結果構文において、動詞に状態変化の意味が含まれない場合、英語では、結果述語との因果関係が弱くても文が成立する。日本語では、結果述語との因果関係が弱く動詞の意味から結果状態が予測される範囲内ではない結果述語が選ばれると、文の容認度が悪くなる。一方、中国語の独特な特徴として、動詞の意味から結果状態が予測されない場合でも、英語と違い容認できる場合がある。中国語は結果述語の選び方が相当自由であると言えるだろう。直接目的語制限が当てはまらない中国語でも、それが当てはまる英語、日本語でも、構造的距離で三言語間の共通性を捉えられることから、言語の構造の重要性を示唆した。移動の結果を持つ移動表現を一種の結果構文とみなすと、結果構文の分類である派生的／強い結果構文と本来的／弱い結果構文という分類を、移動表現も当てはめることができる。そうすると、中国語と英語の移動表現は、

結果構文と同様に、派生的な結果構文と本来的な結果構文が存在することになる。さらに、移動表現も結果構文も、派生的な結果構文であろうと、本来的な結果構文であろうと、英中両言語とも結果をキャンセルできない。一方、日本語の移動表現においては、本来的な結果構文は結果をキャンセルすることができないが、派生的な結果構文に不自然さはあるが、結果をキャンセルすることができる点で、英中と異なる。

本研究は日本語、中国語、英語の三言語の間でも、また、移動表現と結果構文という構文の間でも、共通性があることを明らかにし、構造距離叙述関係仮説という仮説を提案した。本研究の主張にはさらなる検討を要する部分も少なくないが、統語論と意味論的研究に基づいた言語分析に新たな視点を提供するものである。

## 6.5 今後の課題

本論文で残された課題は次のとおりである。

結果構文においては、日本語では状態変化の意味が含まれていない動詞、つまり、動作動詞だけでは、英語と違って非文になるが、さらにもう一つ状態変化を表す動詞を加えると文法的になることを指摘した。本論文で扱った複合動詞「泳ぎ着く」「たたき延ばす」は、中国語の結果構文（動作動詞と結果状態を表す動詞の組み合わせ）と類似性が出てくると思われる。しかし、本論文では中国語との詳細な対比は行わなかった。そのため、今後は日本語の状態変化を表す動詞を加えて文法的にした結果構文と中国語の対応する結果構文とを詳しく対照する必要がある。さらに、「泳いで着く」「たたいて延ばす」のような「て」形で接続した表現も中国語との対照をする必要があると考える。

また、結果述語の叙述対象を結果述語との構造的距離で説明を行ったが、その説明では、中国語では主語と目的語がある場合は、結果述語との構造的距離が等しければ、目的語と主語のどちらも叙述の対象になることができ、叙述対象と結果述語の関係が意味的に自然であれば、結果構文が成立するとした。「太郎吃累了饭」（太郎はご飯を食べて疲れた）では、結果述語「累」（疲れる）は主語と目的語との距離が同様であり、統語的にはどちらでも叙述可能であるが、ご飯は疲れることがないので、意味的に主語しか叙述しないことになる。しかし、今の例と同様な構造を持っている結果構文「?太郎涂累了墙壁」（太郎は壁を塗って、太郎が疲れた）では、意味的には壁が疲れることがないので、主語の太郎が疲れたという解釈しかできないはずだが、実際は叙述対象の判断に揺れが生じて、目的語である壁を結果述語が叙述した、壁が疲れるという意味的に不自然な解釈のほうにも判断が揺れる。つまり、厳密に言えば直接目的語制限が完全に働いていないとは断言できない。直接目的語制限の働きは今後さらに研究を進めるべきだと考える。

先行研究では、移動表現を一種の結果構文とみなすと、結果構文で働く直接目的語制限は、自動詞を用いた移動表現には当てはまらなくなると指摘されている。それは、結果構文の結果述語に対応する位置変化を表す表現は、目的語ではなく主語の移動を表し

ているからである。しかし、中国語の結果構文では、「太郎吃累了」（太郎は食べて疲れた）のように自動詞を用いた結果構文の場合、結果述語は主語を叙述することが可能である。移動表現でも同様に自動詞を用いた場合、結果述語と対応する表現は主語の移動を表すことができる。叙述対象が移動表現でも結果構文でも主語になることができるという点で、中国語では移動表現は一種の結果構文と言えるだろう。直接目的語制限と構造的距離との両方の側面から移動表現と結果構文の共通性について今後さらに研究を進めるべきと考える。

## 参考文献

<日本語文献>

- 石村広 (2000) 「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」『中国語学』第 247 号, 日本中国語学会, pp. 142-158.
- 石村広 (2008) 『中国語の結果構文に関する研究:VR 構文の意味構造とヴォイス』東北大学大学院文学研究科言語科学専攻博士論文.
- 石村広 (2011) 『中国語結果構文の研究-動詞連続構造の観点から-』白帝社.
- 今井敬子 (1985) 「「結果を表す動補構造」の統辞法」『中国語学』232, pp. 23-32.
- 于一楽 (2015) 「中国語結果複合動詞の意味構造と項の具現化」『語彙意味論の新たな可能性を探って』 pp. 102-129, 開拓社.
- 上野城司 (2007) 「日本語における空間表現と移動表現の概念意味論的研究」ひつじ研究叢書.
- 王軼群 (2009) 『空間表現の日中対照研究 Frontier series 日本語研究叢書』23, くろしお出版.
- 小野尚之 (2007) 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』 pp. 67-101, ひつじ書房.
- 小原真子 (2007) 「移動表現の日英比較:小説とその翻訳を題材に」『神戸言語学論集』5, pp. 161-174.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- 影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』岩波書店.
- 影山太郎 (2003) 『「東京までずっと寝ていた」という構文の概念構造』『國文学 解釈と教材の研究』48(4), pp. 37-44.
- 影山太郎 (2006) 「結果構文のタイポロジーに向けて」『人文論究』56, pp. 45-61.
- 影山太郎 (編) (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店.
- 影山太郎 (2013) 『複合動詞研究の最先端 —謎の解明に向けて—』 pp. 3-46, ひつじ書房.
- 影山太郎 (2021) 『点と線の言語学 言語類型から見えた日本語の本質』くろしお出版.
- 岸本秀樹 (2015) 『文法現象から捉える日本語』開拓者.
- 木村恵介 (2003) 「現代中国語の結果複合動詞—今井 (1985)と呂 (1986)の検討」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』6, pp. 55-66.
- 木村恵介 (2007) 「中国語における動補型複合動詞」千葉大学博士学位論文.
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000) 「時・否定と取り立て」『日本語の文法 2』仁田義雄・益岡隆志 (編集) pp. 93-150, 岩波書店.
- 草山学・一戸克夫 (2005) 「日本語と英語の結果構文再考: Cause-Effect か行為の目的か」『日本認知言語学会論文集』第 5 巻, pp. 174-184.

- 邱林燕 (2017) 『中国語結果構文の統語論的研究』 北海道大学.
- 菅原剛 (2007) 「EO 心理動詞の意味構造」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム NO.3』 pp. 231-253, ひつじ書房.
- 高一波 (2017) 「日本語と中国語における移動表現について」 大阪大学博士学位論文.
- 崔玉花 (2006) 「中国語結果構文と直接目的語制約—英語・日本語結果構文との比較を通じて—」 『筑波応用言語学研究』 13, pp. 99-112.
- 崔玉花 (2008) 「中国語結果構文と非対格性—英語・日本語結果構文との比較を通じて」 『筑波応用言語学研究』 15, pp. 45-58.
- 崔玉花 (2011) 「日本語と中国語の結果キャンセル構文について」 言語学論叢 オンライン版 4 号.
- 崔玉花 (2013) 「日本語と中国語における結果を表す複合動詞—後項動詞の意味解釈を中心に」 『言語学論叢』 オンライン版第 6 号, 通巻 32 号, pp. 22-33.
- 崔玉花 (2019) 「中国語の非能格動詞に基づく結果構文と自他交替」 『言語学論叢』 オンライン版第 12 号, 通号 38 号, pp. 1-18.
- 杉村博文 (2000a) 「“走进来”について」 『中国語論集』 (荒屋勤先生古希記念) pp. 151-164, 白帝社.
- 杉村博文 (2000b) 「方向補語“过”の意味について」 『中国語』 1, pp. 58-60, 内山書店.
- 杉村博文 (2011) 「対立空間転位の諸相—方向補語再考」 『現代中国語研究』 第 13 期, pp. 15-30.
- 島村典子 (2010) 「現代中国語の移動を表す述補構造に関する研究」 大阪大学博士論文.
- 沈力 (1991) 「中国語の結果補語を取る[V-得]文の構造について」 『言語学研究』 9, pp. 58-92, 京都大学.
- 沈力 (1997) 「現代中国語の動詞構造の研究 - 語形成と句形成の平行性を中心に」 京都大学博士論文.
- 申亜敏 (2007) 「中国語の結果補語動詞の項構造と語彙概念構造」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』 第 3 巻, pp. 195-229, ひつじ書房.
- 申亜敏 (2009) 「中国語結果複合語の意味と構造—日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照及び類型的視点から」 東京外国語大学博士論文.
- 陳慧萍 (2019) 「結果複合動詞の日中対照研究」 東北大学博士学位論文.
- 田口善久 (1990) 「現代中国語の補語をともなう“得”の解釈について」 『東京大学言語学論集』 89, pp. 217-223.
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』 研究社出版.
- 苞山武義(1995) 「「V 得 R」 結果補語の分類と構造」 『中国語学』 242, pp. 96-103.
- 出水孝典 (2012) 「Talmy の類型論を再考する」 『六甲英語学研究』 15, pp. 25-79.
- 出水孝典 (2016) 「結果構文の翻訳から分かること : push the door open を題材に」 『立命館言語文化研究』 立命館大学国際言語文化研究所, 巻 27, 2・3 合併号, pp. 59-67.

- 杜天邑 (2020) 「現代中国語移動表現の動詞枠付けの性質: 統語的証拠からの考察と日本語との対照分析」『立命館文學』立命館大学人文学会 (668), pp. 1-16.
- 杜天邑 (2022) 「中国語、日本語及び英語における移動を表す前置詞句／後置詞句について—構造的位置と統語的移動の観点から—」『立命館文學』(678), 立命館大学人文学会, pp. 30-43.
- 杜天邑・佐野まさき (2024) 「構造的距離から見る中国語、日本語、英語三言語の移動表現と結果構文」漢日対比言語学研究(協作)会, 第十五届汉日対比言語学研讨会口頭発表, 上海.
- 當野能之・呂仁梅 (2003) 「着脱動詞の対照研究—日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較—」『世界の日本語教育』13.
- 濱口英樹 (2018) 「中国語の方向複合動詞について」『外国語教育フォーラム』13.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』(日英比較選書6), pp. 126-229, 研究社出版.
- 松本曜 (2008) 「空間移動の言語表現とその類型」『月刊言語』37(7): 36-43.
- 松本曜 (2017a) 「英語における移動事象表現のタイプと経路表現」松本曜(編)『移動表現の類型論』pp. 25-38, くろしお出版.
- 松本曜 (2017b) 「日本語における移動事象表現のタイプと経路表現」松本曜(編)『移動表現の類型論』pp. 247-274, くろしお出版.
- 丸尾誠 (1997) 「“V+到+L”形式の意味的考察」, 『中国言語文化論業』第1集, 東京外国語大学中国言語文化研究会, pp. 103-123.
- 丸尾誠 (2000) 「“去+VP”形式と“VP+去”形式について—VPが“去”の目的を表す場合—」, 『中国語学文学論集』第13輯, 名古屋大学中国語学文学会, pp. 27-42.
- 丸尾誠 (2001) 「中国語の移動動詞に関する一考察—着点との関連において—」『中国言語文化論業』第4集, 東京外国語大学中国言語文化研究会, pp. 1-22.
- 丸尾誠 (2003a) 「“V 来”形式にみられる「動作義」と「移動義」—継起的動作を表す場合—」『中国語』2月号, pp. 26-31, 内山書店.
- 丸尾誠 (2003b) 「“(S+) 従/在+L+VP”形式の表す移動概念」『日中言語対照研究論集』第5号, pp. 60-73, 日中対照言語学会: 白帝社.
- 丸尾誠 (2004) 「中国語の場所表現について—移動・存在義と方位詞の関連を中心に—」『日中言語対照研究論集』第6号, pp. 35-51, 日中対照言語学会: 白帝社.
- 丸尾誠 (2005a) 「中国語の方向補語“来/去”の表す意味について」『大東文化大学語学教育研究所創立20周年記念 現代中国語文法研究論集』, pp. 101-119.
- 丸尾誠 (2005b) 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社.
- 丸尾誠 (2006) 「複合方向補語における“来/去”について—出現義・消失義という観点から—」『中国語の補語』, pp. 79-100, 白帝社.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー』松柏社.

- 丸田忠雄 (2004) 「結果句と経路表現の認可条件について」『山形大学人文学部研究年報』1, pp. 3-15.
- 三原健一 (2022) 『日本語構文大全 第I巻 アスペクトとその周辺』くろしお出版.
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版.
- 宮腰幸一 (2009) 「日英語の周縁的結果構文：類型論的含意」小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』 pp. 217-265, ひつじ書房.
- 望月圭子 (1990a) 「日・中両語の結果を表わす複合動詞」『東京外国語大学論集』40, pp. 13-27.
- 望月圭子 (1990b) 「動補動詞の形成」『中国語学』237, pp. 128-137.
- 望月圭子・申亜敏 (2011) 「日本語と中国語の複合動詞の語形成」『汉日语言对比究论丛第二辑』2巻, pp. 46-72, 汉日对比语言学研究(协作)会, 北京大学出版社.
- 濱口英樹 (2017) 「中国語の結果複合動詞について」『関西大学外国語教育フォーラム』16, pp. 23-32.
- 安井稔・秋山怜・中村捷 (1976) 『現代の英文法第7巻 形容詞』研究社.
- 楊明 (2008) 「他動詞型の結果構文における動補構造の研究-構文文法のアプローチによる中・日・英語の対照研究-」千葉大学博士学位論文.
- 米山三明 (2009) 「意味論から見る英語の構造—移動と状態変化の表現を巡って」開拓者.
- Lamarre Christine (2017) 「中国語の移動事象表現」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』 pp.95-128. くろしお出版.

< 欧文文献 >

- Beavers, John, Levin Beth, and Shiao Wei Tham (2010) The typology of motion expression revisited. *Journal of Linguistics* 46 (2), pp. 331-377.
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications, Stanford.
- Bolinger, Dwight (1972) *Degree Words*, The Hague: Mouton.
- Chen, Liang and Jiansheng Guo (2009) Motion events in Chinese novels: Evidence for an equipollently-framed language. *Journal of Pragmatics* 41, pp. 1749-1766.
- Cheng, Lisa Lai-shen and C.-T. James Huang (1994) On the Argument Structure of Resultative Compounds, in Matthew Chen and Ovid Tzeng (eds.) *In Honor of William S.Y. Wang: Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, pp. 187-221, Pyramid Press.
- Demizu, Takanori (2015) Lexicalization Typology and Event Structure Templates: Toward Isomorphic Mapping between Macro-event and Syntactic Structures, *Kaitakusha*.
- Goldberg, Adele (1996) A semantic account of resultatives, *Linguistic Analysis* 21, pp. 66-96.
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff (2004) The English Resultative as a Family of Constructions, *Language*, pp. 532-568.

- Goldberg (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Hsueh, Frank F-S. (1989). The structure meaning of Ba and Bei constructions in Mandarin Chinese. *Functionalism and Chinese Grammar*, ed. by J. Tai and F. Hsueh, pp. 95-125. Chinese Language Teachers Association Monograph Series No.1. South Orange: Chinese Language Teachers Association.
- Huang, C. T. James (1984) On the Distribution and Reference of Empty Pronouns. *Linguistic Inquiry* 15, pp. 531-574.
- Huang, C. T. James (1987) Remarks on Empty Categories in Chinese. *Linguistic Inquiry* 18, pp. 321-337.
- Huang, C.-T. James (2006) Resultatives and Unaccusatives: A Parametric View. 『中国語学』 253, pp. 1-43.
- Huang, Chu-Ren and Fu-Wen Lin (1992) Composite Event Structures and Complex Predicate: A Template-Based Approach to Argument Selection, *Proceedings of the third Annual Meetings of the Formal Linguistic Society of Mid-America*, pp. 90-108.
- Inagaki, Shunji (2001) Motion verbs with goal PPs in the L2 acquisition of English and Japanese. *Studies in second language acquisition*, 23 (2), pp. 153-170.
- Inagaki, Shunji (2002) Motion Verbs with Locational/Directional PPs in English and Japanese. *Canadian Journal of Linguistics/Revue canadienne de linguistique*. 47(3/4): 187-234.
- Jackendoff, Ray (1996) The Architecture of the Linguistic-Spatial Interface, *Language and Space*, ed. By P. Bloom et al., pp. 1-30, MIT Press, Cambridge, MA.
- Kageyama, Taro (2004) All the way adjuncts and the syntax-conceptual structure interface. *English Linguistics*, 21(2), pp. 265-293.
- Klippel, Elizabeth Mary (1991) *The aspectual nature of thematic relations: Locative and temporal phrases in English and Chinese*, doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Koopman, Hilda (2010) Prepositions, postpositions, circumpositions, and particles. In Guglielmo Cinque & Luigi Rizzi (eds.), *Mapping of spatial PPs: The cartography of syntactic structures: Vol. 6*, pp. 26-73. Oxford: Oxford University Press.
- Lamarre, Christine (2007) The linguistic encoding of motion events in Chinese: With reference to cross-dialectal variation. *Typological studies of the linguistic expression of motion events*, 1. pp 3-33.
- Lamarre, Christine (2008) The linguistic categorization of deictic direction in Chinese - With reference to Japanese. In Dan XU (ed.) *Space in languages of China: Cross-linguistic, synchronic and diachronic perspectives*. Berlin/Heidelberg/New York: Springer, pp.69-97.

- Langacker (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, Beth. (2017) The elasticity of verb meaning revisited. Dan Burgdorf, Jacob Collard, Sireemas Maspong, and Brynhildur Stefánsdóttir (eds.) *Proceedings of the 27th Semantics and Linguistic Theory Conference*, pp. 571-599.
- Li, Charles Na. and Thompson, Sandra Annear (1981) *Mandarin Chinese: a Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Özçalışkan, Şeyda, Slobin, Dan I (2003) Codability effects of the expressions of manner of motion in Turkish and English. In: Özsoy, A.S., Akar, D., Nakipooğlu-Demiralp, M., Taylan, E.E., Aksu-Koç, A. (Eds.), *Studies in Turkish Linguistics*. Bogaziçi University Press, Istanbul, pp. 259–270.
- Peter S. Rosenbaum (1965) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. The MIT Press. Thesis (Ph.D.) .
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1996) Two types of derived accomplishments. In Miriam Butt and Tracy Holloway King (eds.) *The Proceedings of the First LFG Conference*. pp. 375-388. Stanford: CSLI Publications.
- Rappaport Hovav, Malka. and Beth Levin (1998) Building verb meanings. In Mirian Butt and Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*. pp. 97-134. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Shen, Li (2013) A comparative analysis of resultative verbal compounds in Chinese and Japanese: Compounding in syntax and lexicon. *Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Language*, pp. 14-15. Tokyo: NINJAL.
- Simpson, Jane (1983) Resultatives, in Lori Levin et. Al. (eds.), *Papers in lexical-Functional Grammar*, pp. 143-157. Indiana University Linguistics Club.
- Slobin, Dan Isaac (2004) The many ways to research for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In *Relating events in narrative: Typological and contextual perspectives*, ed. by Sven Strömquist and Ludo Verhoeven, pp. 219-257. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Spring, R. (2010) A look into the acquisition of English motion event conflation by native speakers of Chinese and Japanese. In *Proceedings of the 24th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, pp. 563-572.
- Suzuki, Takeru (2012) Strong Resultatives as a Bounded PathPP Construction: PathPP Structure and Parametrized Path Head Movement. *Coyote Working Papers*, 20, pp. 109-117.

- Sybesma, Rint (1999) *The Mandarin VP*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Tai, James HY. (1973) *On the center of predication in Chinese verb-complement construction*.  
Paper presented at 1973 Annual Meeting of Linguistics Society of America.
- Tai, James HY. (2003) Cognitive Relativism: Resultative Construction in Chinese. *Language and Linguistics* 3 (2), pp. 301-316.
- Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In T. Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description, Volume III: Grammatical Categories and the Lexicon*, ed. by Timothy Shopen, pp. 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Tianyi, Du (2022) All-the-Way Construction in English, Japanese and Chinese 『立命館文學』 (679), 立命館大学人文学会, pp. 95-106.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistic in Philosophy*. Cornell University Press.
- Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6 (1).
- Wechsler, Stephen (2005) Resultatives under the “Event-Argument Homomorphism” Model of Telicity, *The Syntax of Aspect: Driving Thematic and Aspectual Interpretation*, ed. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, 255–273, Oxford University Press, Oxford.
- Yotsuya Atsuko, Asano Masanao, Koyama Sayaka, Suzuki Kazunori, Shibuya Mayumi, Endo Kazuki, Iwagami Eri, Ono Minami, Takeda Kazue and Hirakawa Makiko (2014). Crosslinguistic Effects in L2 Acquisition: Strong/Weak Resultatives and the Directional/Locational Interpretation of PPs in L2 English by Japanese Speakers. In *Selected Proceedings of the 2012 Second Language Research Forum*, pp. 89-100. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Yuan, Wenjuan (2009) A Study of Language Typology and Comparative Semantics Human Locomotion Verbs in English and Chinese. *School of Foreign Languages Beihang University, Beijing, China*.

< 中国語文献 >

- 崔希亮 (2001) 「汉语空间方位场景与论元的凸显」『世界汉语教学』(04), pp. 3-11.
- 崔希亮 (2002) 「空间关系的类型学研究」『汉语学习』(01), pp. 1-8.
- 董秀芳 (2007) 「从词汇化的角度看粘合式动补结构的性质」『语言科学』(01), pp. 40-47.
- 董秀芳 (2017) 「动词后虚化完结成分的使用特点及性质」中国语文(03), pp. 290-298.
- 方经民 (1999a) 「汉语空间方位参照的认知结构」『世界汉语教学』(04), pp. 32-38.
- 方经民 (1999b) 「论汉语空间方位参照认知过程中的基本策略」『中国语文』(01), pp. 12-20.

- 方经民 (2002) 「论汉语空间区域范畴的性质和类型」『世界汉语教学』(03), pp. 37-48.
- 方经民 (2004a) 「现代汉语方位成分的分化和语法化」『世界汉语教学』(02), pp. 5-15.
- 方经民 (2004b) 「地点域/方位域对立和汉语句法分析」『语言科学』(06), pp. 27-41.
- 胡文泽 (2005) 「也谈“把”字句的语法意义」『语言研究』2005年第2期.
- Lamarre, Christine (2003) 「汉语空间位移事件的语言表达-兼论述趋势的几个问题」『现代中国語研究』5, pp. 1-18, 朋友書店.
- 卢英顺 (1991) 「谈谈“了<sub>1</sub>”和“了<sub>2</sub>”的区别方法」『中国语文』1999年第4期. 总第223期, pp. 275-278.
- 李讷, 石毓智 (1997) 「汉语动词拷贝结构的演化过程」『国外语言学』(03), pp. 32-38.
- 陆俭明 (2002) 「动词后趋向补语和宾语的位置问题」『世界汉语教学』(01), pp. 5-17.
- 吕叔湘 (1980) 《现代汉语八百词》(增订本), 商务印书馆
- 吕文华 (1995) 「关于对外汉语教学中的补语系统」『语言教学与研究』(04).
- 吕文华 (2001) 「关于述补结构系统的思考——兼谈对外汉语教学的补语系统」『世界汉语教学』(03), pp. 78-83.
- 马真 (2015) 《简明实用汉语语法教程(第二版)/21世纪汉语言专业规划教材·专业方向基础教材系列》北京大学出版社.
- 刘丹青 (2001) 「语法化中的更新、强化与叠加」『语言研究』(02), pp. 71-81.
- 刘丹青 (2002) 「汉语中的框式介词」『当代语言学』(04), pp. 241-253.
- 刘月华 (1998) 「趋向补语通释」北京语言文化大学出版社.
- 刘月华, 潘文娣, 故鞞 (1983) 『实用现代汉语语法』商务印书馆, pp. 209-228.
- 马庆株 (1997) 「“V来/去”与现代汉语动词的主观范畴」『语文研究』(03).
- 马真, 陆俭明 (1997) 「形容词作结果补语情况考察」『汉语学习』(06).
- 马志刚, 张孝荣 (2021) 「非宾格词素、致使义与汉语动结式词/句的句法辨析研究」『浙江外国语学院学报2021』(06)
- 杉村博文 (2010) 「可能补语的语义分析——从汉日语对比的角度」『世界汉语教学』(02), pp. 183-191.
- 杉村博文 (2015) 「论终端凸显式系列动作整合」『中国语文』(01), pp. 18-27.
- 沈家煊 (1994) 「“语法化”研究综观」『外语教学与研究』(04), pp. 17-24.
- 沈家煊 (1998) 「实词虚化的机制——《演化而来的语法》评介」『当代语言学』(03), pp. 41-46.
- 沈家煊 (2002) 「如何处置“处置式”——论把字句的主观性」『中国语文』(05), pp. 387-399.
- 沈家煊 (2003) 「现代汉语“动补结构”的类型学考察」『世界汉语教学』(03), pp. 17-23.
- 沈家煊 (2004) 「动结式“追累”的语法和语义」『宁夏大学学报』06期, pp. 32-34.
- 石毓智 (2000) 「如何看待语法规则的“例外”——从“吃饱饭”、“喝醉酒”现象谈起」『汉语学习』(06), pp. 29-30.
- 石毓智 (2002) 「汉语发展史上的双音化趋势和动补结构的诞生——语音变化对语法发展的

- 影响」『语言研究』(01), pp. 1-14.
- 石毓智 (2006) 「处置式产生和发展的历史条件」『语言研究』(03), pp. 42-49.
- 王红旗 (1996) 「动结式述补结构的语义是什么」『汉语学习』(01), pp. 24-27.
- 王红旗 (1999) 「动趋式述补结构配价研究」『语言研究』(01), pp. 142-152.
- 王红旗 (2001) 「动结式述补结构在把字句和重动句中的分布」『语文研究』(01), pp. 6-11.
- 王红旗 (2003) 「把”字句的意义究竟是什么」『语文研究』2003年第2期, pp. 35-40.
- 王力 (1943) 《中国现代语法(上)》商务印书馆.
- 王玲玲 (2001) 「漢語の動結結構句法與語意研究」, 博士學位論文:香港理工大學.
- 徐丹 (2001) 「从动补结构的形成看语义对句法结构的影响—兼谈汉语动词语义及功能的分化」『语文研究』(02), pp. 5-12.
- 薛玉萍 (2012) 「汉语运动事件框架语言类型归属的再思考」『东北师大学报(哲学社会科学版)』(02), pp. 219-221.
- 张伯江 (2000) 「论“把”字句的句式语义」『语言研究』2000年第1期, pp. 28-40.
- 张健 (1991) 「关于带“了”的动趋结构」『汉语学习』第2期, pp. 20-23.
- 张谊生 (2000) 「论与汉语副词相关的虚化机制——兼论现代汉语副词的性质、分类与范围」『中国语文』(01), pp. 3-15.
- 钟书能, 黄瑞芳 (2016) 「汉语动补结构类型学的认知研究」『外国语(上海外国语大学学报)』(03), pp. 20-30.
- 朱德熙 (1982) 『语法讲义』商务印书馆.
- [https://k.sina.cn/article\\_1887344341\\_707e96d504000cwgs.html](https://k.sina.cn/article_1887344341_707e96d504000cwgs.html)

コーパス :

- 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ-NT) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>
- 北京大学中国语言学研究中心 (Center for Chinese Linguistics PKU)  
[http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/index.jsp](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp) (略語を CCL にする)
- 大数据与语言教育研究所 (BLCU Chinese Corpus) <http://bcc.blcu.edu.cn> (略語を BCC にする)
- 国家语委现代汉语语料库 <http://www.cncorpus.org/> (略語を CNC にする)